

平成13年度

大阪市内埋蔵文化財包蔵地
発掘調査報告書

2003.3

大阪市教育局
(財)大阪文化財協会

例 言

1. 本報告書は平成13年度の国庫補助事業による大阪市内埋蔵文化財発掘調査の概要を集めたものである。
2. これらの調査は大阪市教育委員会が(財)大阪市文化財協会に委託して実施したものである。
3. 本報告書の執筆は(財)大阪市文化財協会 京嶋 寛の指揮のもとに各々の発掘担当者が担当した。その氏名は各報告に記してある。
4. 本報告書の編集は大阪市教育委員会文化財保護課において行った。

目 次

I 北 区

本庄東遺跡発掘調査（HH01-2）報告書	3
天神橋遺跡発掘調査（TJ01-1）報告書	9
高松藩蔵屋敷跡発掘調査（TK01-1）報告書	13

II 中 央 区

大坂城跡発掘調査（OS01-26）報告書	21
大坂城跡発掘調査（OS01-34）報告書	25
東心斎橋1丁目所在遺跡発掘調査（HB01-1）報告書	31

III 天王寺区

細工谷遺跡発掘調査（SD01-4）報告書	39
堂ヶ芝2丁目所在遺跡発掘調査（DS01-1）報告書	43
大道1丁目所在遺跡発掘調査（DA01-2）報告書	49

IV 浪 速 区

浪速元町遺跡B地点発掘調査（NK01-1）報告書	53
--------------------------------	----

V 東淀川区

崇禅寺遺跡発掘調査（SZ01-4）報告書	61
東淀川区小松4丁目における遺跡分布確認調査（KO01-1）報告書	67

VI 旭 区

森小路遺跡発掘調査（MS01-4）報告書	73
----------------------------	----

VII 城 東 区

榎並城跡伝承地発掘調査（EN01-5）報告書	83
------------------------------	----

VIII	阿倍野区	
	阿倍野筋南遺跡発掘調査（A S01-3）報告書	91
IX	住吉区	
	南住吉遺跡発掘調査（MN01-14）報告書	97
X	東住吉区	
	難波大道跡発掘調査（ND01-6）報告書	103
	桑津遺跡発掘調査（KW01-10）報告書	107
	酒君塚古墳発掘調査（SA01-2）報告書	113
	山坂遺跡発掘調査（YP01-3）報告書	119
XI	平野区	
	瓜破遺跡発掘調査（UR01-5）報告書	123

北 区

本庄東遺跡発掘調査(HH01-2)報告書

- ・調査箇所 大阪市北区本庄東2丁目3-13
- ・調査面積 27.3m²
- ・調査期間 平成13年7月6日～平成13年7月9日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 京嶋覚・杉本厚典

〈調査に至る経緯と経過〉

本庄東遺跡は上町台地から北へ延びる砂堆上に位置する。これまでの調査から現地地表下1.5～1.2mに弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物が遺存していることが判明しており、本調査地に隣接する場所で行われたHH97-1次調査では、弥生時代後期～古墳時代前期の土壇4基、溝1条が、また近世・近代の土壇・溝が多数検出されている(大阪市文化財協会1998)。

平成13年6月21日に試掘調査を行ったところ、現地地表下0.98～1.32mにおいて弥生時代後期の包含層が検出された。この結果をうけて7月6日から本調査を行うことになった。現代の盛土を重機で除去した後、近世～近代の包含層の上面で調査を行い、さらに弥生時代後期～古墳時代前期の包含層の調査を行った。7月9日にはすべての調査を終了した。

調査で用いた方位は磁北で、水準値はT.P.値である。

〈調査の結果〉

1. 層序(図3)

現地地表下約1.1mで弥生時代末～古墳時代前期の包含層に達した。包含層はTP+1.7～2.0mに

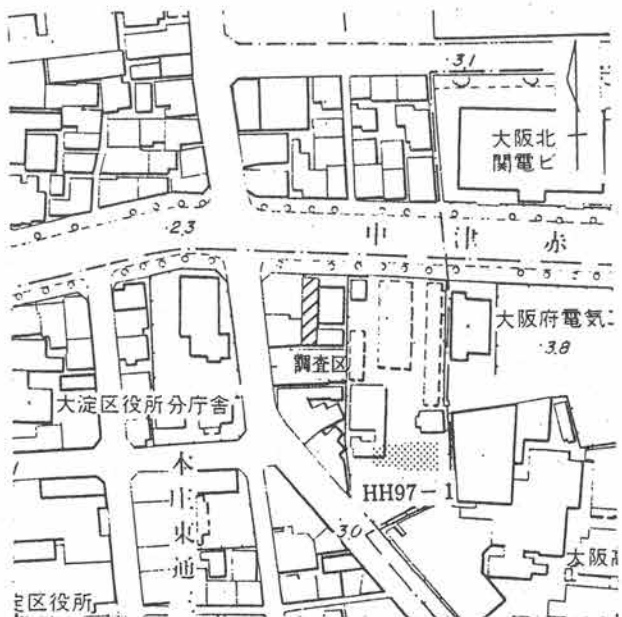


図1 調査地位置図(1:2,500)

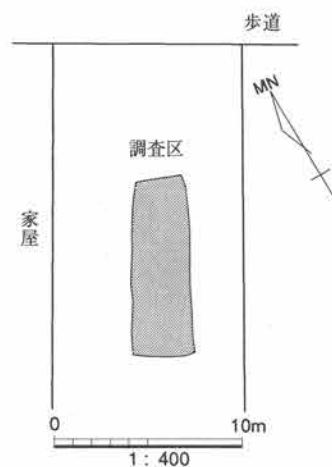


図2 調査区位置図

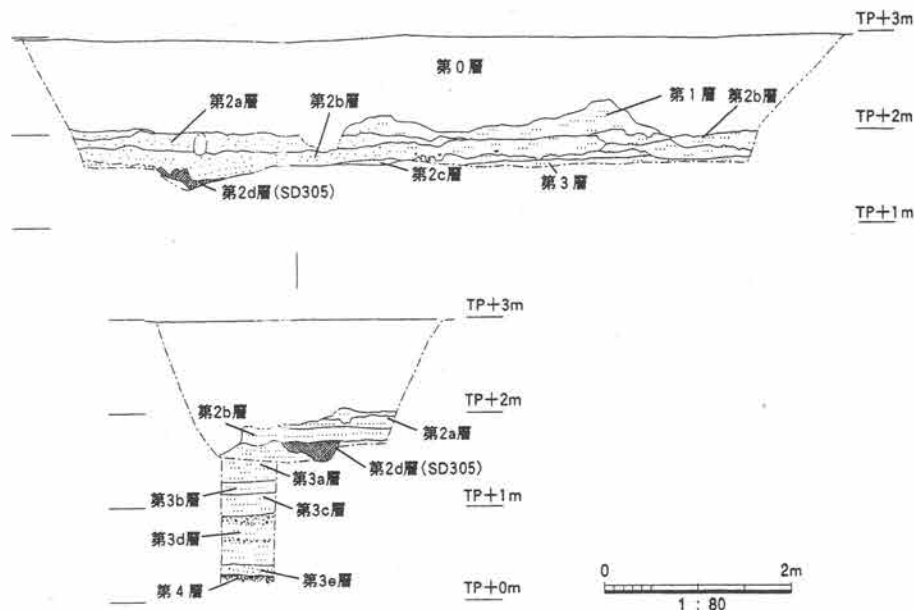


図3 地層断面図(1:80、上:西壁断面図、下:南壁断面図)

形成されていた。

第0層：暗褐色(10YR3/3)細～中粒砂で構成され、層厚は残りの良い部分で0.4mであった。調査区全体に分布していた。近～現代に形成された地層である。

第1層：褐色(10YR4/4)中粒砂で構成され、層厚は調査区の南で0.2mと厚く、北に行くにつれて薄くなっていた。本層は調査区の北部には認められなかった。本層下面において、土壌SK101、落込みSX102を検出したが、いずれも近代の遺物を含んでいた。

第2a層：黒褐色(10YR2/3)細粒砂で構成され、北部で0.3mと比較的厚かった。本層の色調はSD305から離れるにつれて薄く、黒褐色から黄褐色へと漸移変化していた。本層上面において、ピットSP201～206を検出した。

第2b層：にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂で構成されていた。第3a層に由来する褐色中粒砂の偽礫が含まれていた。

第2c層：褐色(10YR4/4)中粒砂で構成されていた。SX301の埋土である。

第2d層：褐色(10YR4/4)中粒砂で構成され、層厚は0.08～0.20mであった。SD305内の堆積層である。

第3a層：褐色(10YR4/4)中粒砂で構成され、層厚は0.15～0.20mであった。層全体が暗色化しており、古土壌と考えられる。本層上面でSX301・SP302～304・SD305を検出した。

第3b層：にぶい黄橙色(10YR7/3)中礫混り細礫～極粗粒砂で構成され、層厚は0.34mであった。本層に含まれていた礫は円礫がほとんどで、直径は最大2cmであった。

第3c層：にぶい黄橙色(10YR7/3)細～中粒砂で構成されており、層厚は0.24mであった。

第3d層：にぶい黄橙色(7.5YR5/4)細礫～粗粒砂で構成されており、層厚は0.5mであった。細礫層と粗粒砂層の互層で、ラミナは南南西～北北東に傾斜していた。

第3e層：にぶい黄橙色(10YR6/6)中～細粒砂で構成され、層厚は0.12mであった。

第4層：にぶい黄橙色(10YR6/3)中礫混り細礫～極粗粒砂層である。本層上位は3～5cmの円礫が多く認められた。礫に混じって弥生前期の壺口縁部(図5、1)が出土した。この中礫層を削剥すると、極粗粒砂を主体とする水成層に変化した。

2. 遺構と遺物(図4・5)

a. 弥生時代前期

TP+0.36mの4層砂礫中より弥生時代前期の壺口縁部(1)が出土した。口径17.2cmに復元され、頸部にヘラ状工具による沈線を巡らせる。全体的に磨滅しているが、表面の調整はナデである可能性が高い。

b. 古墳時代前期

SX301 調査区南半で検出した深さ0.2mの浅い落込みである。埋土からは布留式に属すると考えられる土師器の細片が出土した。

SP302 直径0.25m、深さ0.2mの小穴である。

SP303 直径0.30m、深さ0.2mの小穴である。

SP304 直径0.10m、深さ0.1mの小穴である。SP302～304はいずれも東側が攪乱によって削られていた。またこれらの小穴の埋土はSD305と同様の褐色中粒砂であった。小穴から遺物は出土しなかった。

SD305 直径0.63m、深さ0.2mの溝である。南北方向に直線的に延びていた。埋土の褐色中粒砂からは摂津VI様式[森田克行1990]～庄内式3期[米田敏之1991]の土器片が出土した(図5、2～5・7)。

2は甕口縁部である。内外面ともにヨコナデで調整する。3は甕底部である。外面には粗いタタキメが認められる。内外面ともにヨコナデで調整する。4は甕である。外面には粗いタタキメ、内面には縦方向にナデの痕跡が認められる。また内面には下半部と上半部との境に接合痕が認められる。5は甕の底部であり外面には粗いタタキメ、内面にはユビオサエの痕跡が認められる。4・5は近い場所から出土し、色調も類似するため同一個体と考えられる。この甕は球形の胴部に復元される。以上の2～5は摂津VI-2様式～庄内3期に属する。7は甕底部である。立ち上がりが明確であることから摂津VI様式のものと考えられる。

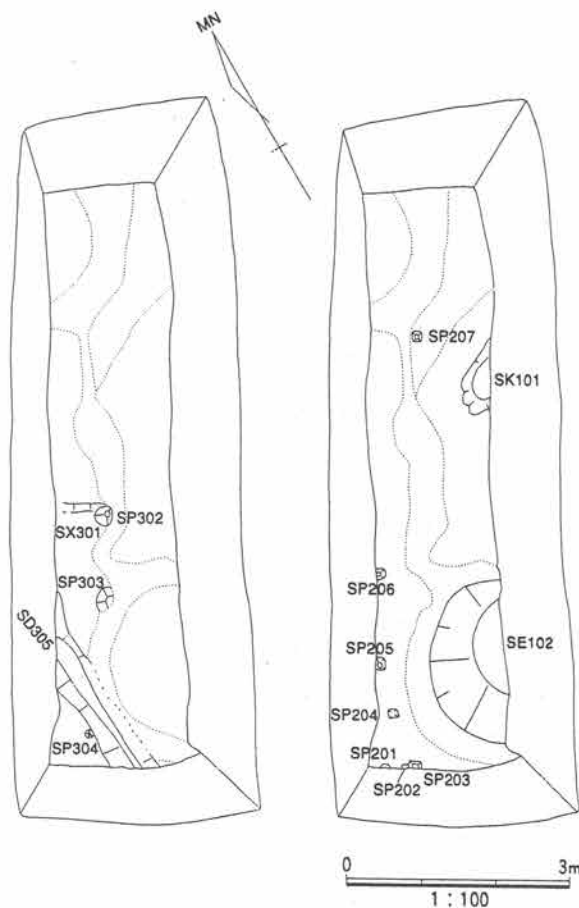


図4 各層検出遺構(左：第3a層上面検出遺構、右：第1層下面・第2a層上面検出遺構)

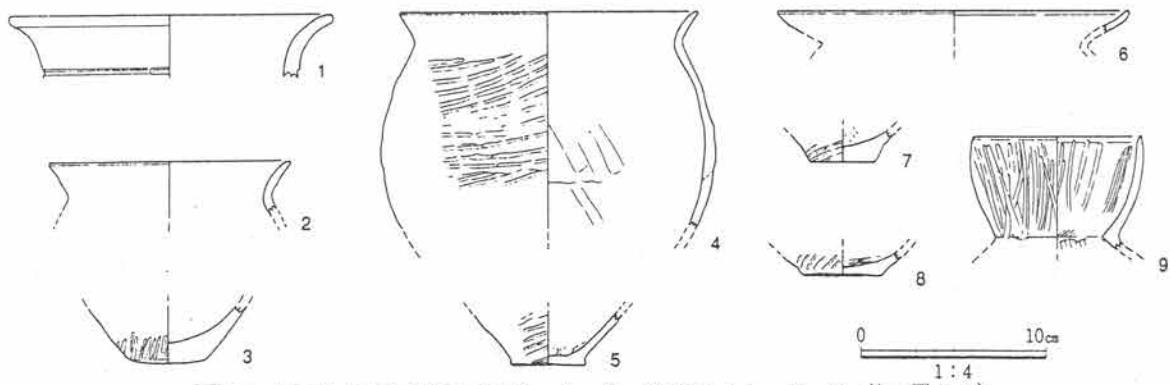


図5 各層出土遺物(第2a層：6・8・9、SD305：2～5・7、第4層：1)

その他、第2a層中から甕・壺破片が出土した(6・8・9)。6は庄内式甕口縁部で、口径18.8cmに復元される。口縁端部のツマミアゲは鈍い。胎土は灰黄色を呈し角閃石は認められず、生駒西麓産の胎土でない。庄内3～5期のものと考えられる。8は甕底部で、摂津VI-2様式～庄内3期のものである。9は東海系内湾口頸壺(壺C)である[赤塚次郎1990]。内外面ともミガキ調整である。ミガキの条線幅は2～3mmとやや幅広である。口径は8.9cmに復元されるが、廻間I式古段階のものと比べて小さい。また口縁端部の面取りは鈍く、廻間II式新段階のように端部をつまみ上げで整えたり外反させていない。これらの特徴から9は廻間I式新～II式古段階に属する資料と考えられる。

c.江戸時代以降

SP201～207 いずれも1辺0.15mの隅丸方形で、深さは0.15～0.20mであった。SP204の埋土から土師器や褐色の釉薬のかかった磁器の細片が出土しており、比較的新しい時代の遺構であると考えられる。柱根などは出土しなかったが、形状から柱穴と考えられる。柱筋は復元できないため、建物のものかどうかは不明である。

<まとめ>

HH97-1次調査地と同様、HH01-2次調査地においても古墳時代初頭の遺構・遺物が検出され、同時代の人々の生活領域であることが確実となった。出土した土器の量が少ないにもかかわらず、東海系の土器が含まれていたことは、崇禅寺・五反島遺跡と同様、淀川下流域における古墳時代初頭の集落に見られる外来系土器が多いという特徴と一致する。またTP+0.36mの河床と考えられる砂礫層において、弥生時代前期の壺口縁部片が含まれていたことから、付近に弥生時代前期の遺構が存在することが示唆されよう。

今回の調査では、弥生時代前期から後期にかけて約1.3mの河成層が堆積していた。この砂礫と粗粒砂の互層はHH97-1次調査地でも明らかになっている。特に本調査地においてTP+1.25～1.34mにかけて堆積していた中礫を多く含む第3b層は、HH97-1次調査の第5b層(TP+1.22～1.42m)に対比され、地層が連続していることが示される。

この堆積作用が停止後、TP+1.7～1.8mにおいて土壌化が進行し、弥生時代後期から古墳時代前期の生活面が形成されていた。HH97-1次調査地における弥生時代後期から古墳時代前期の包含層は

TP+1.9~2.0mの所にあり、本調査地より0.2m高い。このことから当時の地形はHH97-1次調査地から北に向けて徐々に下がっていたと考えられる。

天満砂堆は縄文時代後期から晩期前半の海退期に形成されたと考えられている。本調査地における弥生時代後期から古墳時代前期の生活面はそれより後の河成堆積によって形成された微高地上に営まれている。弥生時代後期から古墳時代前期にかけて淀川下流域から大阪湾岸に出現する遺跡として、崇禅寺・本庄東遺跡以外にも、東三国6丁目所在遺跡・豊崎遺跡・平野町3丁目所在遺跡などが知られるが、それら集落が成立するための地形的な条件について、今後、比較検討する必要がある。

〈参考文献〉

- 赤塚次郎1990、「V、考察 1、廻間式土器」愛知県埋蔵文化財センター：『廻間遺跡』
大阪市文化財協会1998、「小倉商事(株)による建設工事に伴う確認調査(HH97-1)」
森田克行1990、「7 摂津地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ、pp.77-192、木耳社
米田敏之1991、「2 土師器の編年 1. 近畿」『古墳時代の研究』6、雄山閣

第2a層上面遺構
(南から)



第3a層上面検出遺構
(北から)



南壁地層断面
(北から)



天神橋遺跡発掘調査(TJ01-1)報告書

- ・調査箇所 大阪市北区天満4丁目16-21
- ・調査面積 約25m²
- ・調査期間 平成14年2月18日～平成14年2月28日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 京嶋覚・李陽浩

〈調査に至る経緯と経過〉

本調査地は大阪天満宮の東約150mに位置する(図1)。地形的には上町台地北方の長柄砂洲上にあたり、各時代を通じて人々の活動が活発に行われた地域である。文献史料などから付近には古代に東大寺新羅江庄が存在したことが知られ、中世には京都と瀬戸内以西を結ぶ交通の拠点であった渡辺津が存在したと考えられている。また近世には豊臣期における城下町として整備され、さらに大阪天満宮の門前町として発展したことが知られる。

本調査地の北約100mで行われたHX99-1次調査では奈良時代後半の遺構・遺物などが見つかり、また南西約400m付近で行われた調査(TJ00-2次、TJ94-4次)では、古墳時代から江戸時代にいたる遺構・遺物が見つかり、

今回、表題の建設工事に先立って平成14年1月10日に試掘調査を行ったところ、地表下約3m付近において近世以前と思われる地層を確認したため、発掘調査を行うこととなった。

本調査は平成14年2月18日から開始した。調査区を敷地北西部に設定し(図2)、現地地表下約3mまでを重機により掘削した。その後は人力

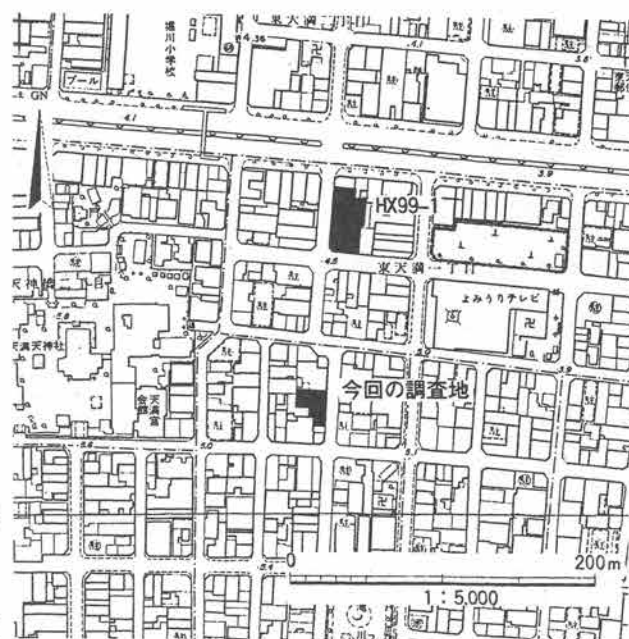


図1 調査地位置図

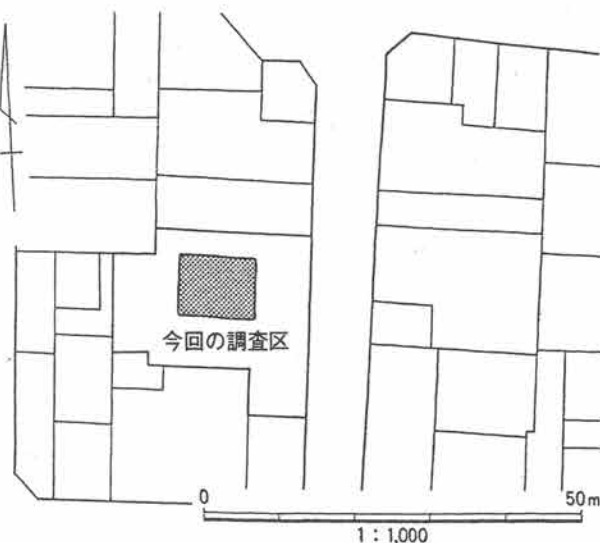


図2 調査区配置図

により掘削を行い、写真撮影・実測などの記録作業を実施した。また地層確認の為、部分的にトレンチを掘削した。発掘調査に関する作業は2月26日に終了し、2月28日には埋め戻しを含むすべての作業を終了した。なお、本報告で使用した方位は磁北で、水準値はT.P.値である。

〈調査の結果〉

1. 層序(図3)

本調査区における層序は以下のとおりである。重機によって現地表下約3mまで掘削したため、第0層から第3層までは断面観察による結果である。よって第3層以上は遺物の絶対量が少なく、地層の年代はあくまでひとつの指標としてあることを断っておく。なお第5層以下は無遺物層である。

第0層：近・現代層である。レンガやコンクリート基礎等が含まれる。

第1層：オリーブ褐色の極粗～粗粒砂を主体とする盛土層で、層厚は残りのいい部分で0.7～0.8mである。

第2層：炭・焼土を多く含む黒褐色のシルト含粗～中粒砂の整地層で、火災の痕跡を表すと思われる。層厚は約0.2mである。19世紀代の火災(例えば大塩の兵火など)跡と考えられる。

第3層：近世の盛土層で、上から大きく四つに分けることができる。各盛土の上面からは大小の土壌が掘られており、人々の生活の痕跡をうかがうことができる。a層は炭を含むオリーブ褐色のシルト混り中～細粒砂を主体とする盛土層で、層厚は約0.4mである。出土遺物の年代観から18～19世紀頃の地層と考えられる。b層は炭を多く含み、オリーブ褐色の粗粒砂を含むシルト混り細粒砂を主体とする盛土層で、層厚は0.2～0.4mである。出土遺物の年代観から18世紀初頃の地層と考えられる。c層は炭を含むにぶい黄褐色のシルトを含む中～細粒砂を主体とする盛土層で、層厚は0.2～0.4mである。d層は暗褐色の粗～中粒砂からなる盛土(作土)層である。層厚は約0.15mである。c・d層は顕著な遺物を検出できなかったため具体的な年代は不明である。ただc層には伊万里焼が含まれず唐津焼が含まれるため、第c・d層は豊臣期まで遡る可能性も考えられる。

第4層：炭を含む黒褐色のシルト混り極粗～粗粒砂層で、層厚は約0.2mである。第5層の上部が植物擾乱を受けた後、そこに人の手が加わって形成された地層であると考えられる。本層からは黒色

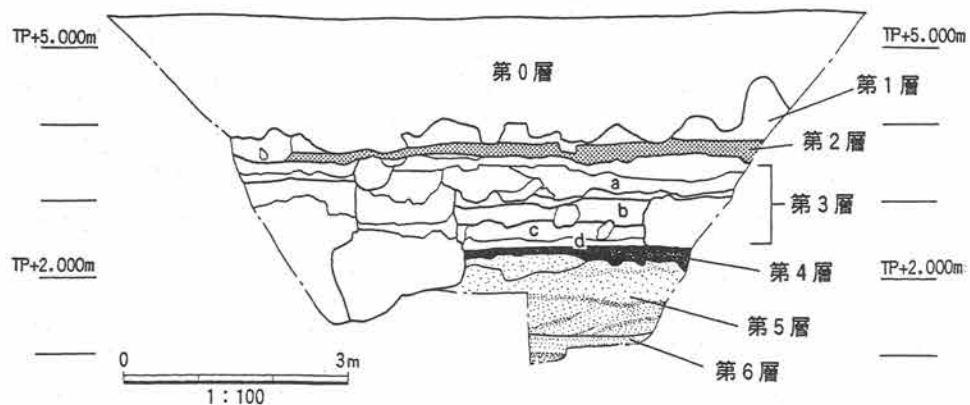


図3 調査区南壁断面図

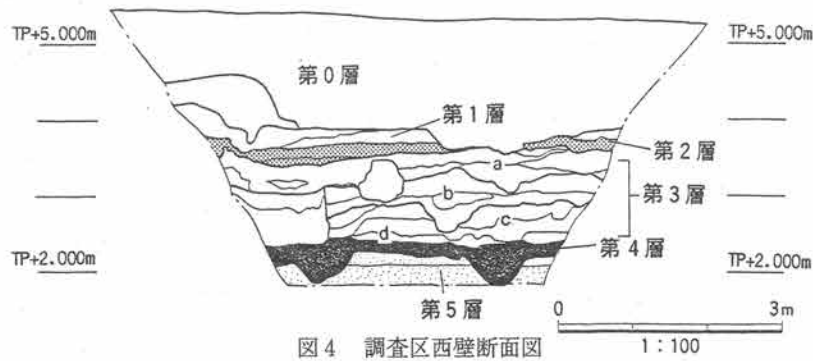


図4 調査区西壁断面図

土器(図6-1)・土師器椀(図6-2)・杯(図6-3)・甕(図6-11・12)・羽釜(図6-13)・須恵器杯(図6-5~7)・壺(図6-8・9)・製塩土器等が出土した。6・7には墨書があるが、6は楕円形のほぼ中心に直線が重なる形で、「中」字の可能性がある。これらの出土遺物は8世紀末~9世紀前半頃の様相を呈する。また本層下面ではいくつかのピットを検出した。

第5層：褐色の小礫~極粗粒砂を主体とする水成(洪水)層で、大きく上下二つに分かれる。上部と下部では水流の方向に違いが認められる。層厚は全体で約1.1mである。上部にはトラフ型ラミナが見られる。また下部では、水流の向きが北で東に約50度振った方向にあることが、ラミナの観察から見て取れる。

第6層：灰白色の極粗~粗粒砂と3cm大の礫が互層となる層で、層厚は不明である。上部には細かいラミナが見られる。本層は長柄砂洲を構成するものである可能性がある。

2. 遺構と遺物

第4層は古代の遺物を多く含む包含層である。その第4層下面で古代のピットを検出した(図5)。

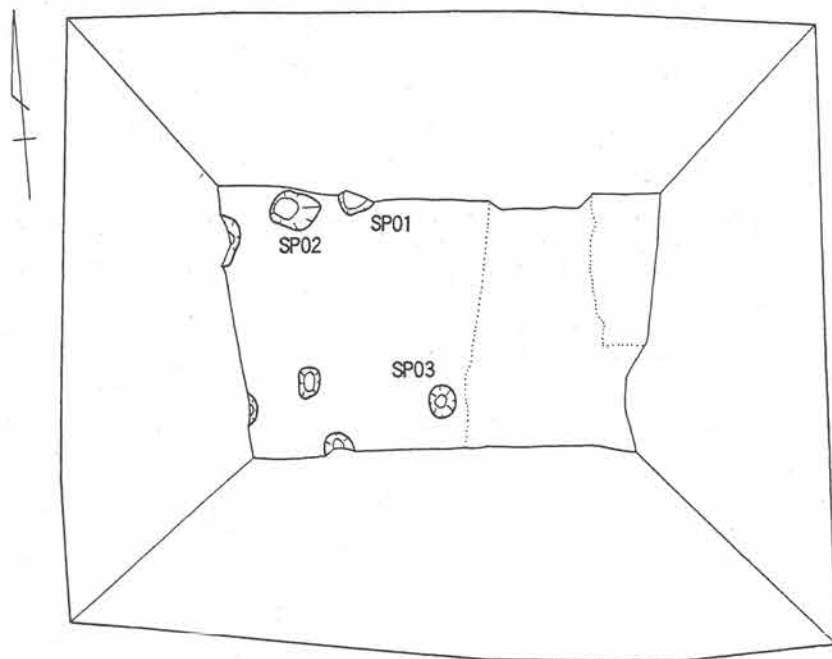
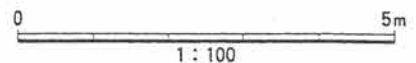


図5 第4層下面遺構配置図



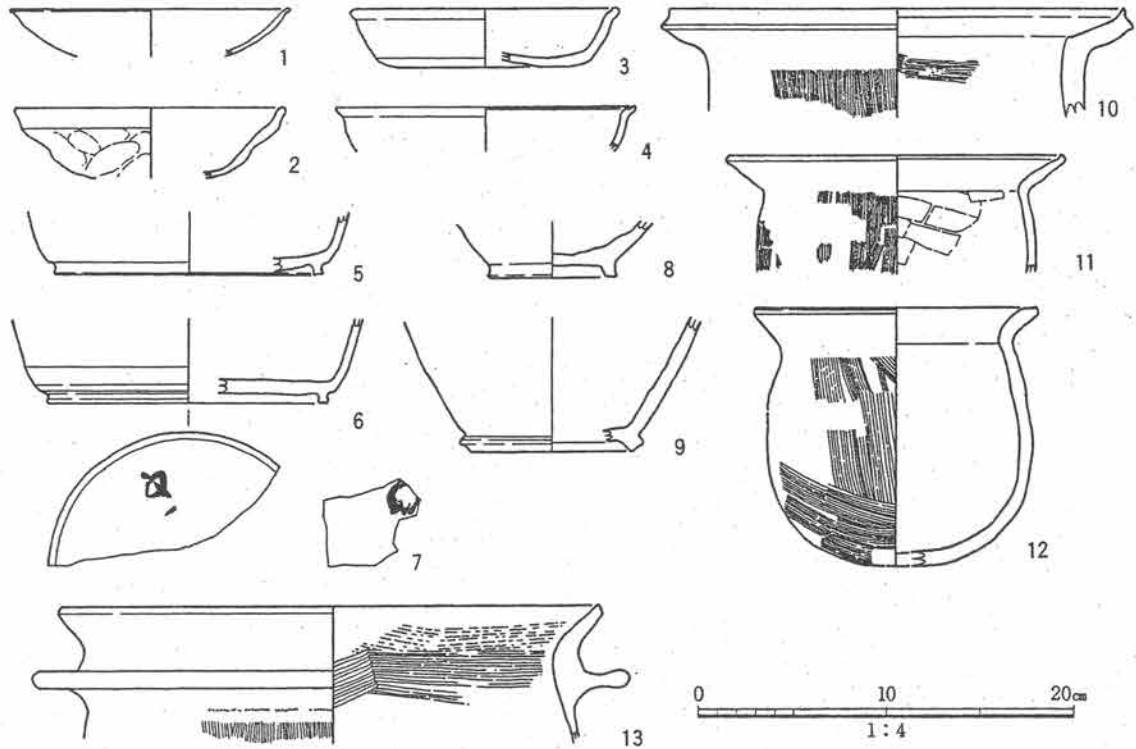


図6 第4層および第4層下面遺構出土遺物実測図

遺構埋土はすべて第4層と同じである。以下主たるものについて記す。

SP01は直径が約0.5mの楕円形で、深さ約0.35mである。埋土からは須恵器・土師器・羽釜のそれぞれ破片が出土した。SP02は長辺が約0.6m、短辺が約0.6mの隅丸方形で、深さは約0.55mである。埋土からは須恵器・土師器皿(図6-4)・製塩土器片が出土した。SP03は直径が約0.4mの楕円形で、深さ約0.4mである。埋土からは土師器甕(図6-10)が出土した。ピットは全部で7個あるが、調査区内だけではこれらピット群が建物を構成するものかどうかは不明である。また、これらピットは元来第4層上面から掘り込まれていた可能性も考えられるが、明確な痕跡を見つけることはできなかった。また柱痕跡なども見つけることはできなかった。

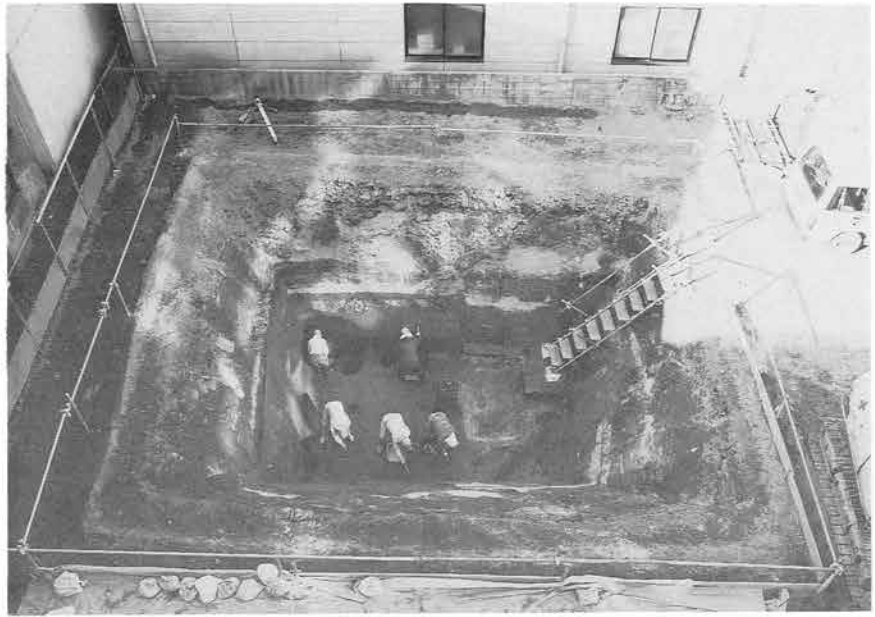
〈まとめ〉

今回の調査では、古代から近世にいたる遺構と遺物が見つかった。特に、現地表下の深いところで古代の地層が確認できたことは大きな成果であり、古代の遺物を多く含む地層が良好に存在していることは、この周辺に当時の人々の生活の場が広がっていた可能性を示唆するものである。このことに関しては、付近一帯に存在していたと推測される東大寺新羅江庄との関わりが第一に考えられよう。

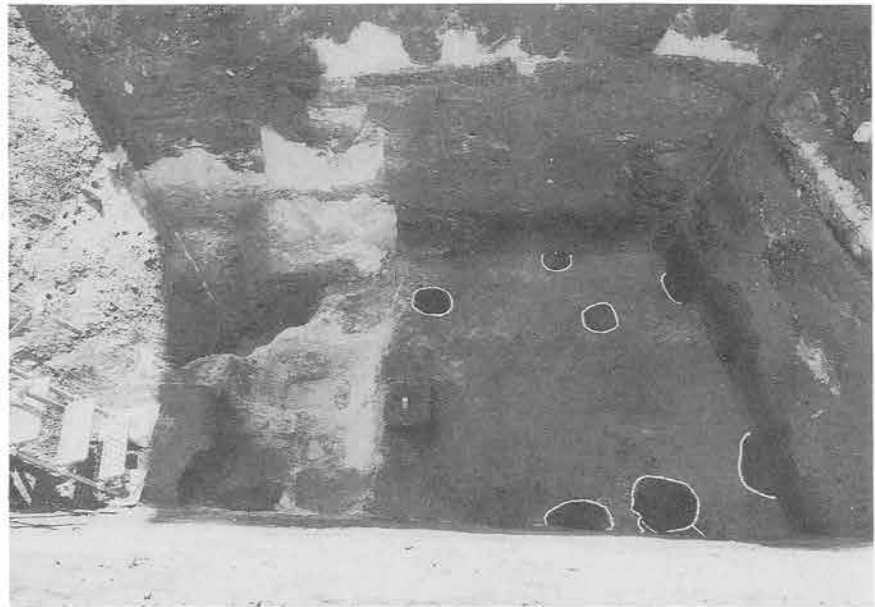
また江戸時代を通じての連続した土地造成とそれに伴う遺構の存在は、この地が幾度も整備されたことを物語るものであり、近世における当該地の土地利用を知る上で重要である。

本調査地付近一帯での調査成果がさらに蓄積されていくことが望まれる。

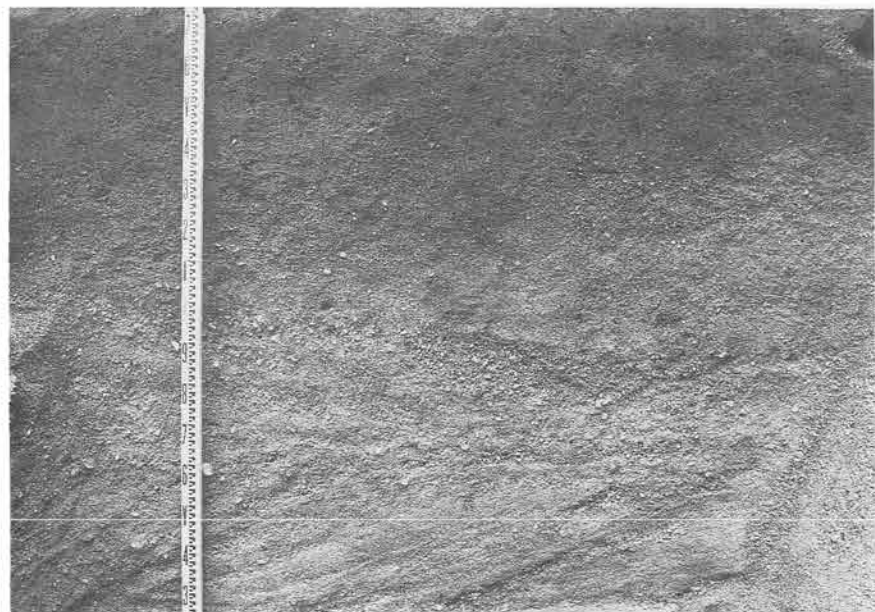
調査区全景
(南から)



1層下面遺構完掘状況
(北から)



南壁下部地層堆積状況
(北から)



高松藩蔵屋敷跡発掘調査(TK01-1)報告書

- ・調査箇所 大阪市北区中之島5丁目
- ・調査面積 約500m²
- ・調査期間 平成14年1月7日～平成14年2月8日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 京嶋覚・藤田幸夫

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地一帯は、江戸時代には西国諸藩の蔵屋敷が多く立地した場所である。蔵屋敷とは、各藩が領内で集めた年貢米や特産物を販売するために保管する倉庫や、邸宅を備えたものである。

蔵屋敷は、船運を利用するために大川(堂島川)・土佐堀川に面して立地するものが大半であった。蔵屋敷の成立は、17世紀の前半とみられ、天保年間には124邸に達した。このうち、大川沿いに蔵屋敷を構えた大藩(広島藩、熊本藩など)には、「船入」と呼ばれる大川から邸内に船を引き入れる施設を有している場合があった。

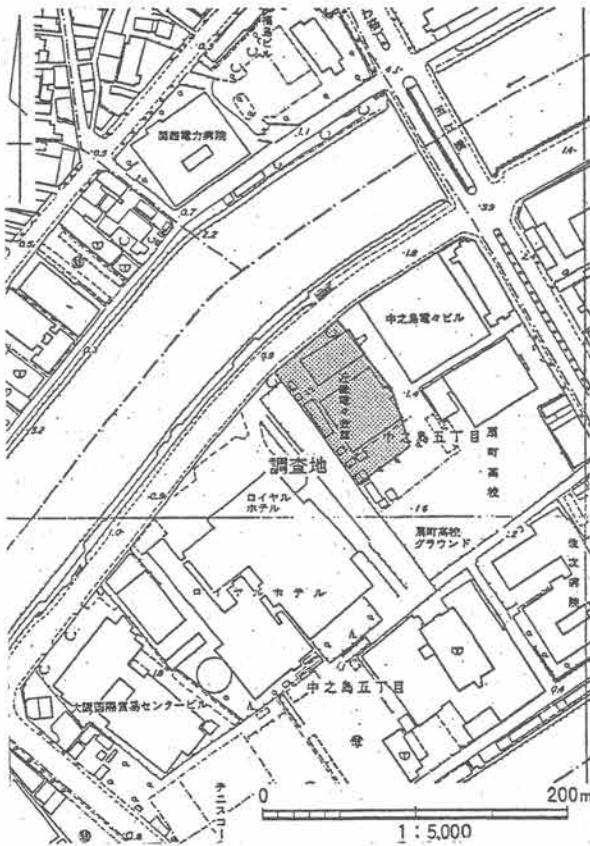


図1 調査地位置図(S=1:5,000)



図2 明治19(1886)年頃の調査地(『大阪実測図』より)
高松藩蔵屋敷の「船入」の輪郭がわかる

今回の調査地(図1)は高松藩大坂蔵屋敷跡にあたり、平成13年6月20日と6月27日の両日にわたって敷地内5個所に試掘坑を設定し、試掘調査を行った。その結果、地表下0.8mと1.5m前後で旧地表を確認した。調査地は、『大阪実測図』(明治19年)(図2)によれば『船入』の痕跡が認められる。しかし、『船入』の石垣は地表下の深い位置に存在することが予測されるため、『船入』を確認するためには、広い面積での試掘調査が必要となった。そのため、土地所有者の了解を得て、平成14年1月から試掘調査を実施することとなった。

調査地の変遷

現在までにわかっている調査地の変遷は以下のとおりである。

明治29(1890)年5月大阪工業学校が設立される。34(1901)年5月には大阪高等工業学校となり、大正10(1921)年4月19日に移転する。大阪高等工業学校は、後に大阪帝国大学工学部となる。

昭和2(1927)年に株式会社大阪堂島米穀取引所正米部が開設される。

第2次大戦中は、「水交社」となり、その後、「近畿電気通信会館」・「電々体育館」が建設された。

調査の方法

今回の調査は、『船入』の規模、形状を明らかにすることと、蔵屋敷存続当時の生活面の確認、および旧基礎等により遺構が破壊されている個所の確認を目的とした。

調査は、上記の目的に沿って各トレンチ(図3)を設定し、重機で掘削後、人力で遺構の確認を行った。

<調査の結果>

1. 層序

今回の調査では、明治以降の堆積層を除去することを主として実

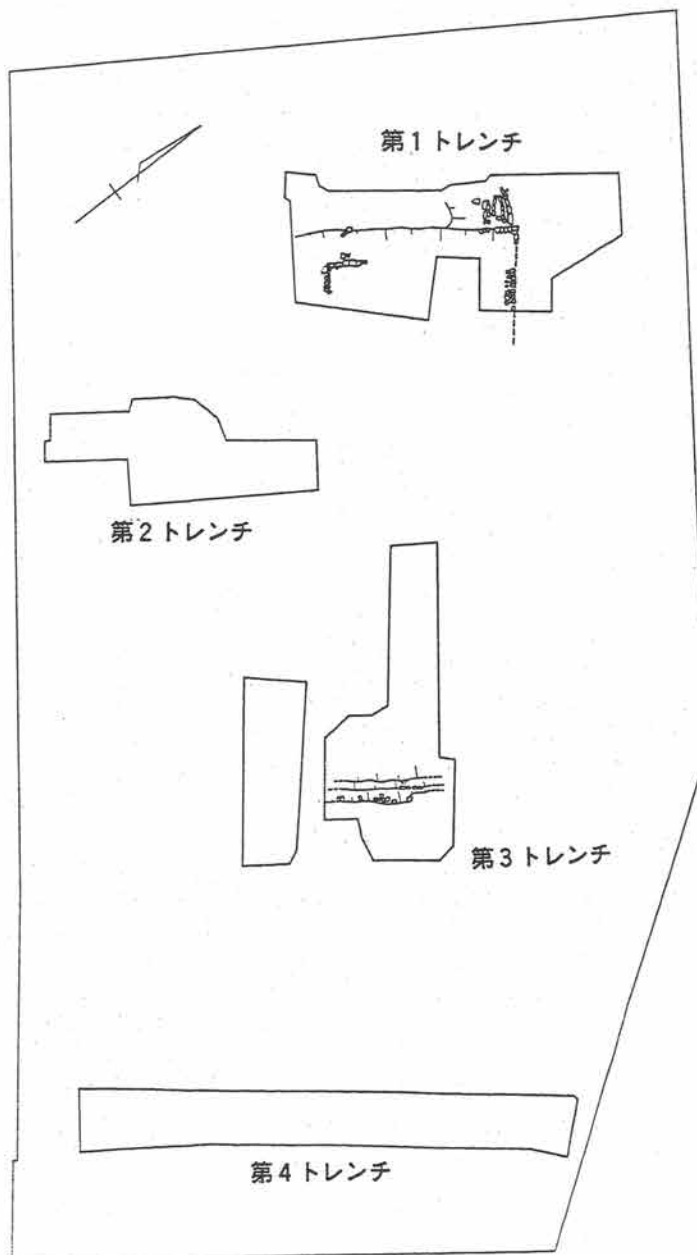


図3 トレンチ配置図(S=1:600)

施したため、調査地全体の層序については不明な部分が多い。

『船入』については、砂で埋め戻されていた。この埋め戻しがなされた時期は、明治19年以降であることは明らかであるが、具体的な年次については、今のところ不明である。したがって、砂を除去すれば、『船入』埋没時の状態が明らかになる。

2. 遺構と遺物(図4・7)

各トレンチ毎に検出した遺構について報告する。

第1トレンチ(図4)

石垣1(図版1-中段) 北東部で検出した石垣である。立面部を長方形にきれいに成形された石で積まれている。目地は漆喰が詰められており、やや傾斜をもつがほぼ直立する。南北長約10mまで確認したが、それ以上長く伸びそうである。

石垣2(図5、図版1-下段、2-中段) 砂で埋め戻されるまで、存在していた石垣である。地表下約3.3mで最上部の石が検出された。湧水が激しく調査は困難をきわめたが、この石垣の内側は、杭で留めた板で覆っていた。この板は長さ2.0m以上、幅0.25m前後で、4枚積み重ねてあることまでは確認したが、さらに下に続くことは確実であろう。この石垣は、直角に曲がっており、南北方向の石垣は『船入』の西端を示すものである。

石垣3(図版2-下段) 石垣2の外側のサブトレンチ内で、検出したものである。高さ1.0m前後の低いもので、石垣2に比べて小さい石で構築されている。砂が傾斜して堆積する落ち際で検出した。石垣2の外側に堆積した青灰色のシルト質粘土層を掘削して検出したもので、『船入』が砂で埋め戻された時点では、既に埋没していたものである。

検出した範囲は狭いが、第1トレンチでは石垣2の外側全体に同様に石垣3が存在することが推定される。

階段1(図版1-中段) 石垣1の北端に接して検出した東に低い石段で、6段分を確認したが、そ

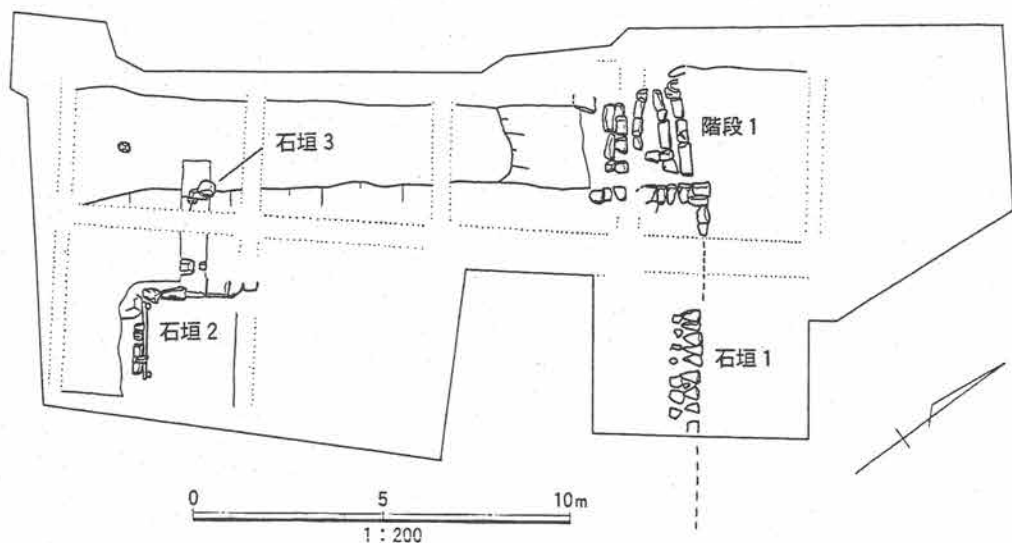


図4 第1トレンチ遺構配置図

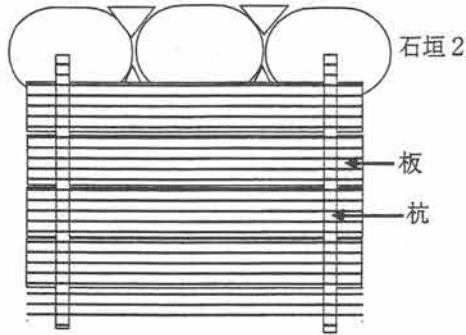


図5 石垣2模式図(「船入」内からみた図)

で、想定される場合を列記するに留める。

1. 両者ともに「船入」の一部を構成する
 - a. 同時に構築された。
 - b. 石垣1が階段1の築造後に構築されたが、同時に存在していた。
2. 階段1が「船入」を、石垣1が別の建物を構成する。

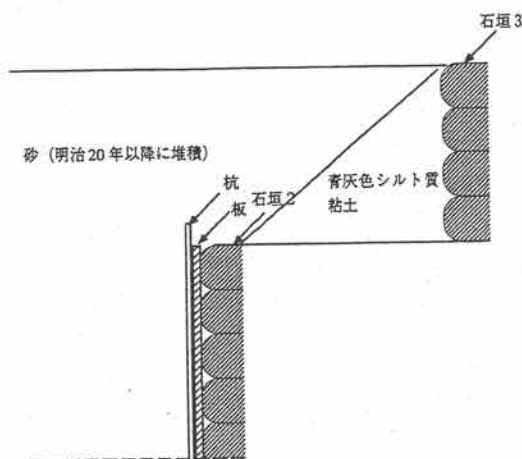


図6 石垣2と石垣3の関係模式図

ない。

第2トレンチ

地表下約1.4mで旧地表面を検出したが、溝状の落ち込みに石が詰まっている遺構を検出した。この落ち込みは、一部攪乱されているが、直角に曲がっていると思われ、土蔵の基礎部分の可能性はある。

また、東端で砂層の下面が急激に下がる個所がある。この個所が、「船入」の西端に相当する。

第3トレンチ(図7、図版1-上段)

砂層の下面が急激に下がっていく個所が認められ、この個所が「船入」の南端に当たる部分である。

れ以下については不明である。

この階段1と石垣1を埋積していたのは砂でなく、レンガ等の建築廃材を主としたものであった。このことから、「船入」の北入り口部付近については、かなり後の時代まで開口していたことが判明した。

小結

石垣1と階段1の関係 これについては、いくつかの場合が想定されるが、小面積であり、またそれぞれの基底部まで掘削していないので、確実なことがいえないの

a. 石垣1が船入の石垣を一部利用している。

b. 石垣1は船入の石垣とは無関係に構築されている。

石垣2と石垣3の関係(図6) これについては、以下のように推定できる。

石垣3の基底部と石垣2の最上部の間がテラスとなり、石垣2の内部が「船入」として機能していた。

その後石垣3が埋没し、最終的には、傾斜地となって石垣2だけが表面に出て、「船入」の埋没時期を迎えた。

ただこの見解は、「船入」西北角について確認できることであり、他の個所については確認できてい

傾斜地に石列や石の抜取跡が数段あり、『雁木』とよばれる階段状の施設があったことが判明した。

第4トレンチ

地表下約1.3m～1.5mで蔵屋敷存続時期の生活面が認められた。いくつかの礎石がみられるが、建物規模までは明らかにできなかった。

出土遺物

第1トレンチ船入内から、木製品が出土した。その内、木簡は十数点出土した。その内容については、現在判読中であるが、「那珂郡公文村」、「鵜足郡下法軍寺村」などの高松藩内の村名が書かれているものがある。

〈まとめ〉

調査地は、地表下約2.7m以下は湧水が激しく、『船入』の石垣については一部で確認したに過ぎなかった。しかし、『船入』の全体規模はほぼ想定されるに至っ

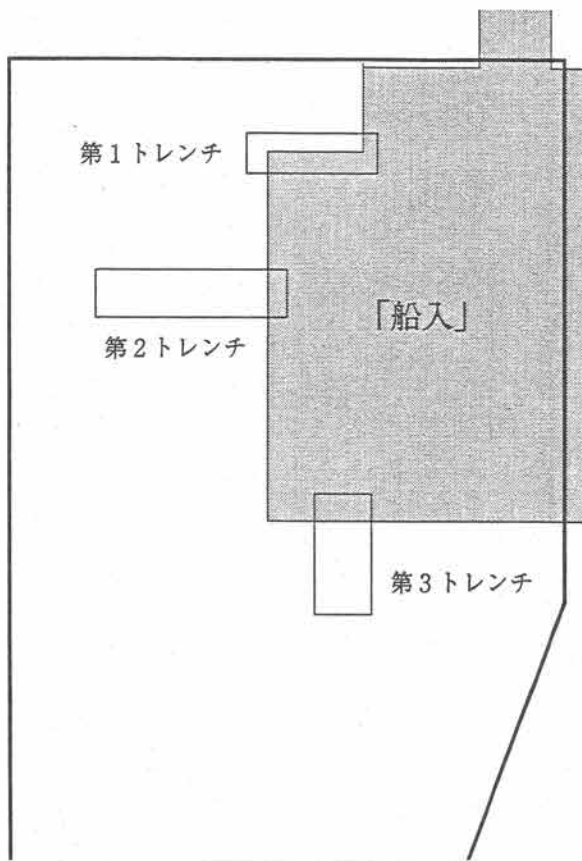


図8 調査地・トレンチと「船入」との関係想定模式図

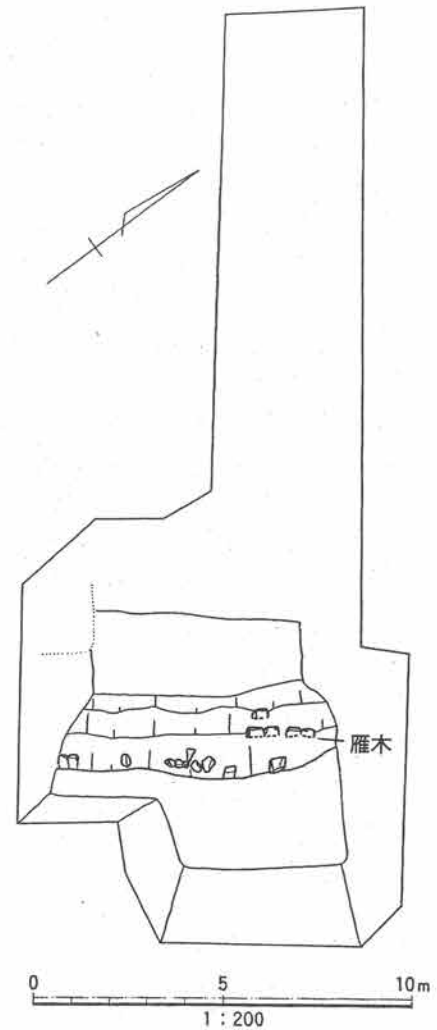


図7 第3トレンチ遺構配置図

た。このことを基に、以下の2点について簡単にまとめてみる。

1. 『大阪実測図』（明治19年頃）との比較対照(図8)

今回確認した『船入』と地図を比較すると、第1トレンチの北側でさらに屈曲して、堂島川につながる可能性が高いと思われる。

また、『船入』の東端については敷地境との関係から明らかにできなかったが、地図上から類推すれば、現在の敷地境かあるいは、東隣のNTT建物西端位

に位置するものと思われる。

2. 他の蔵屋敷『船入』との比較

大坂蔵屋敷『船入』の発掘調査例には、これまでに『佐賀藩』『広島藩』がある。これらの石垣と比べて以下の点に特徴が認められる。

1. 石垣がテラスをもつ2段となること。
2. 石垣の表を板で覆うこと。

以上の特徴は、第1トレンチで確認したことであり、船入全体が同じ構造であるかどうかについては、現状では判断する材料はないが、いずれにしても際立った特徴といえる。

最後に、旧基礎等と遺構との関係については、『船入』は、ほとんど影響を受けていないことが判明した。特に、近畿電気通信会館の基礎・梁は、『船入』を破壊していることはないと思われる。

また、蔵屋敷部の遺構は、杭基礎部分については破壊されているが、梁部分では完全には破壊されていないと思われる。

第3トレンチ
「船入り」南部雁木
検出状況（南から）



第1トレンチ
石垣1・階段1
（北から）



第1トレンチ
「船入り」北西隅石垣2
（東南から）



II 中 央 区

大坂城跡発掘調査(OS01-26)報告書

- ・調査箇所 大阪市中央区内淡路町3丁目6
- ・調査面積 32m²
- ・調査期間 平成13年10月2日～平成13年10月12日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 京嶋覚・積山洋

〈調査に至る経緯と経過〉

当該地は豊臣氏大坂城跡の北西部、惣構西堀にあたる東横堀の東隣に位置する(図1)。2001年9月27日、標題の工事に先立って試掘調査(OS01-25)を実施し、慶長20(1615)年の大坂夏の陣とみられる炭・灰層が見つかったため、上記の日程で本調査を行うこととなった。当初は敷地内に東西4m・南北8mの調査区を設ける予定であったが、機械掘削を始めると随所で深い攪乱の存在がわかったため、実際の調査区はかなり予定とは異なることとなった(図2)。その後人力による調査を進め、工事掘削深度まで達したが、事業者の了解のもと、さらに一部の掘り下げを行い、断面図に記録をまとめて調査を終了した。

〈調査の結果〉

1. 層序(図3)

第1層：江戸時代の地層をまとめて第1層とする。先述した夏の陣の炭・灰層直上までが該当する。

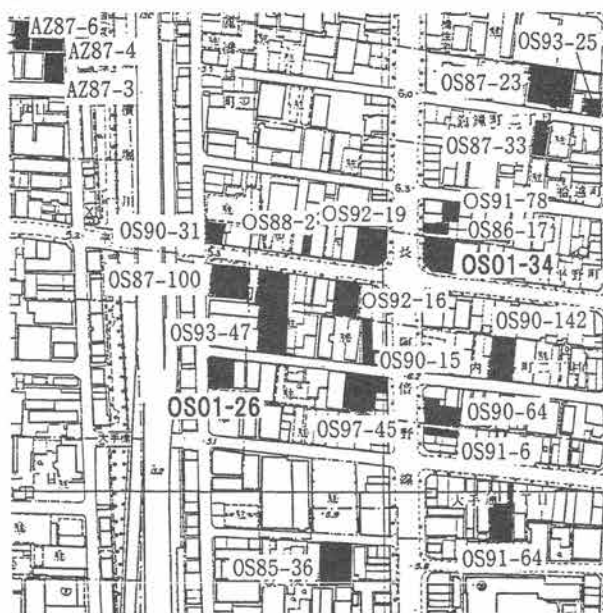


図1 調査地位置図(1:5,000)



図2 調査区位置図(1:1,000)

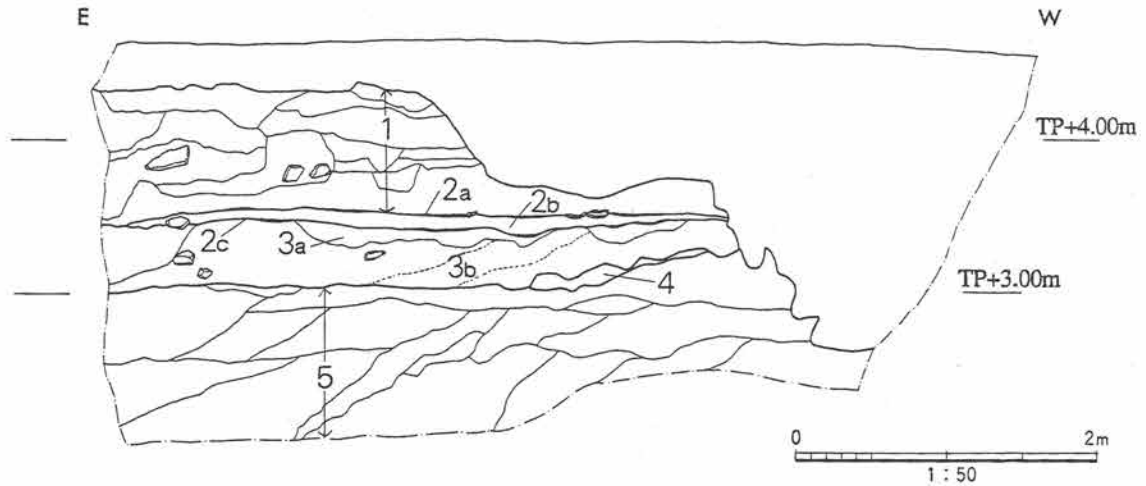


図3 南壁地層断面図

第2層：2a層は炭・灰の薄層で、これが夏の陣の炭・灰層である。標高3.5～3.7mに堆積している。東側ではこの薄層が数枚重なっていた。その下に比較的固い2b層(暗褐色のシルト混じり砂礫)が認められ、さらにその下に、やはり炭・灰の薄層である2c層が認められた。

第3層：標高3.3m付近に分布する厚さ40cmほどの整地層である。砂礫を主体とする。細分は可能だが、間に生活面が介在するわけではない。

第4層：第3層同様の整地層で、シルト・粘土のブロックを比較的多く含む。調査区内では東と北寄りに分布する。これも細分可能で、4a層と4c層上面で遺構が検出された。

第5層：標高3.0m以下の整地層を5層とする。遺物は出土していない。ほぼ水平に堆積する砂礫主体の5a層と、西から東へ傾斜する盛土の集積である5b層に分けられる。5a層上面は生活面であったとみられるが、遺構は見つからなかった。5b層は建設工事の掘削深度を越えて、かなり深くまで続くようである。

2. 遺構と遺物

(1) 第4層の遺構と出土遺物(図4・7)

第4層の整地層からは図7-1の李朝白磁鉢(4c層出土)、備前播鉢2(4b層出土)が出土し、豊臣期の地層であることを示している。SK08～10は4c層上面で見つかった土壌で、出土遺物は、SK08から瓦質播鉢や土師器皿、SK09から平瓦・丸瓦とともに飾り瓦5(獅子口)が出土している。ごく近隣にかなり立派な瓦葺き建物が存在したと思われる。4a層の上面で検出したやや不定形なSK06は深さ約0.6mで、唐草文軒平瓦や土錘とともに産地不明陶器3と備前焼播鉢4が出土している。3はきわめて精製された胎土で、全面に施釉し、口縁端部を釉剥ぎして内傾させ、幅広い高台を有する。海外産の製品か、国産なら高取焼などの可能性も考えられる。

(2) 第3層の遺構と遺物(図5～7)

第3層からは6～9、12が出土した。6は唐津焼碗、7は中国製白磁碗、8・9は瀬戸美濃焼皿、12は

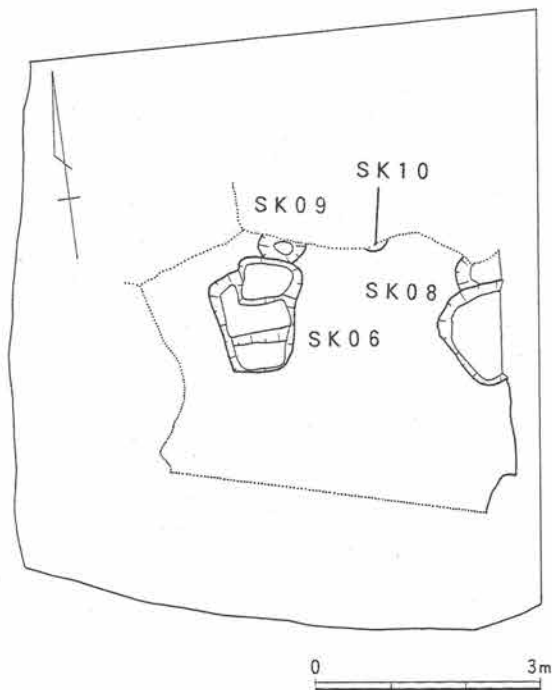


図4 第4層の遺構実測図

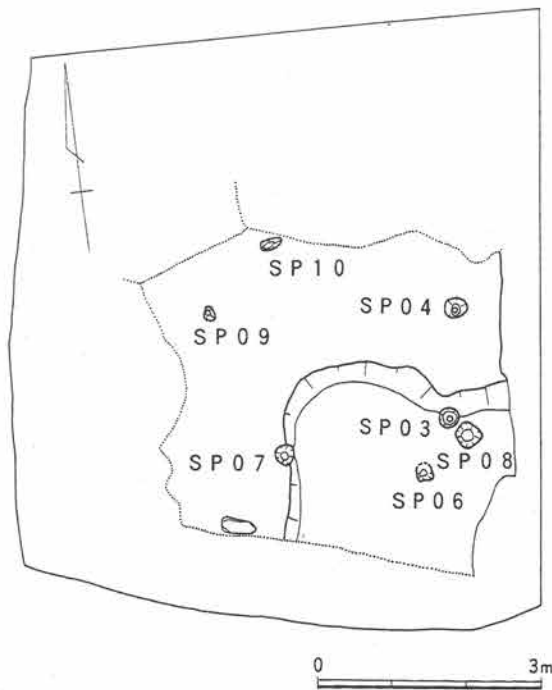


図5 第3層上面遺構実測図1

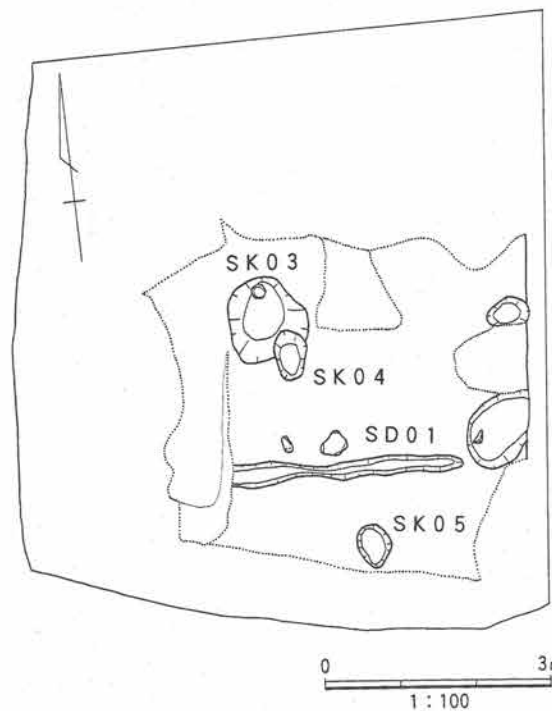


図6 第3層上面遺構実測図2

焼塩壺である。この陶磁器・土師器の組成から、3層の盛土が豊臣後期に行われたことがわかる。3b層の下面は南東部で浅い窪みとなっていた。また3層の上面では散在する小ピットを検出し、なかには柱痕跡が認められたものもある(図5、ただし、厳密には検出層位不明のものも含む)。このうち、SP04から唐津焼碗11(完形)が出土した。同じ3層上面遺構のうち、直上の2c層で埋まるのがSD01、SK03~05であり、これらは3層の最終段階にあたる(図6)。SK05から瀬戸美濃焼天目碗10、SK03から備前焼壺13・焼塩壺18などが出土している。13の刻印2個は内底面に施されている。

(3)第2層の遺構と遺物(図7)

第2層から出土した遺物は、唐津焼皿14・15、志野焼皿16、土師器皿17、唐津焼の鉢または水指19などで、2a層の夏の陣に近い時期の遺物群である。ほかに、2a層の上面から掘り込まれた土壌SK02からも唐津焼の皿や鉢20・21が出土している。

〈まとめ〉

今回の調査は小規模であったが、注目されるのは以下の2点であろう。

その一つは、第4c層段階で出土した獅子口(図7-5)である。これは建物の大棟両端につける飾り

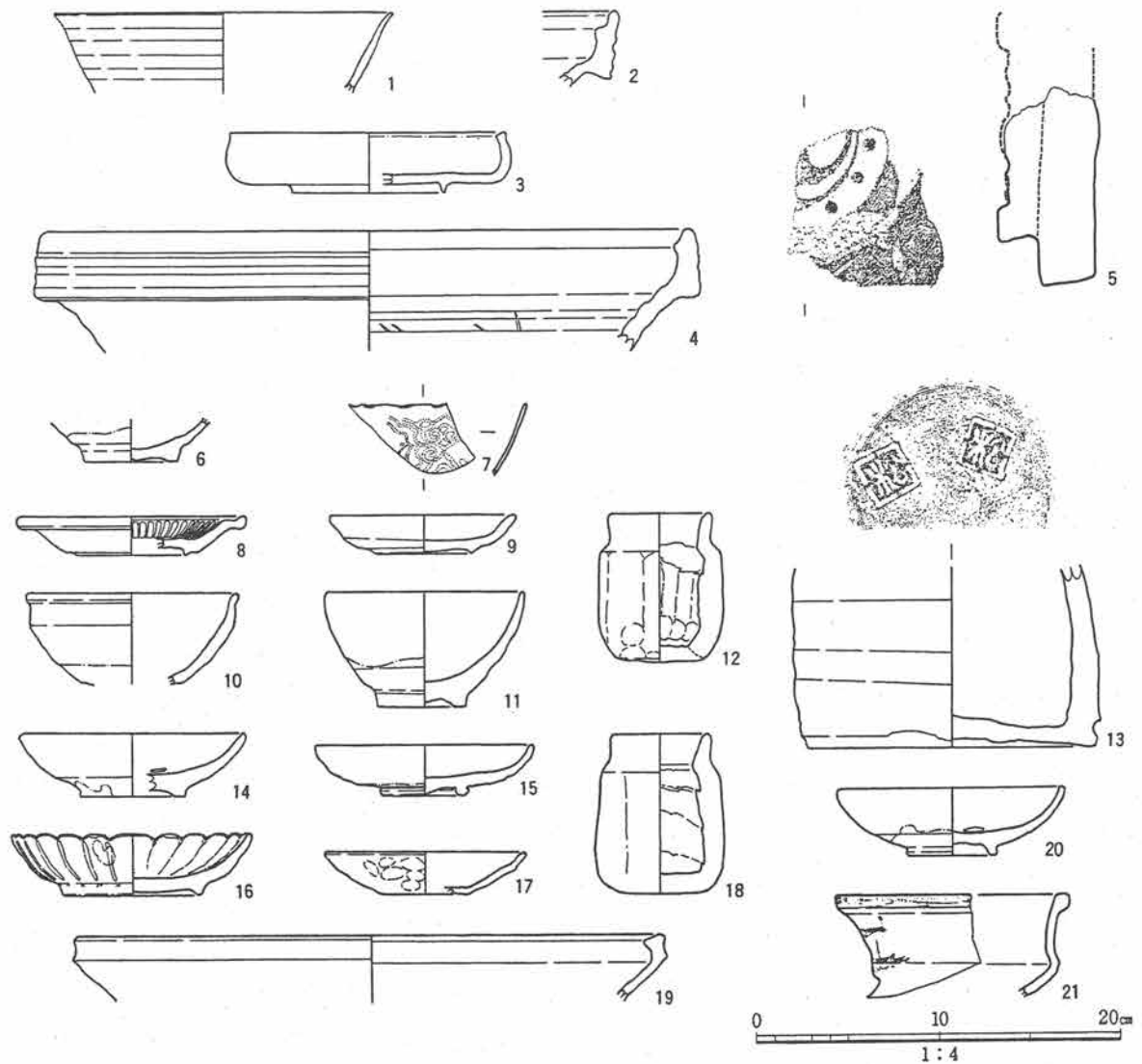
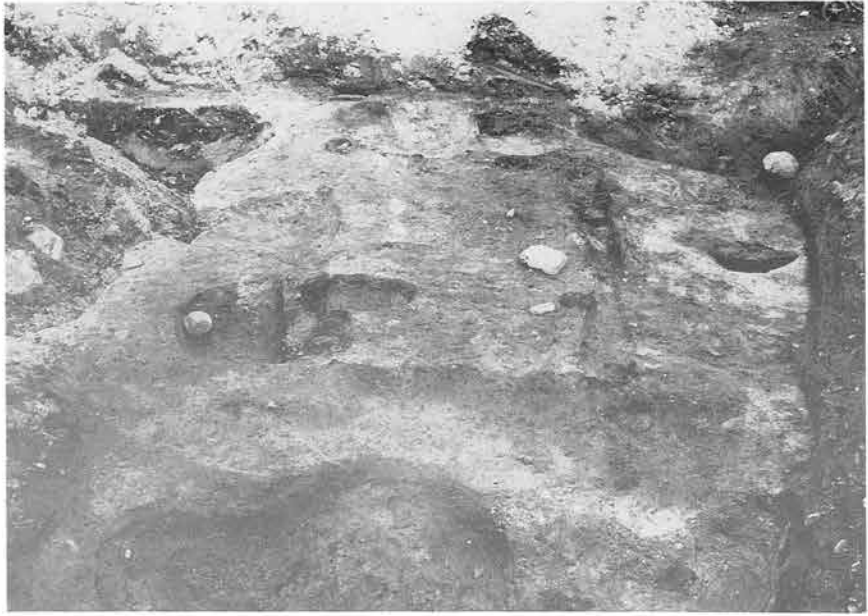


図7 出土遺物実測図

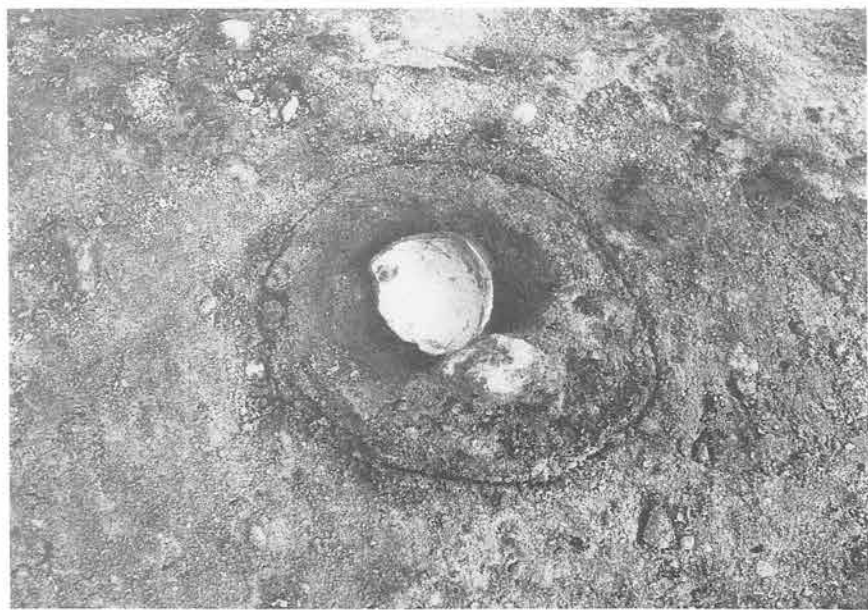
瓦で、その存在から、この付近にかなり格の高い瓦葺き建物が存在したことが推測される。宝暦7(1712)年の『大坂内町図』(慶長年間の図を模したとされる)によれば、調査地の北側には、西から平野橋を渡った突き当たり(東から平野橋に到る手前)に、道路をふさいで石田三成の屋敷地があったとされている。三成という人名の当否はともかく、内平野町と船場の平野町の交通を遮断する、この特異な屋敷地が、根拠もなしに描かれたとは考えにくい。そうすると、交通はこの屋敷地を迂回することになり、その南の迂回路が、調査地北隣の道路となる。したがって、調査地はかなり人々の往来が頻繁な地点ということになり、立派な建物が存在してもおかしくはないだろう。

もう一つは、第5層の特徴的な堆積の仕方である。本層は南北断面では比較的水平に近く堆積するのに対し、東西断面からは西から東へ次々と盛土工事を行ったことが知られる。調査地の西隣といえば、いうまでもなく東横堀川であり、つまり豊臣氏大坂城の惣構西堀である。よって、5層の盛土は惣構堀の開削による土砂で行われた、とも考えうる。ただ、本層からは出土遺物がなく、その当否は確認できない。ここでは一応、以上のような推測も可能だということにとどめておくこととする。

3層上面の遺構
(西から)



3層上面、SP04



南壁断面



大坂城跡発掘調査(OS01-34)報告書

- ・調査箇所 大阪市中央区内平野町2丁目20-1
- ・調査面積 25m²
- ・調査期間 平成13年12月17日～平成13年12月21日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 京嶋覚・積山洋

〈調査に至る経緯と経過〉

当該地は豊臣氏大坂城跡の北西部、惣構の一角に位置する(図1)。2001年11月1日、標題の工事に先立って試掘調査(OS01-28)が実施された。その結果、豊臣氏大坂城の時代を含む各時期の地層が良好に残っていたため、上記の日程で本調査を行うこととなった。敷地内にはコンクリートの基礎が随所に埋まっており、それらを回避して東西約6m、南北約5mの調査区を設けて機械掘削を行った(図2)。その後、人力による調査を進めたが、深い部分の調査は安全を最優先し、限定的に実施することとなった。

〈調査の結果〉

1. 層序(図3)

第1層：調査区の中央から北東部にかけて、江戸時代の地層中に顕著な焼土層が認められた。これを1a層とする。本層は分布が局部的で、かつ遺構(石組みを伴うものもある)の埋土なので、火災層で



図1 調査地位置図(1:5,000)



図2 調査区位置図(1:1,000)

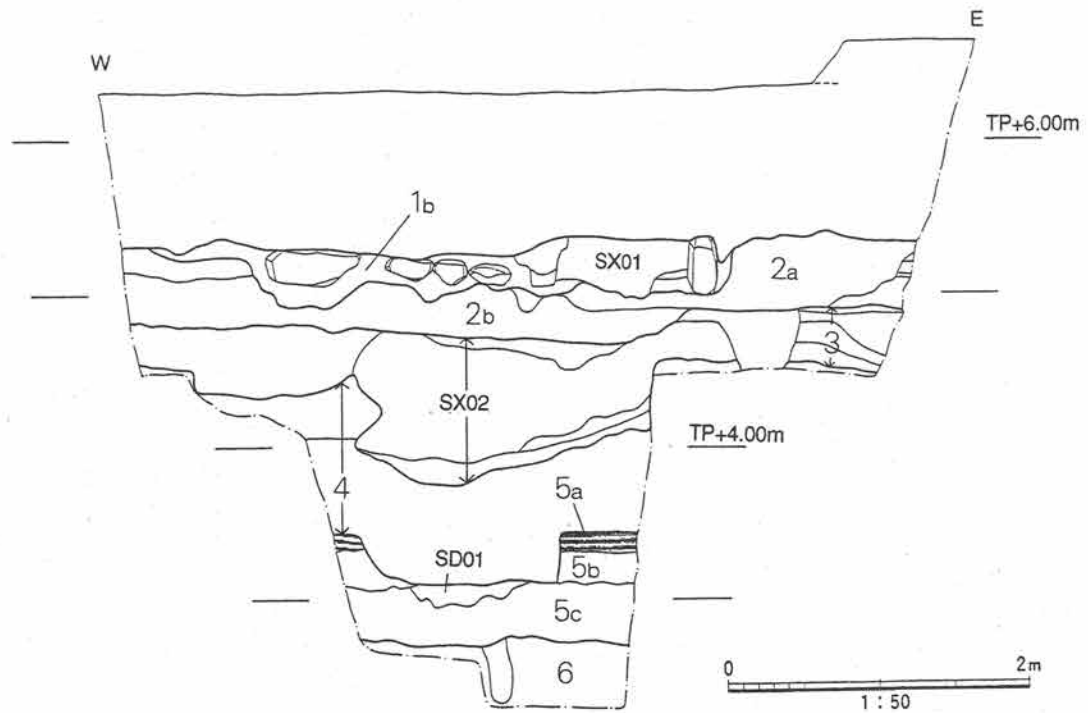


図3 南壁地層断面図

はなく、火を使う工房に係わるものであろう。17世紀前半の遺物が出土しているが、下位層に17世紀中ごろの遺物を含むので、それ以後の年代が想定される。1b層は褐色系のシルト混り砂礫を主体とする整地層で、人頭大か、さらに大きい石が東西に並ぶように含まれていた。石の上面は焼けており、ここでも火を使う工房の存在が推定される。

第2層：2a層は調査区北東隅で認められた粗砂層である。その下の2b層は厚さ40cm程度の黄褐色系炭混り砂礫・シルトなどからなる整地層である。上面では井戸SE01が検出され、生活面であったと推測される。本層には17世紀中ごろまでの陶磁器類が含まれている。

第3層：褐色系の粘土・シルト・砂礫からなる複数の整地層で、その上面は生活面であったと思われるが、顕著な遺構は検出されなかった。

第4層：層厚約110cmに及ぶ厚い整地層で、粘土・シルト・砂礫などのブロックからなる。北壁では、本来の上面がほとんど失われている。また層中の標高4.1m付近に平坦面があり、ごく短期間、地表面となっていたようだが、遺構はない。遺物は土師器皿1点のみで、整地の年代を確定するのは困難だが、豊臣後期から徳川初期までの時期であろう。ここでは周辺例にならって、本層を豊臣後期(三ノ丸築造)の盛土と考えておく。本層上面から掘込まれた遺構には17世紀前半代の遺物を含む。またその遺構内下層には炭・灰が混る部分があり、大坂夏の陣の焼土層に由来するものかもしれない。

第5層：地表面下約3.2m以下の黒色系の地層で、3枚に分かれる。5a層は黒褐色～暗灰黄色のシルト・砂礫等の薄層が集積したもので、上面は豊臣期(前期か後期かは不明)の生活面であろう。5b層は黒褐色砂礫混じりシルトで、遺物は土師器細片のみだが、中世のものと思われる。5c層は5b層と同様ながら、より砂礫を多く含む古代の遺物包含層である。基底面で遺構が検出された。

第6層は標高約2.3m以下に堆積する黄褐色砂礫層で、地山に相当する。

2. 遺構と遺物

(1) 古代・中世の遺構と遺物(図4・5)

5c層の基底面で直径0.4~0.5m程度の土壙SK07が見つかった。深さは0.2m弱で、土師器甕の口縁部などが出土した。またその北東の深掘り断面(図3)で直径約0.15m・残存深度約0.4mの小ピット(柱穴であろう)が見ついている。やはり5c層の基底面に位置づけられるが、詳細な年代は不明である。5c層からは、図5-1~4が出土した。1は口縁の立上りが非常に短く、平安前期とみられる生駒西麓産の土師器羽釜である。2は土師器であるが、口縁がひずみ、粘土紐接合痕と工具痕を外面にとどめることから、製塩土器かもしれない。3は古墳時代末ごろの須恵器杯身である。ほかに後述する近世のSE01から、大型の移動式竈の破片4が出土している。

5b層基底面で検出した落込みは、南北方向の溝とみられ、SD01と呼んでおく。遺物は土師器細片のみで、判然としないが、中世の遺構であろう。ただ、この遺構は4層基底面である可能性も残る。

(2) 近世の遺構と遺物(図6~8)

5a層上面では明確な遺構はなかったが、豊臣期の生活面であろうことは先述した。4層下面では、北壁断面(図3)にて5a・5b層を垂直に近く掘込む遺構が認められた。図化できなかつたが、南壁の断面にも同様の掘込みが認められ、これも南北方向の溝と思われる。

4層上面では、大型の土壙SX02のほか、土壙やピットなどの遺構が多く検出された。このうち、SX02は直径3m余・深さ1m以上の大型廃棄土壙で、コンテナパット1箱分の遺物が出土した(図8-5~19)。5~8は土師器皿で、5~7のように底部と口縁部に明瞭な屈曲がないものが多い。9・10は唐津焼碗で、いずれも全面施釉である。11~13は唐津焼皿で、目積み跡は胎土目である。14は瀬戸美濃焼と思われる碗で、高台内外面まで色の薄い緑釉を施す。15は口縁内外面に鉄釉を施す唐津系播鉢(類例は少ない)、16は丹波焼播鉢である。17は石製硯(石材は結晶片岩)、18は瓦質土器で、器種はわからないが、口縁外面を粗くヘラミガキしている。19の焙烙はA2

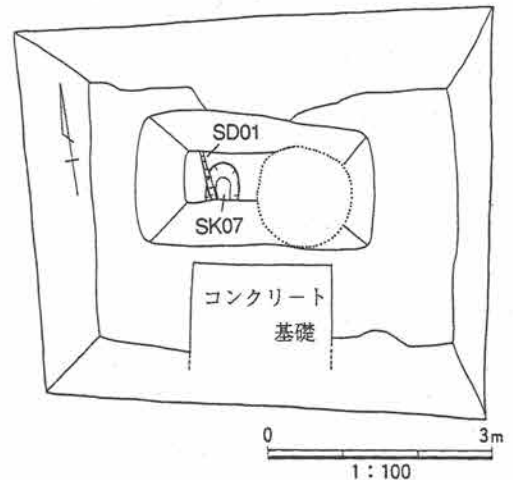


図4 第5層の遺構実測図

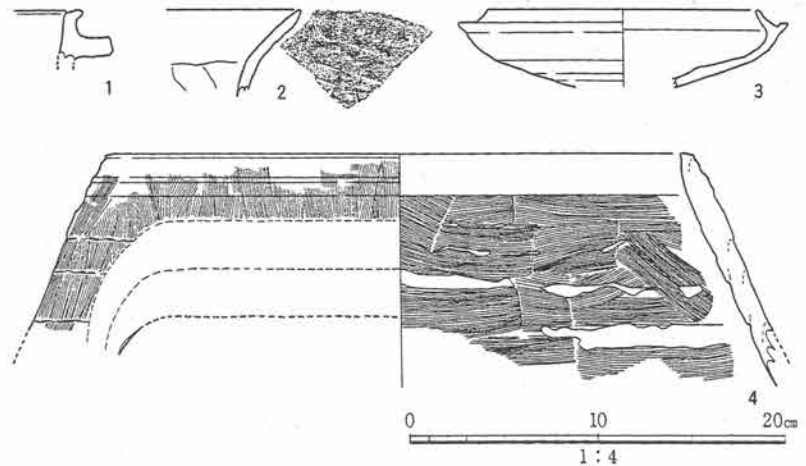


図5 出土遺物実測図1

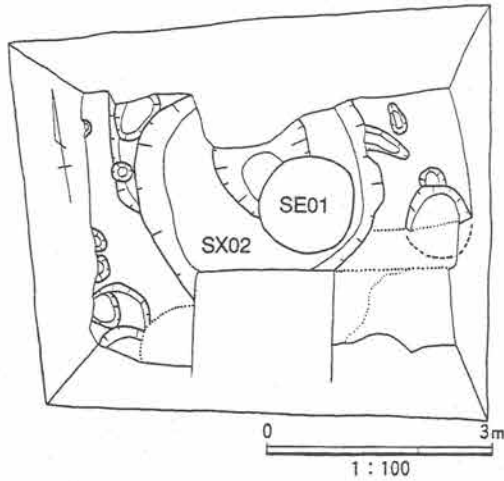


図6 第2・第4層の遺構実測図

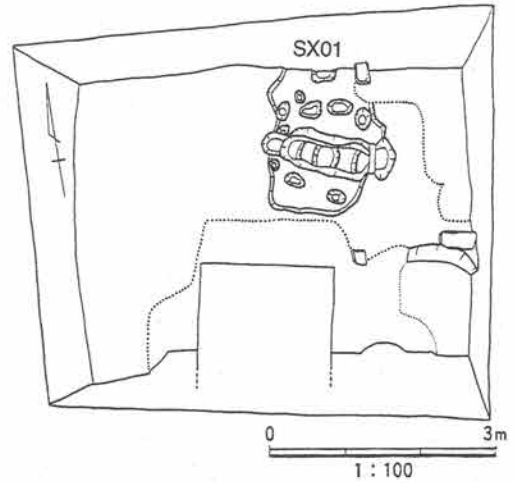


図7 第1層の遺構実測図

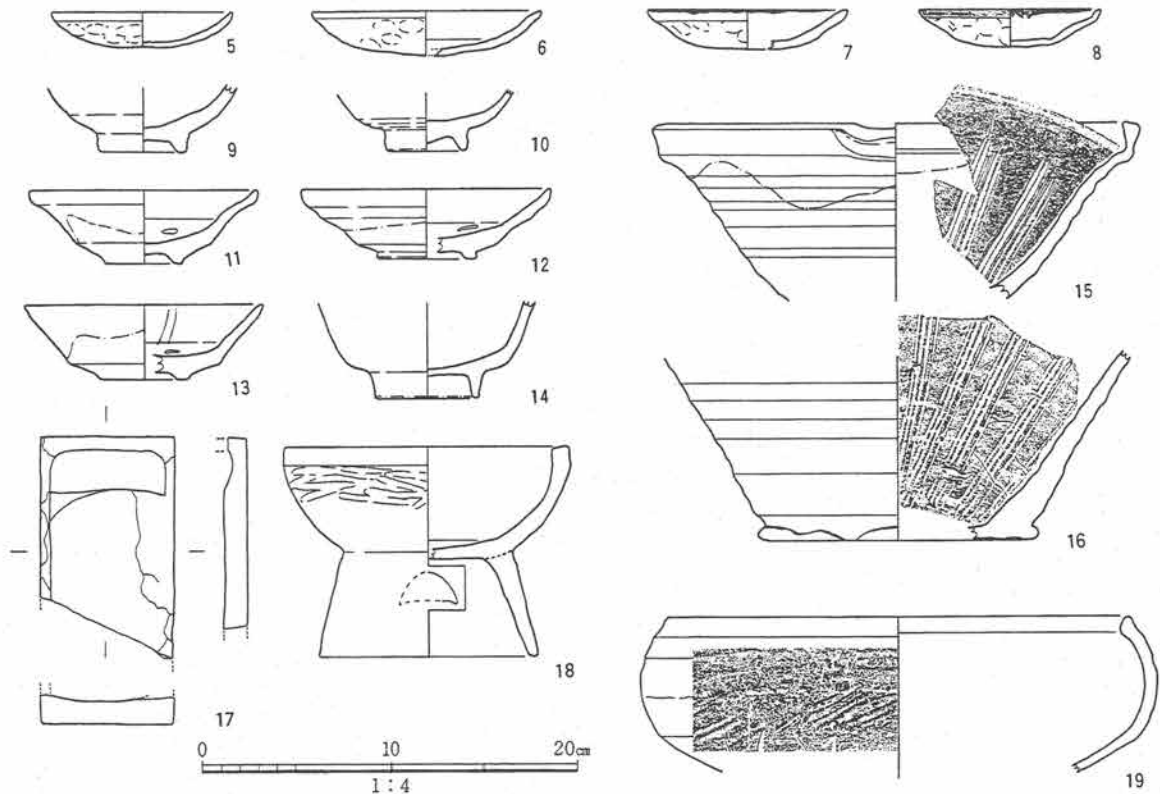


図8 出土遺物実測図2

類で、編年上では大坂の焙烙2群に位置づけられる[積山洋1999]。ほかに瀬戸美濃焼の白天目碗や呉器手碗に近い肥前陶器もある。以上から、17世紀前半でも第2四半期を中心とする遺物群であろう。

2層上面では井戸SE01が検出された。深さは2.5m以上である。この井戸からは高台無釉の肥前青磁碗や呉器手碗などが出土し、17世紀中ごろの遺物が出土した。1層に関わる遺構としては、SX01がある。これは北壁断面でみると、東に側石を立て、西にもそれを抜き取った跡があることから、石囲い遺構であったことがわかる。その平面形は中央が窪んで南北方向にのび、南側では底に凹凸のある東西に長い土壇を設け、その東側にも板石を立てていた。この土壇の周囲には人頭大ほどの不整形

な小穴が並ぶように巡っており、深さはいずれも数cm以下と浅いこと、また1a層の焼土と炭・灰で埋まっていたことなどから、これらの小穴は、土壙を囲む構築物の基礎となる石材を抜き取った跡とみられる。遺構の性格としては、層序の項で述べたように、火を使う工房の施設であろうが、具体的には明らかでない。ひと塊りの鉄滓が出土したものの、それだけで鍛冶工房と見るのは無理であり、別途考えるべきであろう。年代は17世紀中ごろ以後である。

〈まとめ〉

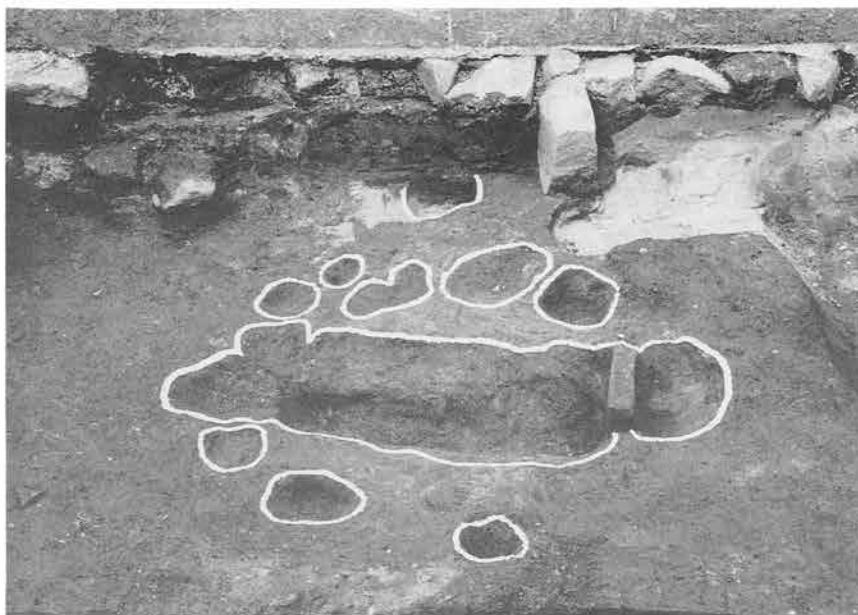
今回の調査では、古代の遺物包含層と遺構を確認したことが、最大の成果であろう。平野橋東方の区域は、これまで何度も調査が行われており、以前から古代の遺構・遺物の存在が注意されていた。本地点では6世紀後半から10世紀ごろまでの遺物包含層があること、その下には土壙や小柱穴なども残っていることを確認することができた。ただし、中世の様相については、さほど明らかにはできなかった。

ついで近世には、本地点の位置は、内平野町通りと松屋町筋の交差点北東であるが、現松屋町筋はかなり拡張されているので、当時においては交差点北東から内平野町を多少東に入った地点にあたる。そのような位置で、地下約3mにて豊臣期の生活面が知られ、また徳川期には火を使う工房が存在したことが判明した。これらの点も、大きな成果であった。

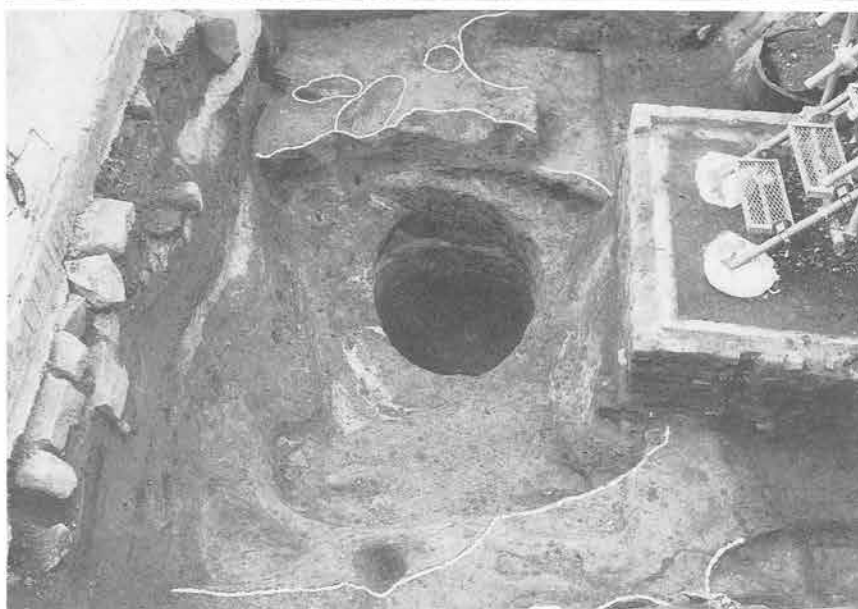
参考文献

積山洋1999、「大坂の土師質土器」：『関西近世考古学研究』Ⅶ、関西近世考古学研究会

SX01 (南から)



SX02 (西から)



地層断層
(南東から)



東心齋橋1丁目所在遺跡発掘調査(HB01-1)報告書

- ・調査箇所 大阪市中央区東心齋橋1丁目2-30他
- ・調査面積 88m²
- ・調査期間 平成13年9月11日～平成13年9月13日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 京嶋覚・小倉徹也

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は東心齋橋1丁目(図1)に所在する新規に発見された遺跡で、三休橋に至る筋と周防町通が交差する北東角に位置する(図2)。この付近は「島之内」と呼ばれる地域で、中世には石清水八幡宮領の三津寺庄として小規模な荘園村落が形成されており、その後中世末期から近世にかけてはこの三津寺庄を母体として三津寺村が成立し、元和年間には大坂城下町に編入されたことが古文書などの記録からわかっている[伊藤毅1987]。

建設工事に伴い、平成13年6月1日に行われた試掘調査(01-104次調査)で、現地表下約3mにおいて徳川期の盛土下に豊臣期と考えられる盛土と古代以前にさかのぼる可能性のある地層が確認された。これを受けて大阪市教育委員会と事業者とが協議を行い、本調査を実施するに至った。調査地では建設工事が進行していることから、徳川期の盛土までを事業者側が掘削し、その後に発掘調査を行うことになった。本調査は敷地の南東寄りに調査区を設定し、平成13年9月11日から行った。その結果、17世紀中頃から後半にかけての遺構が調査区東部において確認された。7月12日に掘削、実測・写真撮影などの作業を終え、7月13日に水準測量を行って現場におけるすべての作業を終了した。

調査に用いた方位は磁北、標高はTP値である。

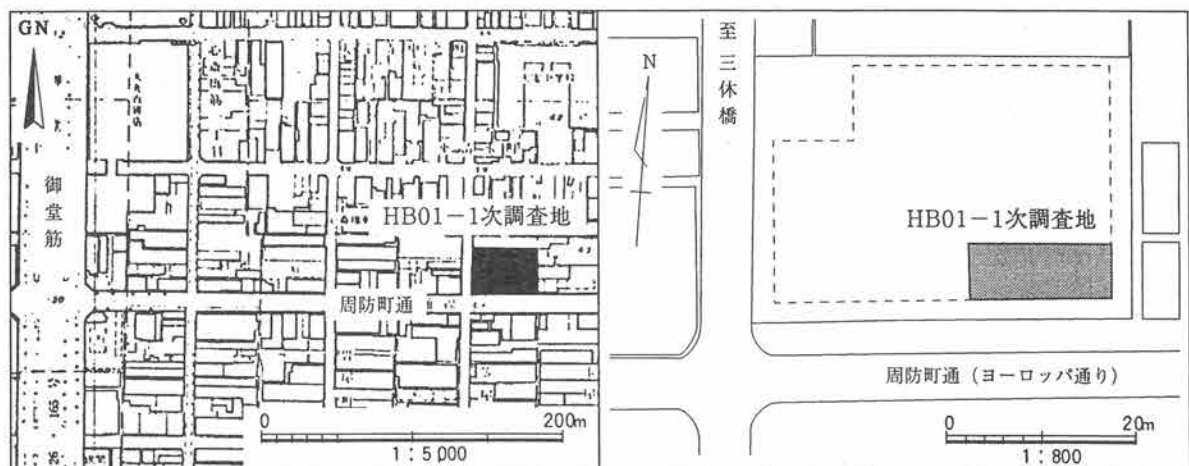


図1 調査地位置

図2 調査区の配置

〈調査の結果〉

1. 層序

現地表下約3mから約3.8mまでの地層を観察した。以下に層序の概略を下位層より記し、各層の層相や特徴を表1、代表的な地質柱状断面を図3に示す。層序の確立は最も残りの良かった調査区東部で行った。なお、試掘調査(01-104次調査)で確認された層序を図3と表1に加えておく。

第2層は第2a層と第2b層とに細分される。第2b層は灰白～淡黄白色を呈し、細粒砂～中礫で構成される海成層である。周辺の地質状況からいわゆる「難波砂堆」を形成する堆積物と考えられ、調査区の全域に広く分布する。第2a層はその層相から下位の第2b層が土壌化の影響を受けて形成されたものである。

第1層は黒灰色を呈し、シルト質中粒～粗粒砂からなる「遺物包含層」で、多数の遺物が出土した。出土した肥前磁器碗から17世紀中頃～後半に当たると考えられる。

第0層は現代盛土および建設工事によって掘削・除去された地層である。

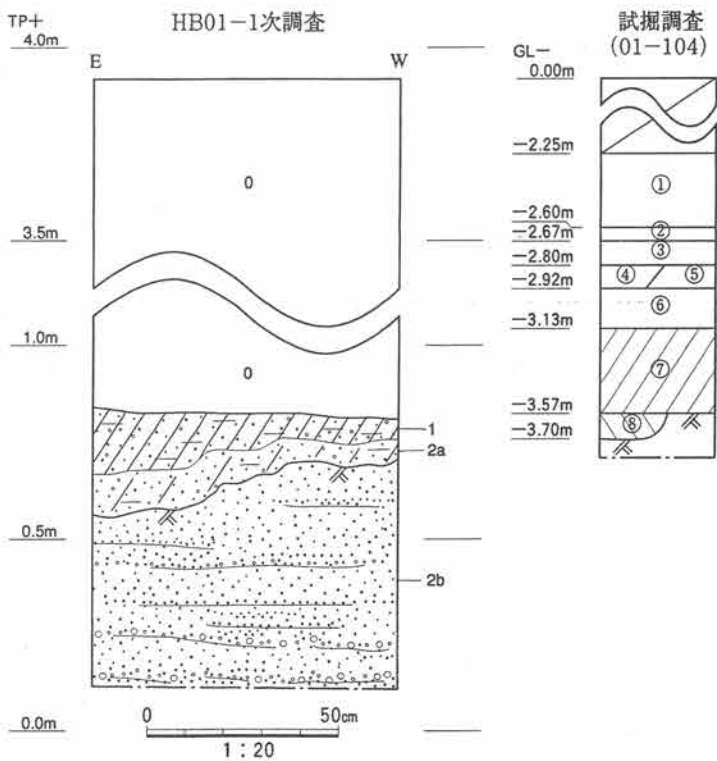


図3 地質柱状断面(東部)および試掘調査(01-104次調査)模式柱状

表1 層序表

HB01-1 層序	試掘調査 01-104	岩相	層厚 (cm)	特徴	遺構	おもな遺物	時代
第0層		攪乱(現代盛土および工事掘削層)	225				近・現代
	①	暗灰～黒灰色 粗粒砂・シルトetc	35			唐津焼(17C前) 肥前磁器(17C中～後)	
	②	褐色 砂礫+粘土・シルトetc	7		←生活面	—	
	③	灰黒～黒色 砂混りシルトetc	13		←生活面	唐津焼・肥前磁器(17C中～後)	
	④/⑤	暗青灰色 粘土～砂etc / 緑灰色 砂+粘土・シルト	12			青花・丹波焼・土師器(11C中?)	
	⑥	黒灰色 砂礫	21		←生活面	—	
	⑦	緑褐色 砂礫+灰色 粘土・シルトetc (盛土)	44		▽井戸SE01-02	井戸瓦(SE01)	
第1層	⑧	含粗粒砂～中礫 黒灰色 シルト質中～粗粒砂(遺物包含層)	6～15			肥前磁器・唐津焼・丹波焼・板材	
	a	含粗粒砂～細礫 暗褐色 シルト混り中粒～細粒砂	6～10	上層から染み込み顕著	←土壌SK01.02.03	—	
第2層	b	灰白～淡黄白色 細粒砂～中礫(海成層)	≧15 (250)	難波砂堆相当層? プランナータイプ		—	中世以前? ?

凡例 ← 上面検出遺構 ▽ 基底面検出遺構

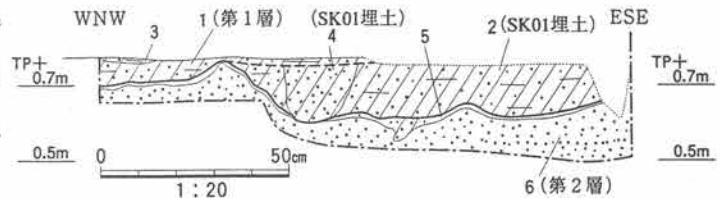
2. 遺構と遺物

平面的な調査は第0層基底面と第2a層上面において行った。

1) 第2a層上面検出遺構(図6)

土壙SK01~03を検出した。いずれの土壙も東半部が調査区外にあるため、平面形は不詳である。

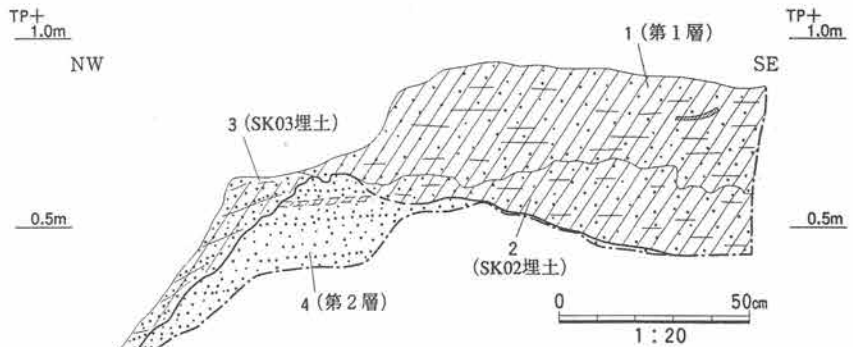
SK01(図4)はその西半部の形状からほぼ楕円形の平面を示すと考えられる。短径約1.20m、深さ0.10~0.15mである。肥前磁器碗1をはじめ、土師器の竈・皿、肥前陶器碗・皿のほか、魚の骨、炭化米が出土した。



- 1: 黒色シルト質中粒~粗粒砂
- 2: 黒色シルト質中粒~粗粒砂
- 3: 灰色シルト質中粒~粗粒砂
- 4: 灰色中粒~粗粒砂
- 5: 酸化鉄の集積層(第2層が変質したもの)
- 6: 暗オリブ褐色中粒~粗粒砂

図4 SK01断面

SK02(図5)は南北幅が約2.10m、深さ0.23mである。SK01とは切り合い関係が観察されないことから同時期に存在していたことが考えられる。青花小杯26、肥前磁器碗27・28、^{TP+}1.0m
肥前陶器碗29~31、焼締陶器(丹波焼)32・33をはじめ、土師器炮烙・竈・皿・壺、瓦質土器火入れ、砥石のほか魚の骨、ウリ科の種実と多量の瓦が出土した。



- 1: 含炭化物・瓦・材 黒色細粒~中粒砂混りシルト
- 2: オリブ黒色シルト質細粒~中粒砂
- 3: 暗灰色シルト混り中粒~粗粒砂
- 4: 灰黄色中粒~粗粒砂

図5 SK02・03断面

SK03(図5)は南北幅が約1.08m、深さ0.23mである。北半部は工事掘削時

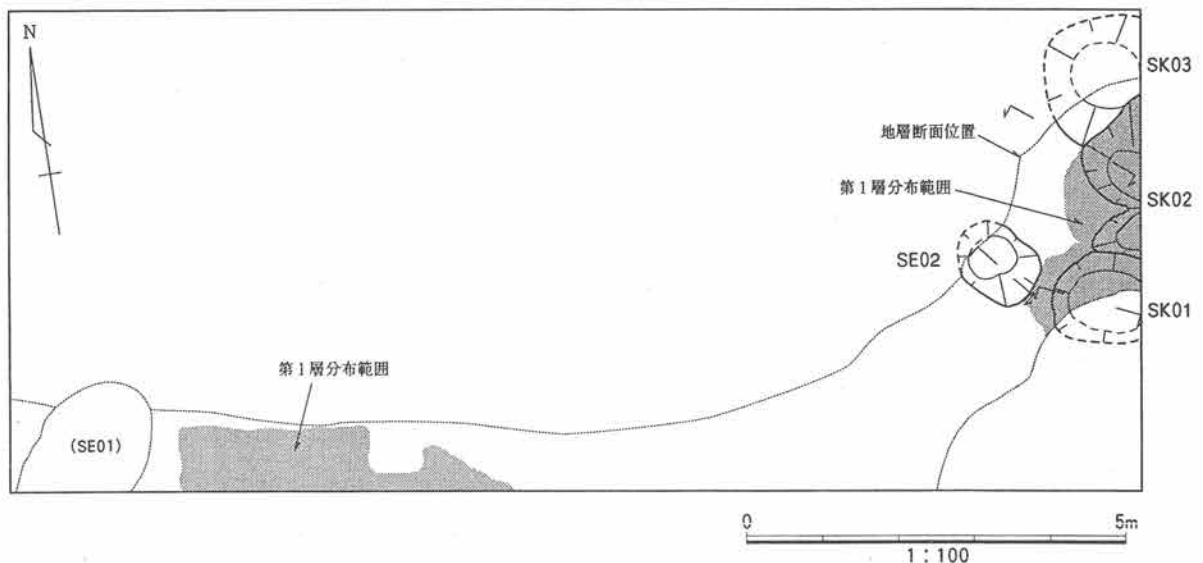


図6 第2a層上面および第0層基底面検出遺構と第1層分布範囲

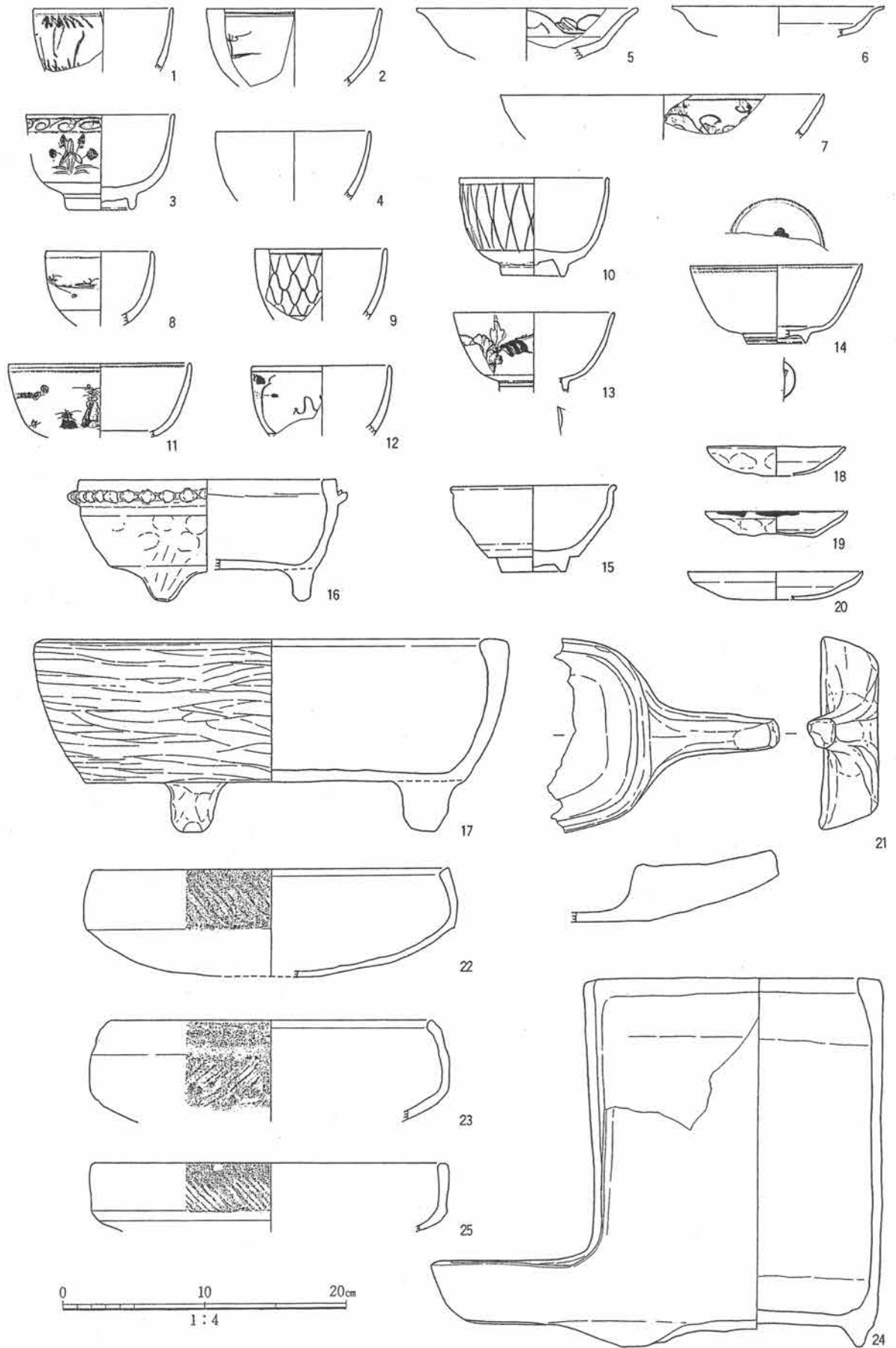


図7 SK01・SK03・SE02ならびに第1層出土遺物実測図
SK01(1)、SK03(2~5)、SE02(6~24)、第1層(25)

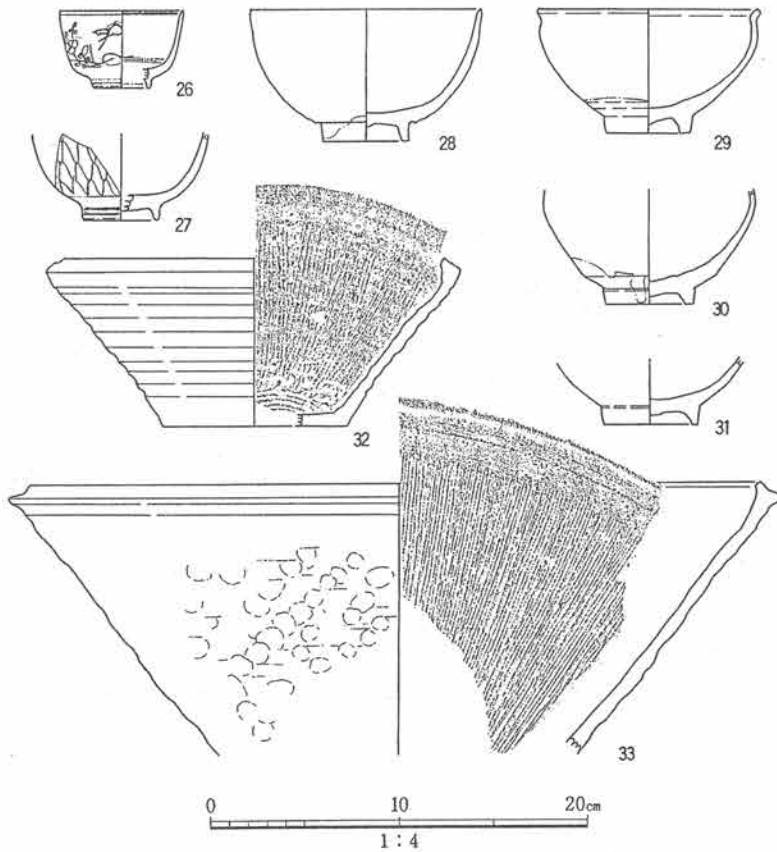


図8 SK02出土遺物実測図



図9 SE02出土木筒実測図

にはほぼ失われていたが、わずかに下底部が残されていた(図6)。肥前磁器碗2~5をはじめ、土師器 炮烙・皿、青磁鉢、絵唐津大皿、焼締陶器(丹波焼)、砥石のほか、魚の歯と多量の瓦が出土した。

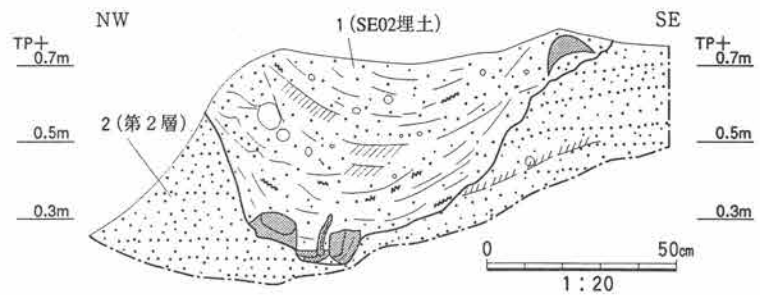
土壌SK01~03の出土遺物はいずれも17世紀中頃から後半に属する年代を示している。

2) 第0層基底面検出遺構

井戸SE01・02を検出した。

SE01は埋土よりレンガが出土しており、近代以降に埋戻されたものと考えられる。直径約0.60mでほぼ円形の平面を示す。深さを確認するため1.60mまで掘削したが、安全面を考慮して完掘を断念した。

SE02(図10)は長径1.10m×



1: 含炭化物 黒褐色中粒砂質シルト~シルト質中粒砂
2: にぶい黄色中粒~極粗粒砂

図10 SE02断面

短径0.92m、残存する深さ0.61mで、隅丸方形の平面を示す。井戸底部付近と考えられ、埋土に水漬かりの堆積構造が認められる。肥前磁器の皿6・7、碗8~14、瀬戸美濃焼陶器15、瓦質土器火入れ16・17、土師器の皿18~20、十能21、炮烙22~24、竈25をはじめ、信楽・丹波播鉢、沢瀉紋が描かれた漆器椀、砥石、鉄製火箸、木筒34のほか、魚の骨、ウリ科の種実と多量の瓦が出土した。木筒には「卯年辛」と記されており、「辛」が「卯年」に比べて文字サイズが小さいものの、これを「辛卯」年と解釈して肥前磁器の年代とを考え合わせると西暦1651年を示していることになる。井戸底

部の堆積物はこの時期に堆積したものと考えられ、遺物も17世紀中頃～後半とこの木簡の年代に一致している。

〈まとめ〉

今回の調査では、現地表下約3 m (TP+0.9 m) から約3.8 m (TP+0.1 m) までの地層を確認した。およそTP+0.7 m以深に分布する第2層はいわゆる難波砂堆の構成層に対比されると考えられ、この地域の地山層に相当する。この第2層上面には初期の生活面が形成されたと考えられ、古文書などから中世であることが想定されるが、本調査地では第2層上面には17世紀中頃～後半頃の遺構が残存していたのみで、中世および近世初頭の遺構は見い出されなかった。

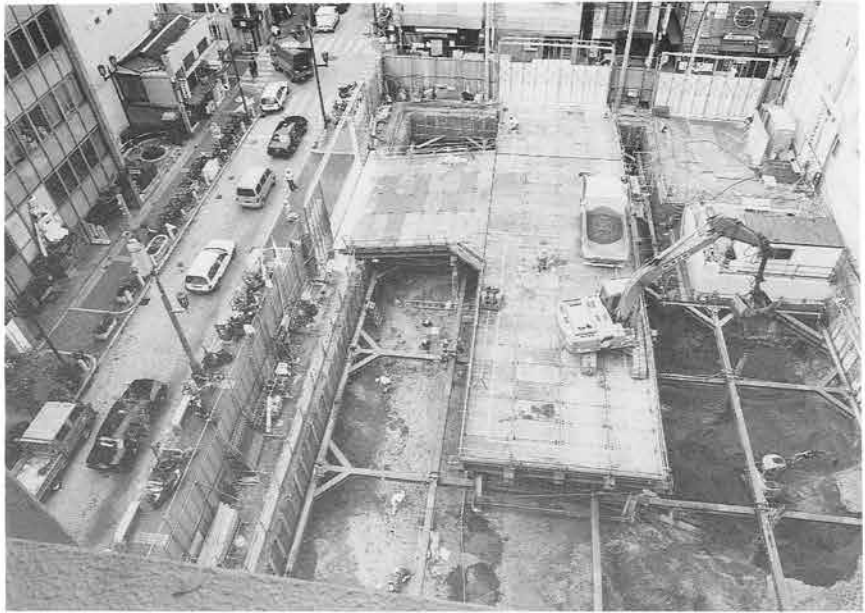
また、出土遺物を船場の南部域に当たるOJ99-2次調査(中央区南本町3丁目3)と比べると、およそ1段階新しいが、よく似た遺物構成を示している。本地域の開発に船場の市街地化がどの程度影響しているか考える上でも重要な地域である。

東心斎橋1丁目所在遺跡は今年度新しく発見された遺跡であり、周辺の遺跡群との関連性など、まだまだ不明な点が多い。今後行われる調査の結果を合わせて検討していくことが必要である。

参考文献

伊藤毅1987、「島之内の成立」：『近世大坂成立史論』、pp.227-306

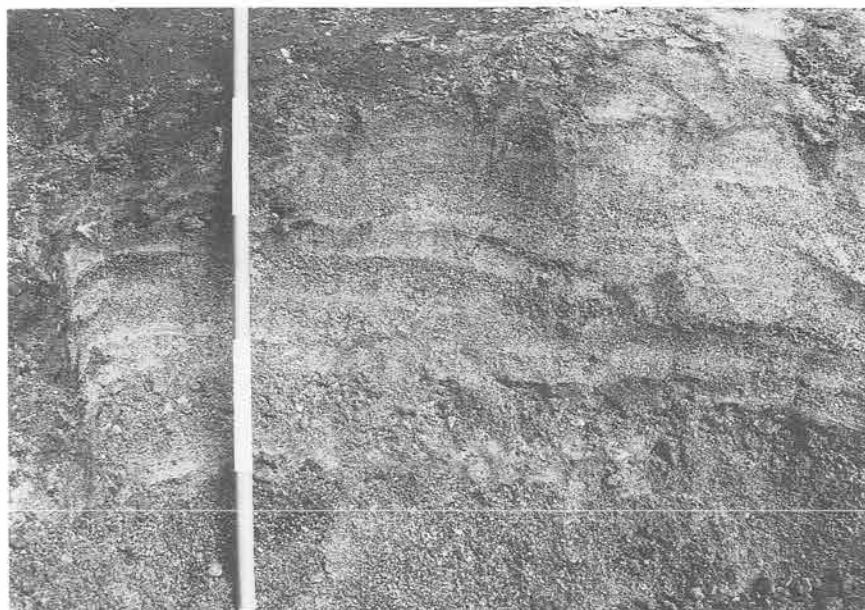
調査地遠景
(東から)



調査区全景
(西から)



地層断面
(東端：北から)



III 天王寺区

細工谷遺跡発掘調査(S D01-4)報告書

- ・調査箇所 大阪市天王寺区筆ヶ崎町87の一部、15の一部
- ・調査面積 20㎡
- ・調査期間 平成14年1月21日～平成14年2月19日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 京嶋覚・積山洋

〈調査に至る経緯と経過〉

当該地は、南北に延びる上町台地から東に張出した舌状尾根に位置する広大な敷地である。1997年、この尾根の南西の小谷にて古墳時代から平安時代にいたる遺構・遺物が多数発見され、特に飛鳥・奈良時代には和同開珎の枝銭や「百済尼寺」と復元される墨書土器が見つかり、注目を集めた。

今回、当該地では大規模な開発が予定されたため、平成13年10月11日、5箇所にて試掘を行い、同年11月1日には遺構の存在が予想された北東部にて、東西約20mのトレンチによる再試掘が実施された結果、遺構の存在が確認され、上記の日程で本調査を実施することとなった。調査開始後まもなく、試掘で確認された遺構が南北方向の溝であることが明らかとなり、道路側溝跡である可能性も想定されたため、関係者間の協議を経て、西側に調査範囲を拡張した。拡張部分の調査費用は当年度の市内埋蔵文化財緊急発掘調査経費を充てた。

なお、本調査の対象にならなかった敷地南半部については、平成14年2月12日、あらためて6個

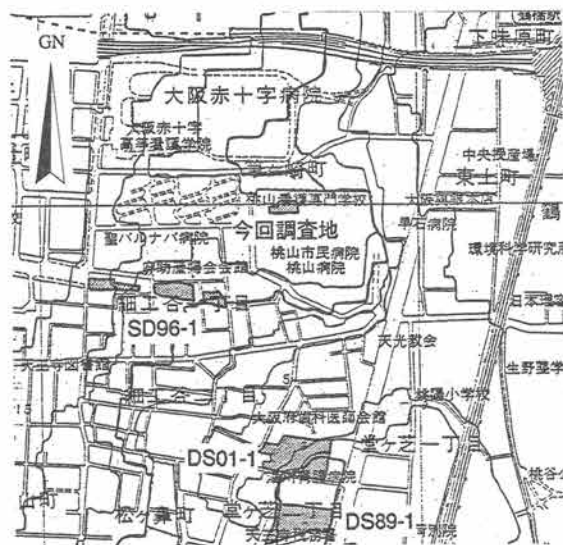


図1 調査地位置図

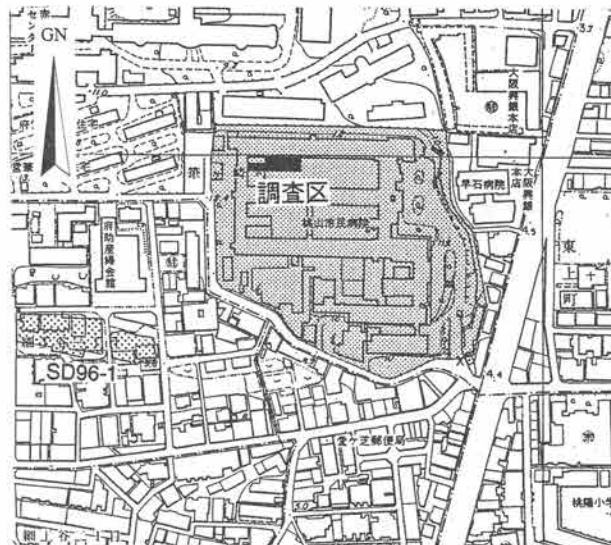


図2 調査区位置図

所にて試掘を実施し、遺構や遺物包含層はすでに失われていることが確認されている。

〈調査の結果〉

1. 層序

今回調査地では、古代・中世などの遺物包含層はほとんど残っておらず、重機で近現代の地層を除去すると、ただちに地山である上町層に達した。上町層は黄褐色系の砂礫・シルトであり、旧地表面はすでに一定の削平を受けたとみられる。

2. 遺構と遺物

見つけた遺構は、調査地の西側で検出された南北溝SD01である。幅1.2~1.5m、深さ0.5m程度で、方向は北でやや東に蛇行していた。溝底のレベルから、水流は北向きであったことがわかる。この溝は少なくとも5時期に分層できたので、層位ごとに掘り分けて調査を進めた(図3)。SD01-d・eは溝内下層のe・d両層が堆積した時期であり、もとの溝の姿にもっとも近いものである。その後、c層からa層へと堆積が進み、次第に埋まっていくようすがうかがえた。c層~a層は層相が非常に類似しており、さほど時間差はないとみられる。出土遺物(図3)には、古代の須恵器1・土師器・格子

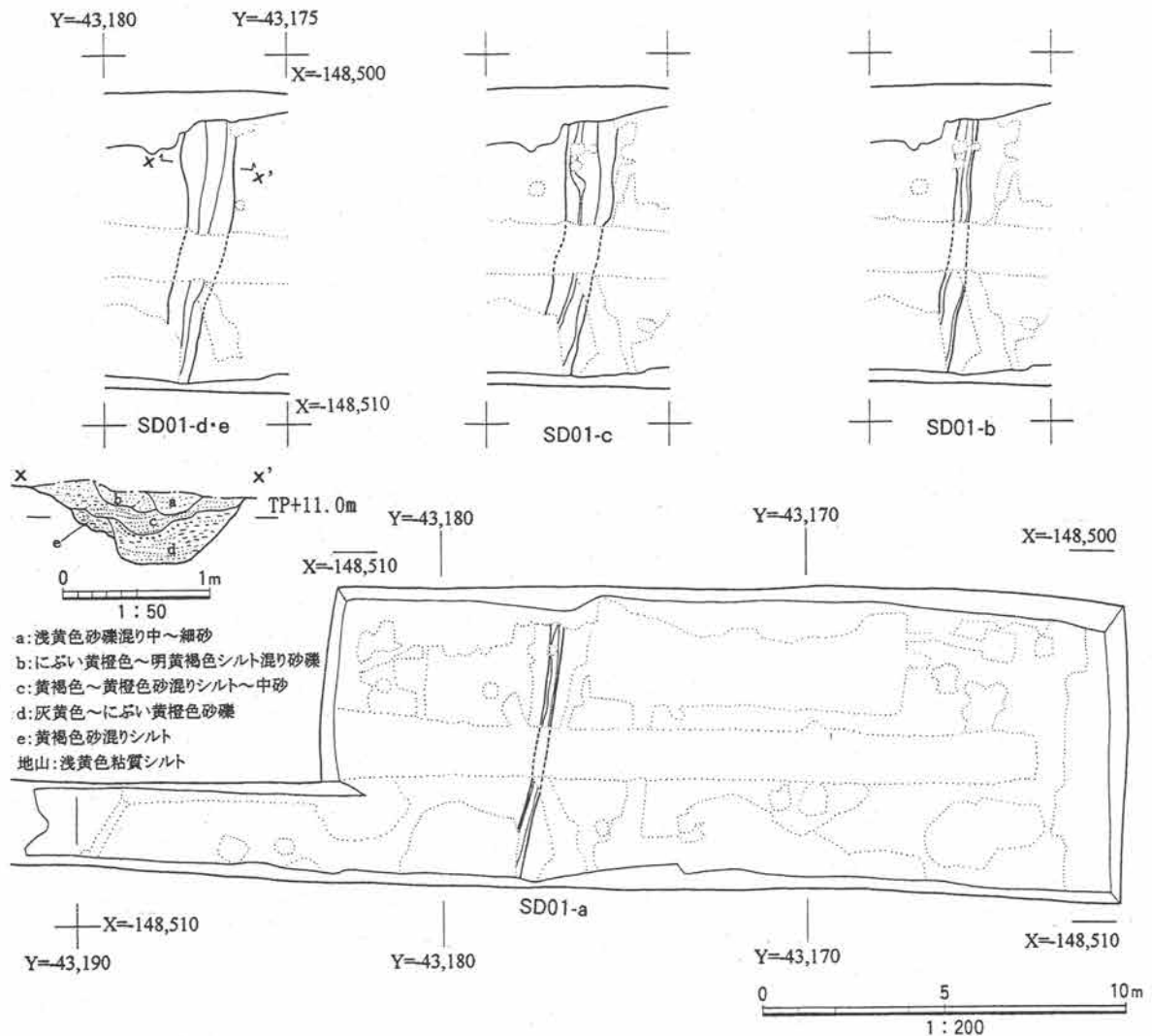


図3 遺構実測図

タタキで整形した布目瓦2・瓦器碗などの細片が各層から出土したほか、d層から中国製白磁3、c層から瓦質羽釜4などが出土している。白磁3は口縁の玉縁が小さく、11世紀前後のものとみられる。口縁が内傾して立上がる羽釜4は14世紀前後とみられる。

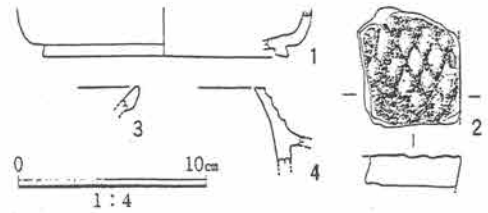


図4 遺物実測図

なお、SD01の西側で、並行する南北溝跡が見つかる可能性が考えられたが、精査の結果、そのような遺構は見つからなかった。

〈まとめ〉

先述したように、細工谷遺跡は百済王氏に関わる飛鳥・奈良時代の遺跡[大阪市文化財協会1999]として知られており、今回の調査でも、古代の遺物が少なからず出土した。よって細工谷を望む高台であるこの一帯にも、もとは柱穴などの遺構が存在したが、後世の削平で失われてしまったという可能性が想定される。そして平安時代後期ごろから中世にかけて、南北溝がこの地に掘られ、次第に埋まっていくようすが知られた。上町台地一帯の中世の遺跡としては四天王寺が著名であるが、ほかにも点々と瓦などの出土が知られている。細工谷遺跡が中世に及ぶ複合遺跡であることが明らかとなったことは、中世の上町台地の歴史を探るうえで、新たな資料が得られたわけであり、その点が本調査の最大の成果であったといえる。

引用・参考文献

大阪市文化財協会1999、『細工谷遺跡発掘調査報告』I

機械掘削時の風景
(西から)



S D01検出状況
(南から)



S D01断面



堂ヶ芝2丁目所在遺跡発掘調査(D S01-1)報告書

- ・調査個所 大阪市天王寺区堂ヶ芝2丁目
- ・調査面積 約250m²
- ・調査期間 平成13年12月12日～平成14年1月9日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 京嶋覚・松本啓子

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地はJR環状線桃谷駅の西約200mの上町台地の東斜面に位置するが、調査地北西部に南西から北東に走る深い谷が通るため、比高約5mにも及ぶ北西に下がる傾斜面が調査地中央部を横断している(図1)。この谷の北西側の対岸には「百済尼」「百尼寺」などの墨書土器や「和同開珎」の枝銭が出土したことで有名な細工谷遺跡(SD96-1次調査)がある。また調査地の南と東の200mほどの範囲は、



図1 調査地周辺地形図

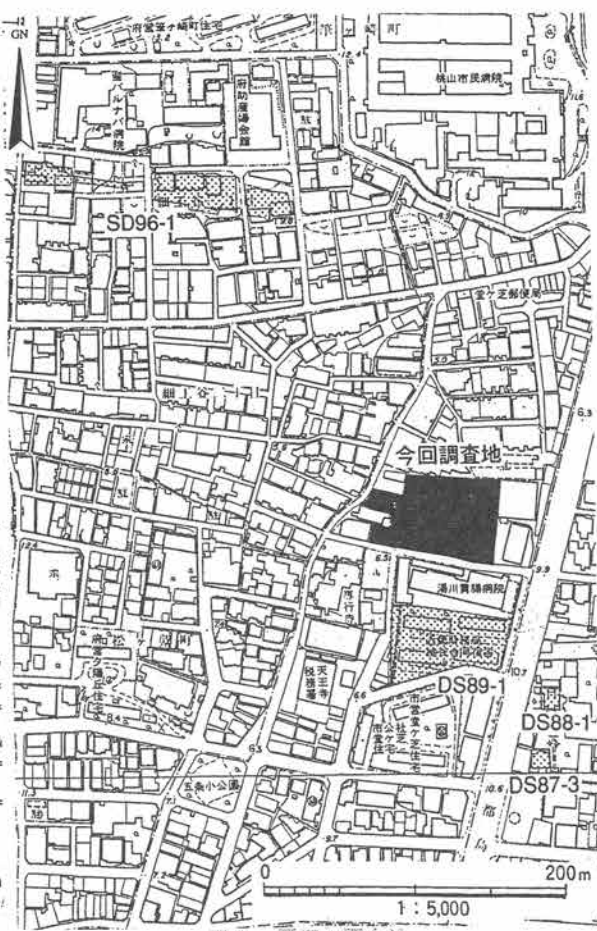


図2 周辺の調査地



図3 調査区位置図

以前から白鳳～平安時代の瓦の散布地として知られ、発掘調査でも古代の瓦が出土している(図2のDS87-3・88-1・89-1次調査)。現状では確実な遺構は検出されていないが、このあたりに古代寺院が存在する可能性が指摘されている。

平成13年11月29日に調査地内の高所・低所の2個所で試掘調査を行ったところ、高所で中世盛土の可能性のある地層を、また低所で中世の遺物を包含する谷の埋土を確認した。そこで関係各機関の協議を経て、本調査を行うことになった。

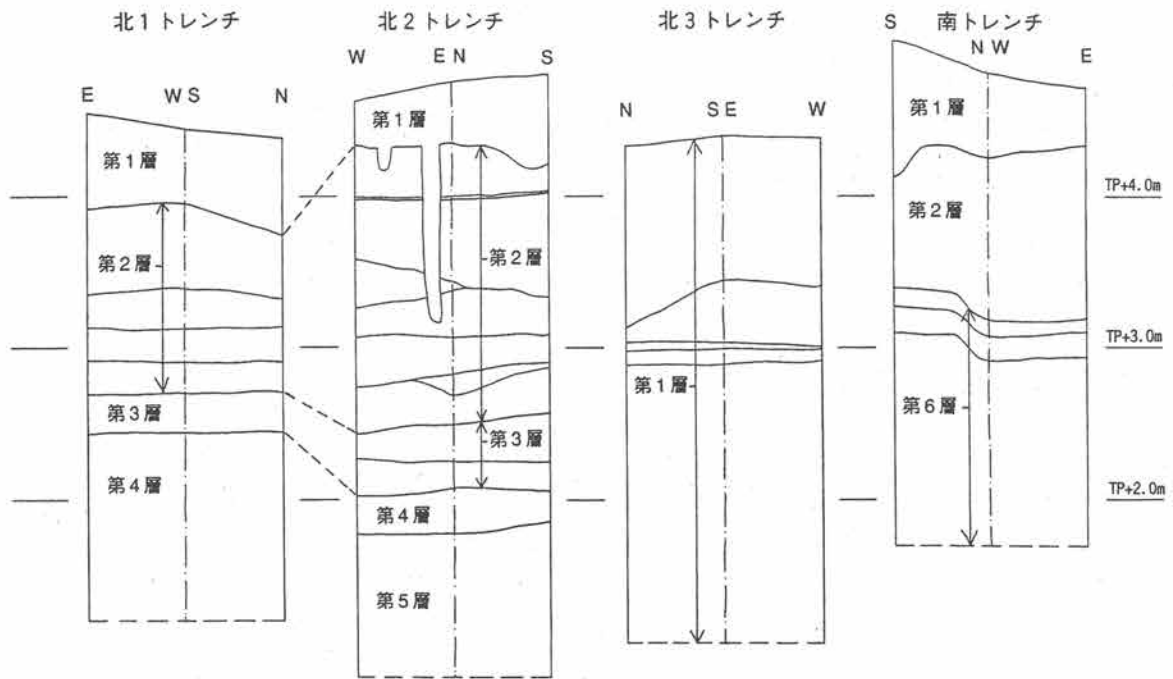
図3のように、上の調査区には逆L字形のトレンチを、下の調査区には合計4個所の小トレンチを設定した。上の調査区では遺構・遺物の有無と平面的な広がりの確認を主眼とし、中世盛土の可能性のあるシルト質粘土層の上面までを重機で掘削し、以下を人力で精査した。下の調査区では谷埋土の詳細な情報の収集と旧地形の確認を主眼に調査を行ったが、谷の深い所では安全のため現地表から重機の届く深さまでを調査した。

前の建物の解体作業と並行して行ったため効果的に作業を進行させることが難しいときもあった。平成13年12月12日に上調査区の重機掘削を開始し、人力による精査に移行した。上の調査区に引き続き下の小トレンチの重機掘削を2日間で行い、同時に地層の観察と遺物採集、記録作業を済ませ、その日のうちに埋戻した。上の調査区も精査を終えた後、平成14年1月9日に埋戻しを行い、現地での調査を完了した。

なお、本調査では方位は磁北、標高はTP値を使用している。

〈調査の結果〉

1. 層序



- 第1層：現代表土および盛土
- 第2層：砂礫・シルト・粘土が混在する近世整地土
- 第3層：淡灰色シルト質粘土～粘土(谷の埋土)
- 第4層：黒褐色粘土(谷の埋土)
- 第5層：茶褐色粘土(谷の埋土)
- 第6層：黄灰色シルト質粘土(地山)

図4 下の調査区の層序模式図

下の調査区では北1・2のトレンチにいくつかよく似た地層が確認された。また、南トレンチと上の調査区の地層にも関連性が認められた。ただ北3トレンチだけは重機の届く範囲はすべて現代の客土層であった。これらを総合した本調査地の層序は、以下のとおりとなる(図4・5)。

第1層：現代表土および盛土である。

第2層：砂礫・シルト・粘土が混在する整地土で、近世の遺物が出土した。

第3層：北1・2トレンチに見られる淡灰色シルト質粘土～粘土で、谷の埋土である。遺物は北1トレンチで中世陶器片が出土した。

第4層：北1・2トレンチに見られる黒褐色粘土が主体の、木の繊維や雑木を大量に含む腐植土層(図版1枚目上段)である。遺物は出土していない。第3層同様に谷の埋土である。

第5層：茶褐色粘土で、北2トレンチの谷の埋土である。遺物は出土していない。

第6層：南トレンチと上の調査区で見られた黄灰色シルト質粘土を主体とする層で、後述する第7層以下の海成層とは異なる陸水成の堆積層である。層中の上位や下位に鉄分を含む赤褐色の帯が水平方向に見られ、この境界面で乾痕が見られるところがある。南トレンチ・上の調査区とも出土遺物はなく、本層以下が地山と考

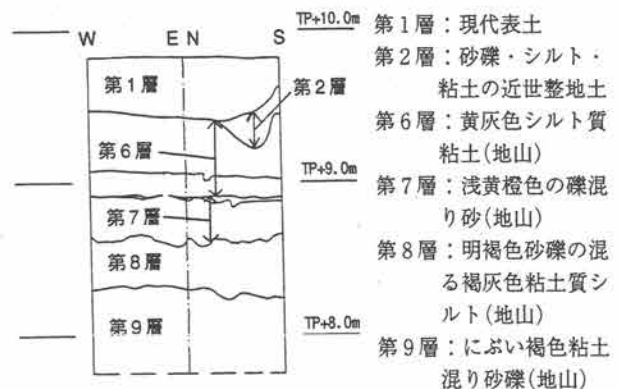


図5 上の調査区の層序模式図

えられる。本層上端の標高は、上の調査区で9.5m(図版1枚目上段の写真の中位にある境界面)、南トレンチで3.4m(図版1枚目中段の写真では下1/3の均質な粘土層の上面)である。北1トレンチでは標高1.2mまで、北2トレンチでは標高0.8mまで掘削したが、どちらも最下層が谷の埋土で、本層やこれより下位の層までは到達しなかった。

第7層：本層以下は上の調査区を深掘りして確認したものである。すべて海成層で、ほぼ水平に堆積している。本層は浅黄橙色の礫混り砂で、上面に粘土を含む赤褐色砂礫が堆積していた。本層上半にはサンドパイプが見られた。サンドパイプの径は2.0cm程度で粘土が入り込んでいた。

第8層：褐灰色粘土質シルトに明褐色砂礫の塊が無数に混る。

第9層：上記の2層に比べて均質な、にぶい褐色の粘土混り砂礫である。

2. 遺構と遺物

下の調査区は4個所のトレンチ調査のみで平面的調査は行っていない。断面で見る限り、遺構は見られなかった。

上の調査区では第6層の地山上面で、溝状の細長い掘込みと土壌を検出した(図6)。

溝は北東-南西方向のものが合計6条見つかった。いずれも谷の方向にほぼ一致する。一回の作業で掘った溝は幅が1.5m程度とみられ、位置をずらして溝を掘り直しているところがあり、溝幅が約2.5mと広がっていた。深さは検出面から0.1~0.5mとばらつきがあり、掘り直された溝が深くなっている。最終的にどの溝も暗黄褐色砂礫で一気に埋め戻されている。この砂礫は第7層が再堆積したものとみられる。これらの溝の性格や機能はよくわからない。出土遺物はほとんどが小破片で、18世紀後半~19世紀前半のものが多い。これに須恵器・土師器、古代や中世の瓦といった古い遺物が少し混じる。

土壌は平面が楕円形や不整形のもので、大きいものは長径が3.5m、短径が2.2m、深さが0.6mある。土壌の埋土は灰褐色砂礫混り粘土質シルトと橙色砂・粘土混りシルトの2種類があるが、出土遺物でみる限り土壌に時期差は認められず、上述の溝と同様にすべて18世紀後半~19世紀前半の遺構と

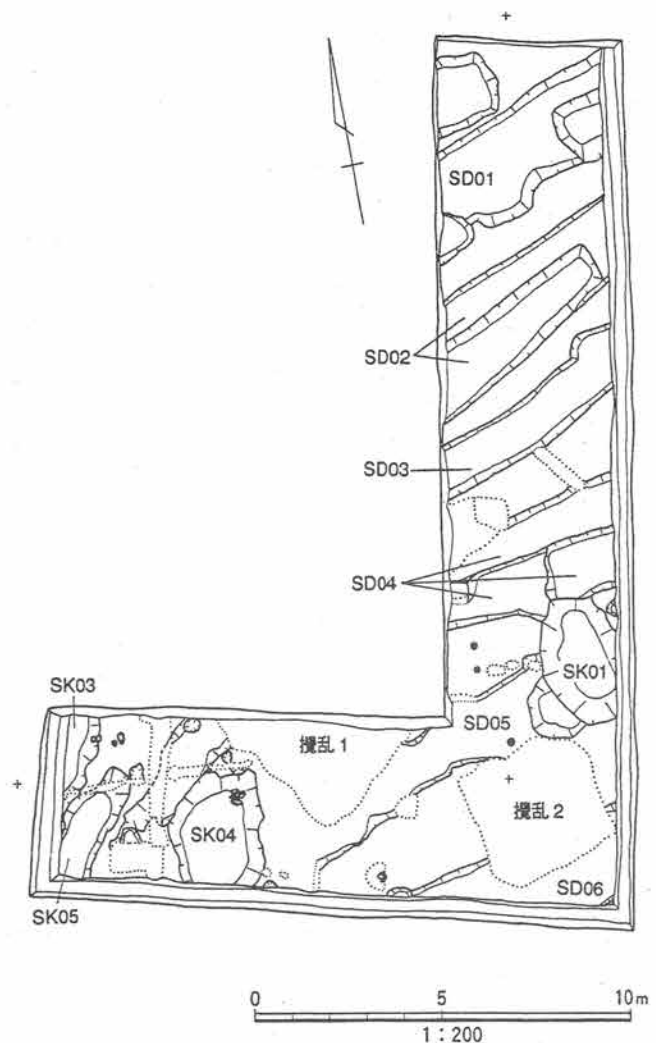


図6 地山上面の遺構

考えられる。

〈まとめ〉

本調査では古代・中世に遡る遺構は検出されなかったが、下の調査区の谷の埋土から中世の陶器片が出土したことや、近世の整地土や遺構から須恵器・土師器や古代～中世の瓦が出土したことから、本来は調査地およびその近辺に古い時代の遺跡があり、その遺物が再堆積したものと推定される。これは従来の調査結果や論考¹⁾等と同様である。

周辺調査についてみると、DS87-3・89-1次調査では本調査第7層に相当する砂礫が地山最上層であり、両調査地は尾根の高い位置にある。DS88-1次調査は現状で尾根からやや降った場所において、砂礫層の上に薄く本調査の第6層に似たシルト質粘土の地山が残っていた。地山最上層の上面の標高をみると、今回の調査も以前の調査も9～10mで、ほとんど差がない。

さらに、地山上面の遺構の埋土や地山を覆う地層は、いずれも本調査と同様に近世のものであり、近世の遺物に古い時代の遺物が混じる状況も、どの調査においても同じであった。

また、先にも述べたように、今回の調査ではシルト質粘土は上の調査区だけでなく、下の調査区の3.4mの高さでも見つかっている。

資料は多くないが、これらのことを考慮すると、シルト質粘土の地山は本来もう少し広い範囲に堆積していて、それが近世までの間に尾根の高いところほど大きく削平を受け、このとき古代や中世の遺構・遺物も大半が失われてしまったのではないかと考えられる。

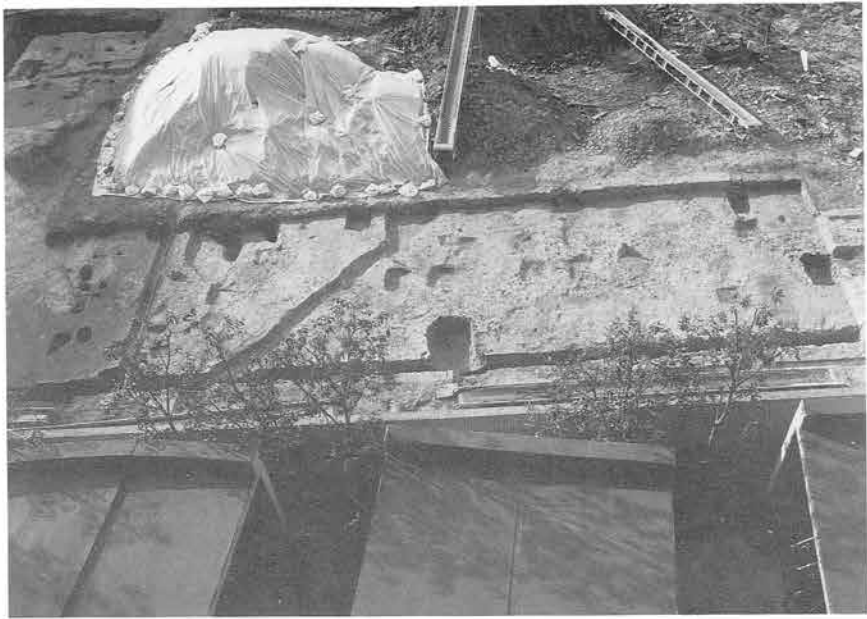
本調査地についていえば、古代にはすでに西側の大きな谷が形成されていて、ここが谷の落込み際になっていたであろうから、遺跡の範囲にここが含まれていたとしても、本調査地は遺跡の中心部ではなく、縁辺部と考えられる。

削平された土砂は、どこか遠くへ搬出されたというより、本調査地西側の深い谷を埋立てるのに利用された可能性が高いであろう。そうであるなら、谷部分の調査によって古代・中世の堂ヶ芝を復元する手がかりを得ることができるのではないかと考えられる。また、この谷の反対側の斜面には細工谷遺跡も位置している。したがって、この谷から得られる情報は重要であるといえよう。今後の調査成果に期待したい。

註

- 1) 代表的なものに、石田茂作1936「堂ヶ芝廃寺」：『飛鳥時代寺院址の研究』第一書房、pp.543-549がある。

上の調査区東半の遺構
(東から)



上の調査区南半の遺構
(西から)



上の調査区全景
(東から)



大道1丁目所在遺跡発掘調査(DA01-2)報告書

- ・調査箇所 大阪市天王寺区北河堀町64-6、8
- ・調査面積 約30㎡
- ・調査期間 平成14年2月25日～平成14年2月27日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 京嶋覚・積山洋

〈調査に至る経緯と経過〉

当該地は古代以来の大寺として著名な四天王寺の南約250mに位置し、その南門へ向かう参道沿いに位置する(図1)。標高約14.3mの調査地から南は東西方向の谷(底付近の現標高約9.5m)へ落ち込む斜面となっており、この谷は、8世紀末に和気清麻呂によって掘削された「河内川」のルートと推測されている。また調査地の南西に隣接して、庚申を祀ることで我が国最古とされる庚申堂が位置する。今般、標題の建設工事が予定されたため、平成14年2月12日、試掘調査(DA01-1)が実施された。その際、中世の遺構が見つかり、本調査を行うこととなったものである。

〈調査の結果〉

1. 層序

調査地では近現代の攪乱がひどく、近世以前の地層はまったく残っていなかった。北西部では地山である上町層が地表面直下(標高約14.2m)で検出されたのに対し、南および北東部では約1.3m下(標高約13.1m)まで近現代の整地層であった。

2. 遺構と遺物

今回の調査で見つかったのは中世の井戸である。これは敷地の北西で試掘の際に見つかったもので、直径0.6m以上、深さ0.8m以上の規模が知られた。この遺構は隣家の安全上の問題により、本調査の範囲から除外したが、遺物は若干出土している。図3の古墳～飛鳥時代の須恵器鉢・中世後期の土師器皿のほか、常滑焼、瓦質羽釜、離れ砂の付いた平瓦などの破片があり、中世後期のものとみられる。このほか、近現代の整地層から13～14世紀の土師器羽釜や近世初期の唐津焼碗などが出土している。

〈まとめ〉

今回の調査は事例の少ない四天王寺南方で貴重な資料を提供するものであった。大道1丁目所在遺跡はまだその実態がほとんど不明であるため、中世の遺構を確認したことと、小破片とはいえ古代から中世・近世に到る遺物が出土したことは、今後この地域の歴史を解明していく上で、貴重な資料となった。



图1 調査地位置図



图2 調査区位置図

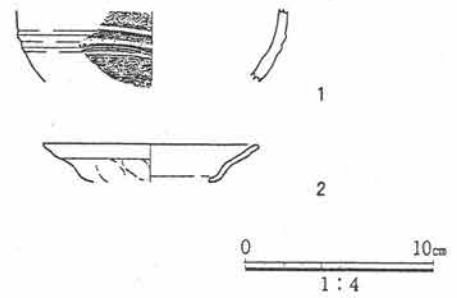


图3 遺物実測図



調査風景（機械掘削時）



調査区全景（南東から）

IV 浪 速 区

浪速元町遺跡B地点発掘調査(NK01-1)報告書

- ・調査箇所 大阪市浪速区湊町2丁目5-4
- ・調査面積 約50m²
- ・調査期間 平成13年6月18日～平成13年6月27日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 京嶋覚・松本啓子

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は現在のJR難波駅(OCAT)南にある中央広場の南東隅に位置している。もとはJR湊町駅の車両引き込み線のあった場所である(図1)。上町台地の西側斜面の裾の松屋町筋から西約1.5kmの地点に本調査地は位置し、さらに西約5km行くと現在の大阪湾がある。現地表で標高が約2mの比較的低い場所である。過去に南東約150mのところではNK96-1次調査が行われ、標高1.0～0mの高さで中世・近世の遺構と遺物が見つかった。

平成13年6月8日に行った試掘調査で、地表面から約3m下で瓦器や白磁など中世の遺物を包含する砂礫層が見られたため、関係諸機関との協議を経て本調査を行うことになった。



図1 調査地周辺地形図



図2 調査位置図

調査は試掘結果に基づき、中世の遺物が出土した地層(後述の第3層)近くまで重機で掘削し、以下を人力によって精査した。第3層以下は湧水が甚だしく、またこの層より上位の層も粘り気のない砂やシルトが主体であるので、壁面崩落の危険を回避しつつの調査であった。第5層になると湧水と壁面崩落がさらにひどくなり、面積も狭いことから、第5層の途中で人力による精査は断念し、かわりに重機で掘下げて遺物の採集と地層の情報の収集を行った。6月27日に埋め戻しを終え、現地調査を完了した。

なお、本調査では方位は磁北、標高はTP値を使用している。

また、層序の観察に際しては、大阪市文化財協会調査研究部小倉徹也、東大阪市文化財協会別所秀高両氏からご教示を得た。

〈調査の結果〉

今回の調査においては、第2層以上が人為的な整地層で、第3層以下は自然堆積層であった。そしてどの層にも遺構は見られなかった。以下に本調査で確認した層序と出土遺物を記す。

1. 層序

第0層：現代の盛土である。

第1層：砂やシルトを主体とする客土層で、遺物から近世の整地層と考えられる。

第2層：暗青灰色砂礫混り粘土質シルトで、第1層同様に近世の整地層と考えられる。

第3層：砂礫混りの灰褐色シルト質粘土で、上半にサンドパイプが見られた。13世紀末葉ごろまでの遺物が出土した。本層出土の遺物はいずれもほとんど磨耗していない。

第4層：暗灰黄砂礫混り粘土質シルトと黄灰色粘土混り砂礫の互層で、調査区南半に見られた。本層上面の標高は最も高い東側で-0.8m、低い西側で-0.9mである。下面は-1.0~-1.2mで、南西方向に下がりながら厚みを増して堆積している。かなり湧水する。出土遺物のうち、もっとも新しいものに13世紀末葉の瓦器碗の破片があり、これが本層の堆積時期の上限を示す。また、出土遺物はいずれもほとんど磨耗していない。

第5層：上面から0.5mほどが黄褐色砂質シルト混り砂礫、その下は灰色の砂・泥混り礫～砂

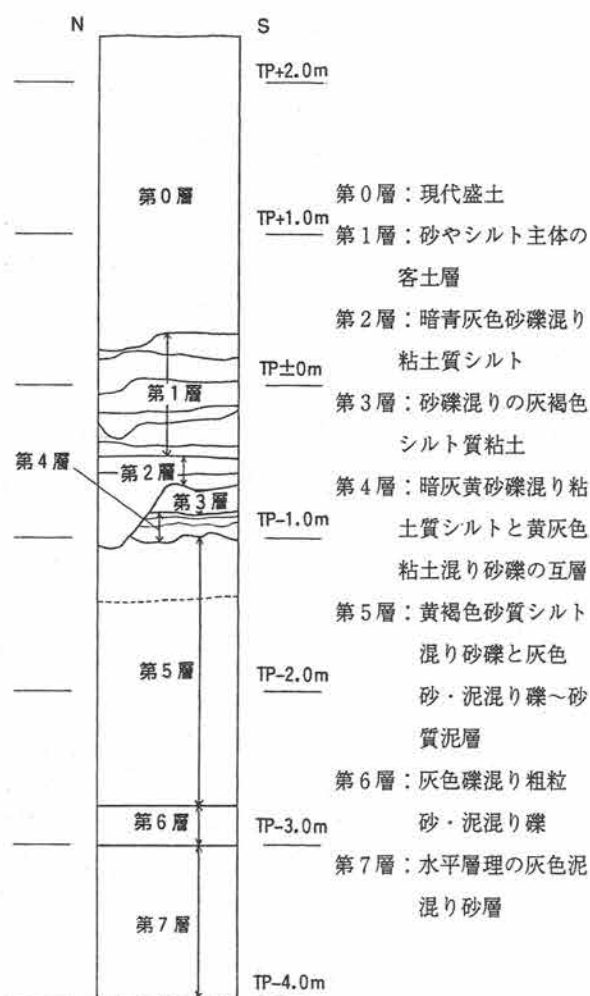


図3 層序模式図(東壁)

質泥層になる。湧水による壁面崩壊のため、本層の途中から重機掘削して遺物の採集を行った。このため正確な深さは記録できなかったが、黄褐色砂礫と灰色の砂・泥混り礫～砂質泥層の境界は標高-1.3mぐらいで、第6層との境界は標高-2.7mあたりにある。浜堤(列)¹⁾や堤間湿地などの環境が考えられる。遺物は下位になるほど少なくなる。12世紀代のものが多いが、図4-31のような13世紀後半～末葉ころの瓦器も第5層の下部で出土しているので、第3・4層同様に13世紀末葉が本層の堆積時期の上限と考えられる。また、遺物がほとんど磨耗していないことも上の2層と同様である。

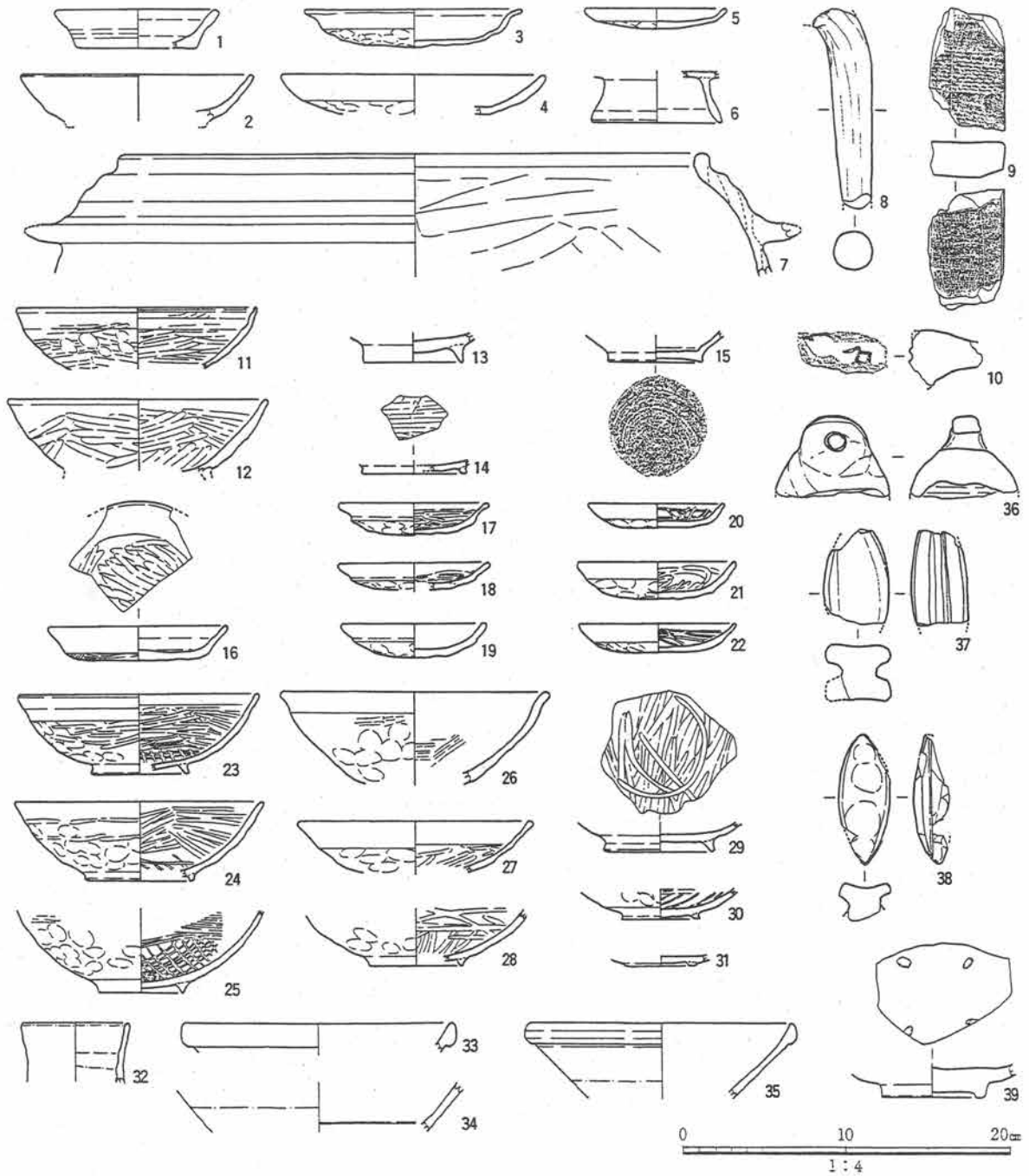


図4 出土遺物実測図

第5層(1~4・11~20・22~24・28~32・34・37・38)、第4層(5・6・8・10・26・39)、第3層(9・27)、第2層(7・21・25・33・36)、試掘(35)

第6層：標高-3mぐらいまでの厚さ0.3mほどの灰色礫混り粗粒砂・泥混り礫で、陸地側からの土砂の供給が盛んで泥分の堆積ができるような環境が考えられる。本層以下では遺物は出土していない。

第7層：標高-3～-4mぐらいまで見られた水平層理の灰色泥混り砂層で、下面の境界は未検出である。カガミガイが出土し、潮間帯下部～潮下帯に相当すると考えられる。

2. 出土遺物(図4)

1～6は土師器皿で、6は脚が付く11世紀後半ごろのものである。1～4が第5層、5・6が第4層から出土した。7は第2層出土の土師器の羽釜、8は第4層出土の三足の付く釜で、13世紀後半～末葉のものである。9は内面に布目、外面に縄タタキメが残る古代または中世の平瓦で、第3層から出土した。10は第4層から出土した軒平瓦で、瓦当面の左端に下半の欠けた「瓦」の文字がある。同様の文字瓦は四天王寺の軒平瓦が知られており、右から「四天王寺瓦」の5文字が配される。『四天王寺古瓦聚成』(四天王寺文化財管理局1996)によると、これら5文字の間に「長久年中(1040～1044)」(図5)や「治承四年(1180)」といった紀年のあるものがあり、11世紀中葉～12世紀後半に作られたことがわかる。同書によると、この文字瓦は播磨地方の製品で、10もその製品の可能性がある。11～13は内黒の黒色土器碗、14は両黒の黒色土器の高台部分で、すべて第5層から出土した。11世紀までのものである。15は播磨地方の須恵器杯で、第5層から出土した。底部外面に糸切り痕跡が残る。16～22は瓦器皿、23～31は瓦器碗である。ヘラミガキが密でていねいなものから粗雑なもの、あるいはしっかりとした作りの高台が付くものから簡素な低い高台を貼り付けたものまでである。これらは12世紀前半～13世紀末葉の間の遺物である。21・25が第2層、27が第3層、26が第4層から出土し、他はすべて第5層から出土した。32～35は中国製の白磁である。32は内面が無釉で、壺や瓶などの口縁部と考えられる。第5層から出土した。33～35は玉縁碗で、11～12世紀のものである。33が第2層、34が第5層の出土で、35は試掘時に出土した。36は第2層出土の須恵質のイイダコ壺で、37・38はともに第5層から出土した土師質の土錘である。39は青磁の大皿とみられる削出しの高台で、第4層から出土した。見込みには胎土目が4箇所に見られる。中国製品であろう。第2層からも同様の削出し高台の青磁がもう1点出土している。

〈まとめ〉

本調査の中世遺物包含層の状況をみると、ここは海や河川の影響を受けやすい場所で、本調査において第3層以下に遺構がなかったことも考え合わせると、ここに人が住んでいた可能性は薄いと考えられる。

また、遊離資料ながら中世の軒平瓦や瓦が出土したことは、瓦葺き建物の存在を想定させる。中世で瓦葺きといえば寺院や役所などが考えられるが、現在、本調査地付近でこういった遺跡の存在は知



図5 四天王寺の文字瓦拓影
(四天王寺文化財管理局1986より)

られていない。立地からみて、おそらく本調査地より東側にこういった中世の遺跡があったとみられ、上町台地の西側斜面の未知の遺跡を推定することができる。この遺跡の全貌は今後の調査にゆだねなければならないが、今回の調査で手がかりをひとつ提示できたといえよう。

引用・参考文献

四天王寺文化財管理局1986、『四天王寺古瓦聚成』、pp.106-107・157

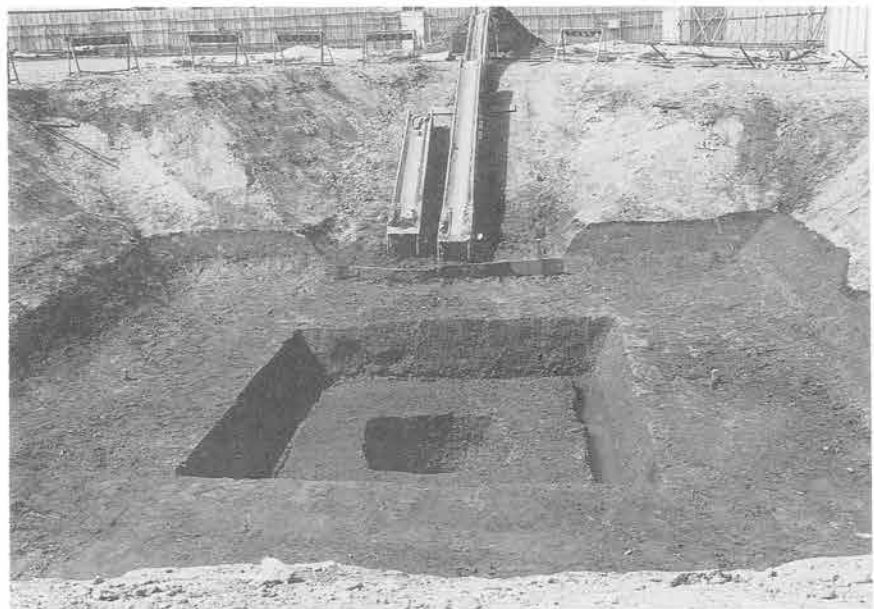
註

- 1) 浜堤とは大阪湾のような弓形の汀線をもった砂質の海岸で汀線に沿って堆積する低い砂の高まりを指し、この浜堤が連なる、いわば波板状の地形が浜堤列である。

調査地と周辺建物
(南から、中央奥の
建物がOCAT)



調査区全景
(南から)



北壁断面
(南から)



V 東 淀 川 区

崇禪寺遺跡発掘調査(S Z 01-4)報告書

- ・調査個所 大阪市東淀川区東中島4丁目817-4
- ・調査面積 60m²
- ・調査期間 平成14年12月3日～平成14年12月9日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 京嶋覚・南秀雄・趙哲済・櫻井久之

〈調査に至る経緯と経過〉

崇禪寺遺跡は、大阪市の北部、東淀川区東中島4・5丁目、淡路1丁目に所在する。遺跡の発見は1927年、今回の調査地の北側で行われた下水道工事の際に、中島惣社の宮司が弥生時代後期の大型壺形土器を採集したことによるとされる〔大阪府神社庁1981〕。遺跡周辺の現地表はTP+1.6～4.0mにあって、ほとんど目立った起伏は見られない。地表下1m前後に、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構のベースとなる水成砂層があり、これがつくる地形は梶山彦太郎・市原実両氏によって「長柄砂嘴・砂州」と呼ばれ、泉州海岸の沿岸州が発達したものと考えられている〔梶山・市原1986〕。

本格的な調査は、1981年、府営住宅の建設に伴って、大阪府教育委員会によって実施された。その調査では、弥生時代後期～古墳時代初頭の土器が多く出土し、また、鉄製素環頭大刀も出土した。その後、これまでにSZ88-2・4次調査、SZ89-6次調査など14件の本調査が当協会により行われている。それらの調査では、弥生時代後期～古墳時代初頭の土器や土錘のほか、5世紀代の埴輪・須恵器・土師器、中世の土器・陶磁器などが出土している〔大阪市文化財協会1999〕。

今回の調査地は、SZ89-6次調査地の西70mほどの位置にあたり、また、遺跡発見の契機となった地点に接している(図1)。当地において、大阪市住宅局による建設工事が計画されたため、工事に先立って2001年10月19日に、大阪市教育委員会により試掘調査が敷地内3箇所で行われた。その結果、東端の試掘堀において表土下に土壌状の窪みが確認され、土師器片が出土した。しかし、時期を確定しうるような資料は得られなかった。

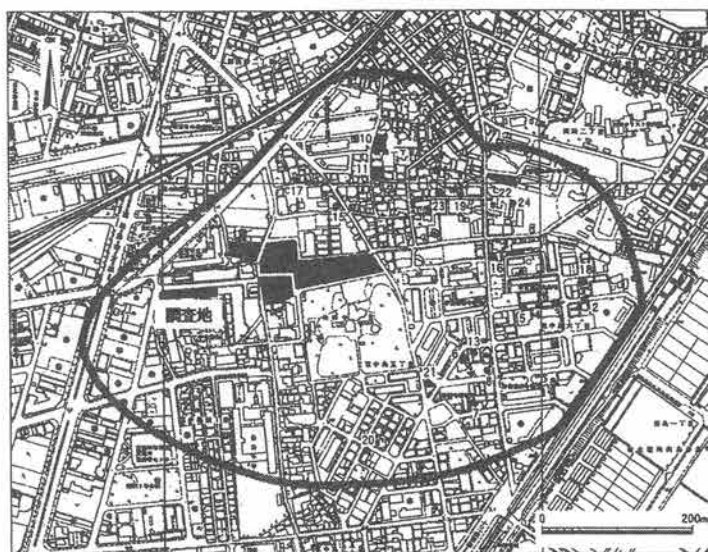


図1 調査地位置図

調査区は試掘時に土壌状の窪みの見つかった敷地東部寄りの場所とし、4 m×15mの大きさに設けることとなった(図2)。本調査は12月3日から着手し、重機による上掘りの後、遺構検出作業を行なったところ、溝や多数の土壌が存在し、その埋土中などに古墳時代初頭の土師器が散見されることがわかった。以後、これらの遺構の時期や性格を追及すべく、遺構の掘削、観察、記録作成を行った。調査は12月10日に埋戻しおよび撤収作業を行なって終了した。

調査で使用した水準はTP値、方位は磁北である。

〈調査の結果〉

1. 層序

現地表は、TP2.8~2.9mであり、深さ約1.8mまでの地層を上位から第1層~第4層に区分した(図3)。

第1層はオリブ褐色(2.5Y4/1)で小礫(fine pebble)を含むややシルト質の粗粒砂~細粒砂からなる現代の畠の作土層(調査地西部)、および現代整地層(調査地東部)で、層厚は15~30cmであった。

第2層は調査地中・東部に分布したにぶい黄褐色(2.5Y5/3)で小礫~細礫を含むややシルト質の粗粒砂~中粒砂からなる搬入土層で、層厚は20~30cmであった。レンガ片が出土した。

第3層は調査地西部に分布する上部の作土層と中・東部に分布する下部の土壌埋土層から成る。両者の層界は他の地層間の層界に比べてあまり明瞭ではない。

第3層上部の作土層はオリブ褐色(2.5Y4/3)のややシルト質の粗粒砂~細粒砂からなり、層厚は20~25cmであった。多数の土師器片のほか、近世の瓦片が出土した。

第3層下部の土壌埋土層は調査地の西端を除く広い範囲に分布し、小礫~細礫を含むややシルト質の極粗粒砂~粗粒砂からなつた。多数の古墳時代前期の庄内式・布留式土器片のほか、奈良~中世の土器片、瓦片が出土した。

第4層は観察した範囲で下部(層厚1m以上)が上方粗粒化する粗粒砂~中粒砂薄層と砂礫薄層の互層であり、個々の単層には級化構造が認められた。古流向は概ね東か

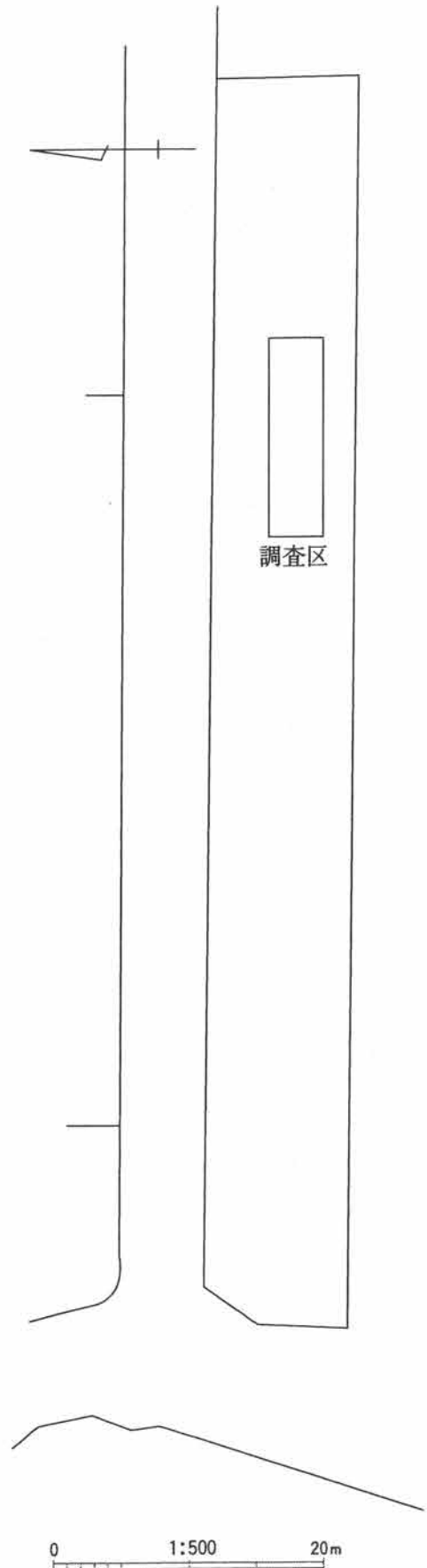


図2 調査区配置図

ら西へであった。中部（層厚0.3m）は弱く上方細粒化する粗粒砂層であり、葉理構造不明瞭であった。上部（層厚0.5m）は弱く上方細粒化する淘汰不良の礫混り粗粒砂層で、堆積構造は著しく乱れていた。遺物は見つからなかった。

2. 遺構と遺物

(1) 遺構

第4層の上面で土壌群と溝状遺構を検出した。土壌群は平面形が円やいびつな楕円の大小の穴が重なり合ったもので、平面観察で13基、断面観察を含めると20基以上が識別できた。穴の最大のもの長径2.4m、深さ0.8m、小さなものは長径0.7m、深さ0.1mであった。最も深かったのは7個以上の穴が重なり合ったもので、1.3mの深さがあった。ひとつの穴の底には木の根が半ば朽ちた状態で見つかった。溝状遺構は幅0.3~0.4m、深さは数cmであり、調査地西部で2条を検出した（図4）。

調査地の南側には中島惣社があるが、住民に聞き取り調査を行ったところ、昭和の中頃は調査地は中島惣社の境内にあり、調査地の西側に鳥居があったと言う。明治後半に作成されたという版画「大阪府西成郡西中島村大字山口中島惣社境内図」には境内に広がる松林と西北の鳥居が描かれており、調査地は当時の境内に広がっていた松林の中にあたとみられる。また、『東淀川区史』〔東淀川区史編集委員会1956〕には、出典は明記されていないが「老松鬱蒼と繁茂し明治初年まで東西八十間南北二百四十間坪数一万九千二百坪の除地であったが、明治2年（1869年）3月この地に攝津県（のち豊崎県）がおかれるに当たり、松樹を伐採して大いに風致を損

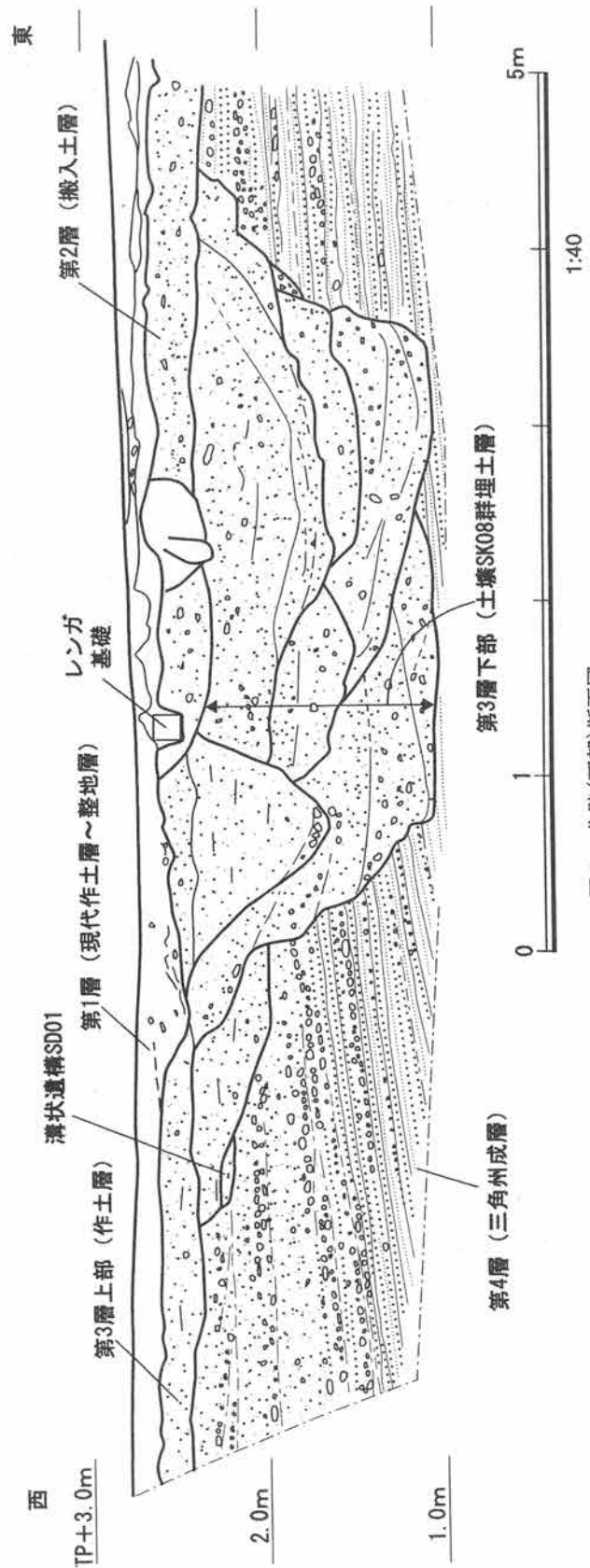


図3 北壁(西部)断面図

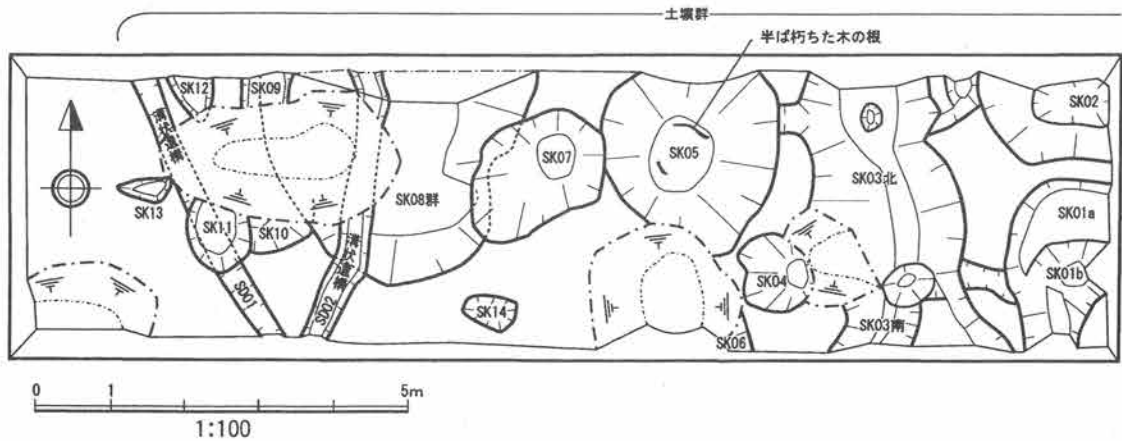


図4 遺構平面図

し、…」の記事があり、松林が伐採されたことが伺える。

以上の状況から、第3層下部を構成する土壌群は中島惣社境内にあった松林の松を掘り起こした跡ではないかと考えられる。出土遺物の年代から中世以降の行為と推定され、古文書の記述からは近世以降の行為であった可能性が高い。何回かの掘り返しがあったと考えられる。掘り返しの最後の時期には、第3層上部が構成する畠をつくることを目的としたのかもしれない。

(2) 遺物

表土掘削や遺構検出などの作業中に、庄内～布留式期の土器が多く出土した。その状況は検出された溝や土壌などの遺構を掘削しても同様で、この時期の遺物が大半を占める。しかし、極少量ではあるものの古代・中世の遺物も確認される。SD01から中世の土師器小皿、SK05から丸瓦、須恵器甕の体部、内面に放射状暗文を有する土師器皿、SK08から黒色土器碗や瓦器碗などが出土している。

以下、遺物図版に抽出した資料について述べる。1～8は庄内～布留式期の遺物である。1は頸部にキザミメのある突帯を巡らす壺の破片である。2・3はともに畿内第V様式の系譜を引くもので、それぞれ広口壺口縁部、甕肩部である。4・5は庄内式甕の口縁部および体部で、ともに胎土中に角閃石を含み、灰褐色をしている。6・7はともに布留式に属するもので、前者は甕口縁部、後者は小型精製土器の鉢である。8は管状土錘で、直径約3 cmある。同様の土錘の完形品が表土掘削中にも出土している。

9～14は古代・中世の土器である。9は土師器鍋などの把手部分、10は内面に放射状暗文をもつ土師器皿で、ともにあまり磨滅してはいない。11・12は須恵器で、前者は壺肩部、後者は甕体部である。以上については8世紀代のものであろう。13は土師器小皿、14は土師器の皿あるいは鉢などの脚台部である。ともに精製された胎土で、中世の土器であろうと思われる。

3. 第4層の形成について

崇禅寺遺跡の基盤を成す第4層の下部から中部・上部への層相変化は、本地域が水域から陸域への変化を示すものと推察される。すなわち、下部の上方細粒化は三角州の発達に伴う堆積場が相対的に沖から河口へ移動したことを示すものであり、粗粒砂～中粒砂薄層と砂礫薄層の互層は三角州前縁のフォアセット層理とみられる。中部から上部では離水と冠水を繰り返したとみられ、中部の堆積構

造の不明瞭さは離水時の擾乱によるものと考えられる。また、上部の堆積構造の著しい乱れは、離水後の生物擾乱によるものと考えられ、風成2次堆積による堆積物の供給もあったと思われる。東から西への古流向は淀川三角州の発達方向と一致する。

ところで、崇禪寺遺跡は上町台地に沿って北へ成長した長柄砂州（天満砂堆）に成立したとする梶山ほか（1986）の考えが、多くの研究者に支持されてきた。しかし、第4層の堆積場が淀川三角州であったとする今回の調査結果は、長柄砂州説とは一致しないことになる。

〈まとめ〉

本調査では、予想どおり古墳時代前期の遺物が多数出土した。遺物量が多いことから、調査地には古墳時代前期の生活跡（遺構）があったと推定されるが、残存していなかった。その原因は、江戸時代以降（～昭和？）に畠をつくるために松林が掘り返され、遺構が残されていた第4層上面が著しく壊された結果によると考えることができる。試掘調査時に調査地の東側では遺構が見つからなかったが、第4層が浅い深度に分布するので、広く掘れば弥生～古墳時代の遺構が見つかった可能性がある。

第4層の堆積場は、淀川三角州の発達に伴って三角州前縁から離水し、安定した三角州面に移り変わったと推定される。この推定に基づけば、崇禪寺遺跡が長柄砂州に成立したとする従来の説は、再検討が必要になる。

引用・参考文献

大阪市文化財協会1999、『崇禪寺遺跡発掘調査報告』Ⅰ

大阪府神社庁1981、『大阪府神社文化財図録』

梶山彦太郎・市原実1986、『大阪平野のおいたち』青木書店

東淀川区史編集委員会1956、『東淀川区史』



遺構掘削前(上左)掘削後(上右)
(西から)



遺構検出状況
穴の底に木の根が残る
(南から)



北壁地層断面(西部)

東淀川区小松4丁目における 遺跡分布確認調査(KO01-1)報告書

- ・調査箇所 大阪市東淀川区4丁目14番
- ・調査面積 25m²
- ・調査期間 平成14年3月7日～平成14年3月8日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 京嶋覚・趙哲済

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は淀川の分流路である神崎川の南側にあり、南東約500mには、中世の三宝寺伝承地がある(図1)。建設省国土地理院(1963)の土地条件調査報告書(大阪地区)によれば、淀川低地と大阪海岸低地とに挟まれた吹田砂堆に位置するが、調査地から三宝寺伝承地一帯は日本書紀安閑天皇二年九月一三日条にみえる大隈島であると伝えられる。神崎川は古代～中世には三国川と呼ばれ、785年に淀川の分流路として掘削されたと言われる(続日本紀延暦四年正月一四日条)。当時は現在の南江口から別府への北進流路であったが、明治中期に現在の西進する新流路が開削されている。また、調

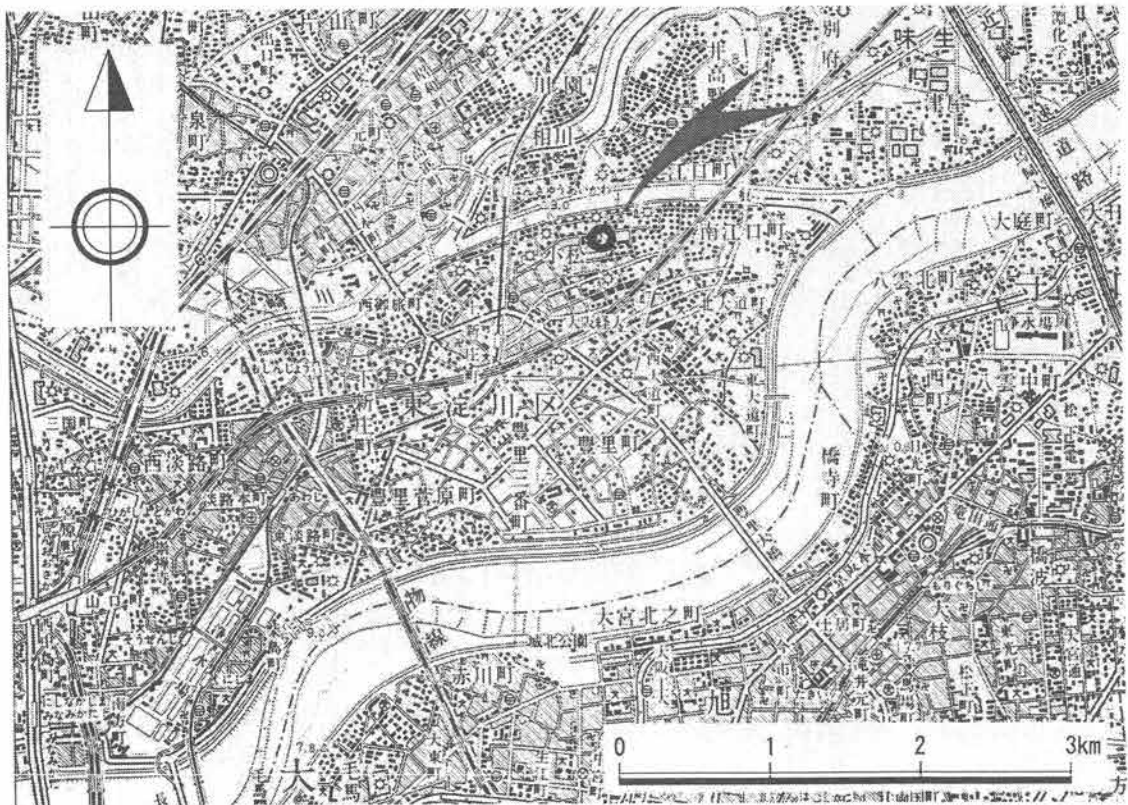


図1 調査地位置図(国土地理院発行5万分の1地形図に加筆)

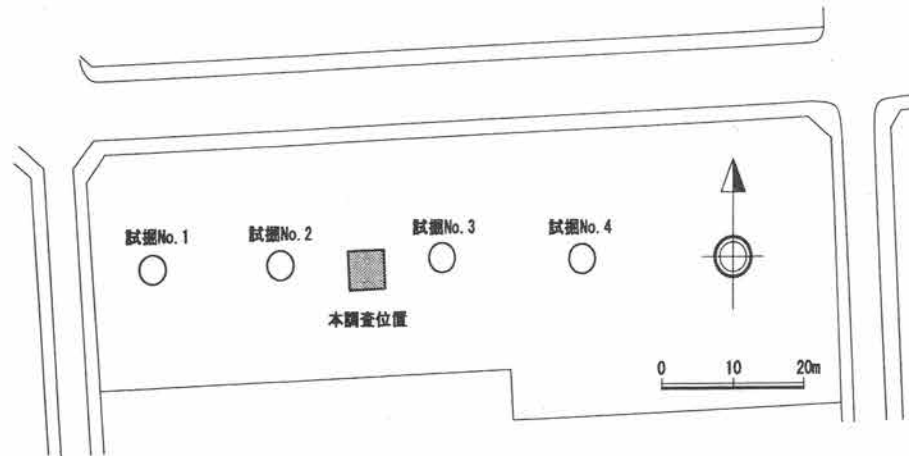


図2 調査トレンチの位置

査地の南に位置する小松神社は、菅原道真が延喜元年（901）太宰府へ左遷された時に当地に立ち寄り、数千株の小松をみて感動、「小松の詩」を吟じたことから、後に村人が道真公を偲んで社を建立し、小松の天満宮と称したと伝えられている。このように、文献史的には本地域は古代以来、人びとの営みが永続した土地であったことが伺える。

本調査に先立って行われた大規模開発に伴う試掘調査（01-121調査）では、地表下0.6～1.2mに18世紀～19世紀前半（江戸時代後期）の遺物を包含する畠作土層（第2層）があり、その下位には江戸時代後期以前の水田と推定される作土層（第3b層）が分布した。さらにその下位に分布した時代未詳の河川の氾濫堆積層（第4層）は、大隈島や小松神社の伝承から察するに、古代に遡る可能性があった。また、古代以前に遡る可能性がある三宝寺伝承地のいわゆる地山層とも対比される可能性があった。しかし、地層の重なり状況からは、第4層もさほど古い時代の堆積層とは考えられず、弥生時代や古代の遺構は、第4層を堆積した河川の氾濫によって削られたか、第4層の下位に埋もれているとも考えられた。

そこで、第3層以下の地層を詳細に観察し、当地域で人間が活動できる条件がいつごろ成立したか、また、第4層の中あるいは下位により古い時代の遺物包含層があるのかどうかを確かめることを目的として、本調査を実施した。

〈調査の結果〉

1. 層序

工場跡地である調査地はほぼ平坦に整地されており、北面道路より約0.3m高く、標高は約4.6mであった（図2）。層厚40～70cmの現代盛土層の下位を、第1層から第4層まで区分した。試掘調査結果も踏まえて上位層から順に述べる（図3）。

第1層は暗褐色のシルト質中～粗粒砂からなる畠作土層で、層厚は20cm前後であった。瓦・土師器・炭片等が混じっていた。

第2層は暗黄灰色のややシルト質中～粗粒砂からなる作土層で、層厚は20cm前後であった。瓦・土師質皿・陶磁器・土人形・火打石・鉄釘・炭片が混じっていた。

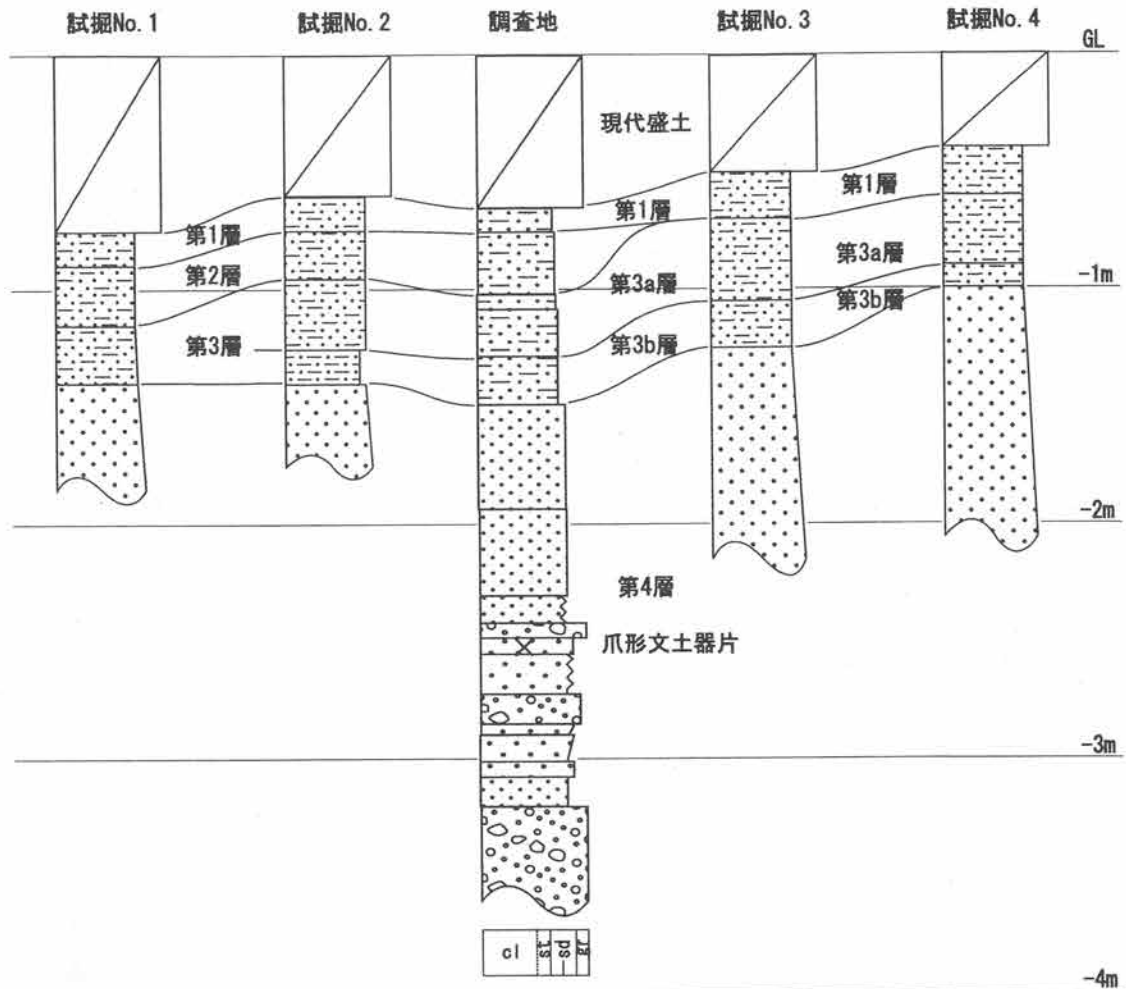


図3 調査トレンチの位置

第3層はにぶい黄灰色のややシルト質中～粗粒砂からなる人為層であった(試掘No.1)。3a層はにぶい灰黄色～灰褐色のややシルト質中～粗粒砂からなる作土～盛土層(試掘No.2～3)で、下位の3b層は灰色～にぶい灰色のシルト質中粒砂からなる水田作土～人為層であった。遺物は出土しなかった。

第4層は灰色の極粗粒砂～中粒砂からなる河成層であり、層厚は2.2m以上で、下限は不明であった。全体として上方細粒化を示し、ほぼ北から南へ傾くプラナー型斜交層理が顕著であった。地表下2.4m付近にはアンチデューンが認められ、それより下位にある3層準の粗粒砂～砂礫層で逆級化構造が認められた。

2. 遺構と遺物(図4)

第2層の遺物は主として畝の畝間堆積物から出土したものであり、18世紀～19世紀前半(江戸時代後期)の年代が推定される。第3層の出土遺物はなかったが、上位層との層序関係から第2層とはさほど大きな時間差は無いと考えられる。本調査地では作土層(第3b層)の上面で畔状の高まりを、また試掘No.2ではこの作土層の基底面に幅60cm以上、深さ15cm程度の溝を検出した。

第4層から縄文時代前期に比定される爪形文土器の小片が出土した。深鉢の口縁から体部に移るく

びれ部の破片でありから、器壁が3mmと薄い。表面には斜位の爪型紋が幅7mm程度でかつ密に施されている（図4）。

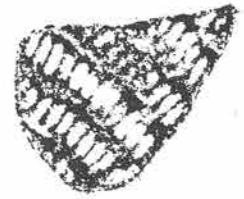


図4 爪形文土器

〈まとめ〉

今回の調査では主として第4層を観察した。観察された範囲で第4層は、下部に逆級化構造やアンチデューンがあり、河川の氾濫時の堆積層と見られる。逆級化構造は洪水時の水位上昇時に形成される堆積構造である。また、アンチデューンは流速が速く、極めて浅い流状が推定される。プラナー型斜交葉理から推定される古流向が、北から南であるのは、現在の淀川とは流下方向が異なるが、過去の淀川やその分流路の河道移動を示すものであろう。

第4層の堆積時期の詳細は明らかにならなかったが、文献史的には10世紀以降は人間活動が可能な干陸の環境であったと考えられ、第3層との累重状況からみた第4層の堆積は、古代の初めか、それよりさほど古くない時期と推定される。したがって、調査地周辺には古代や中世の遺構が分布する可能性がある。

調査地遠景
(南東から)



最終掘削状況
(南から)



第4層に見られた
アンチデューン
(流れは右から左へ)



VI 旭 区

森小路遺跡発掘調査(MS01-4)報告書

- ・調査箇所 大阪市旭区新森7丁目122-1の一部
- ・調査面積 15m²
- ・調査期間 平成13年4月16日～平成13年4月24日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 京嶋覚・黒田慶一

〈調査に至る経緯と経過〉

森小路遺跡は大阪市北東部に位置し、淀川の営力によって河内潟に半島状に突き出すように形成された自然堤防上に立地する弥生時代中期の集落遺跡で、現在、旭区新森中央公園の北東隅を中心とした直径約800mのほぼ円形がその範囲とされている。ただ、今回の調査地の位置する遺跡の東端、すなわち主要地方道大阪内環状線の東側では、過去、本調査を行ったのはMS89-50次地点だけで、遺跡東部の様相は不明であった。

平成13年4月10日、工事予定地の南側で試掘調査(MS01-2次)を行ったところ、弥生時代中期の土器と古墳時代の須恵器が出土したことから、本調査を実施することとなった。なお、調査で使用した水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中では「TP+〇m」と示した。



図1 調査地位置図

〈調査の結果〉

1. 層序

現地表面は道路面より30cmほど低い。重機掘削では厚さ約30cmの現代作土を除去した。調査の対象となったそれ以下の地層について記述する。

第1層：層厚約10cmの粘土混り暗褐色（10YR3/3）シルト層である。江戸時代の遺物を含む。

第2層：層厚25～35cmの粗粒砂混り黒褐色（10YR3/2）粘土質シルト層で、弥生土器の壺29・30、鉢32、甕39、高杯46・47、石剣と思われる尖頭器の破片53、刃器54、それに須恵器の杯蓋57、高杯58・60、壺59、土師器杯61が出土した。弥生時代中期後葉の土器と古墳時代中期後葉、それに飛鳥時代の土器を含むことを特長とする。

第3層：層厚10～15cmの粘土を含む黒褐色（10YR3/2）細粒砂層で、弥生土器の壺23～26、把手31、鉢33～36・44・45、甕40、土器底部41・42、高杯48・49、凸基無茎式石鏃51、凸基有茎式石鏃52、すり石55が見つかった。土器は弥生時代中期中葉～後葉のものが多い。

第4層：調査区南東部に分布する。炭・粗粒砂混りの黒褐色（10YR3/1）粘土質シルト層、にぶい黄褐色（10YR4/3）細粒砂層、黒色（7.5YR1.7/1）炭層の互層からなり、層厚5～15cmを測る。SK501は本層で埋没する。弥生土器は、SK501に伴う壺17・18、甕19のほか、甕37、壺38が出土した。弥生時代中期前葉～中葉のものが多い。本層上面で図3下のようなピット群が見つかった。

第5a層：層厚2cmの炭を多く含む暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）粘土質シルトの薄層と層厚3～7cmの黒褐色（10YR2/2）粗粒砂が互層となった水成層で、層厚は10～15cmである。高杯10、壺11～16・22・43、甕20、緑色片岩製石庖丁50を含む。弥生中期中葉～中葉の遺物である。

第5b層：層厚5～10cmの、炭と粘土を含む黒褐色（10YR3/3）粗粒砂と暗オリーブ褐色（2.5Y

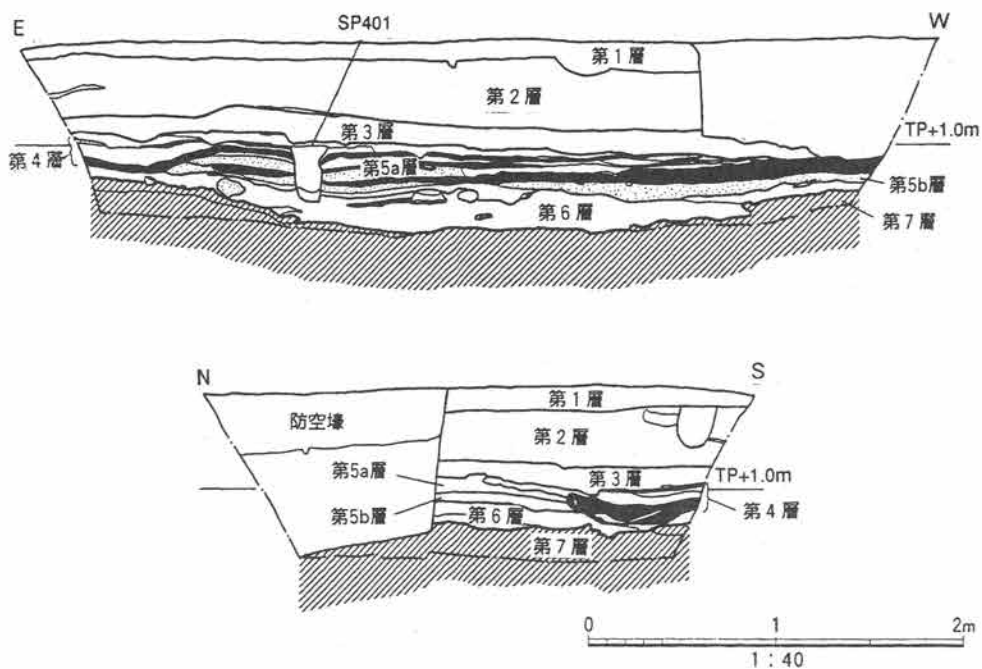
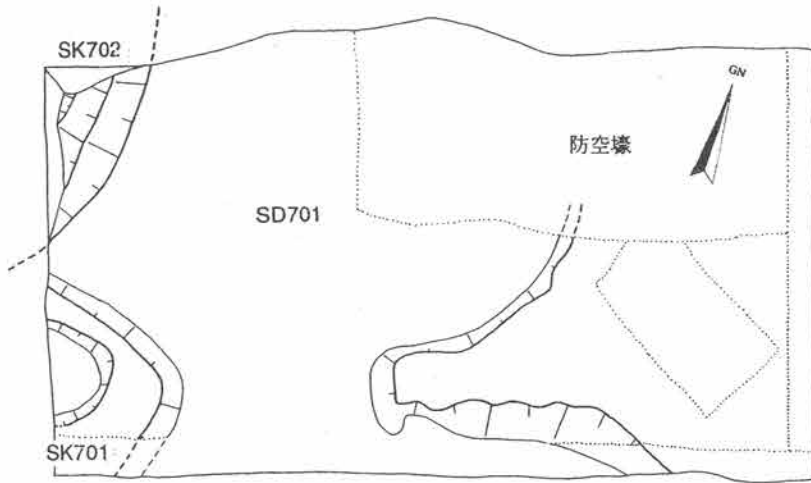
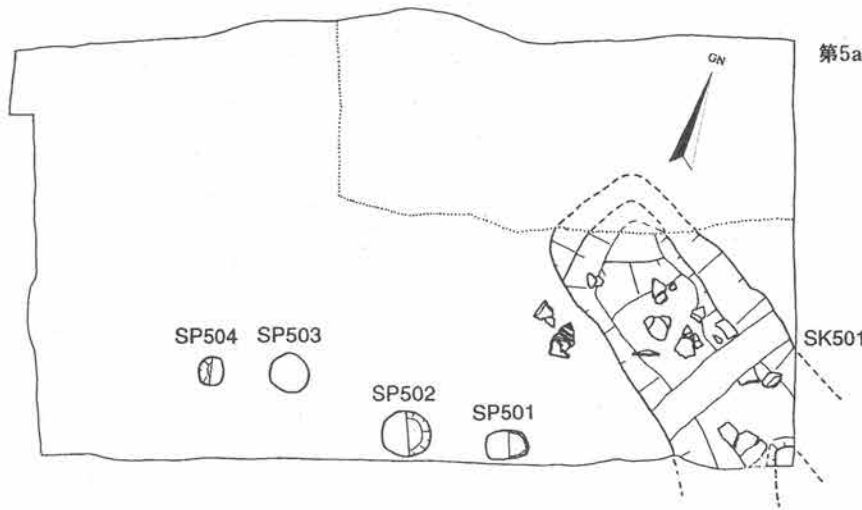


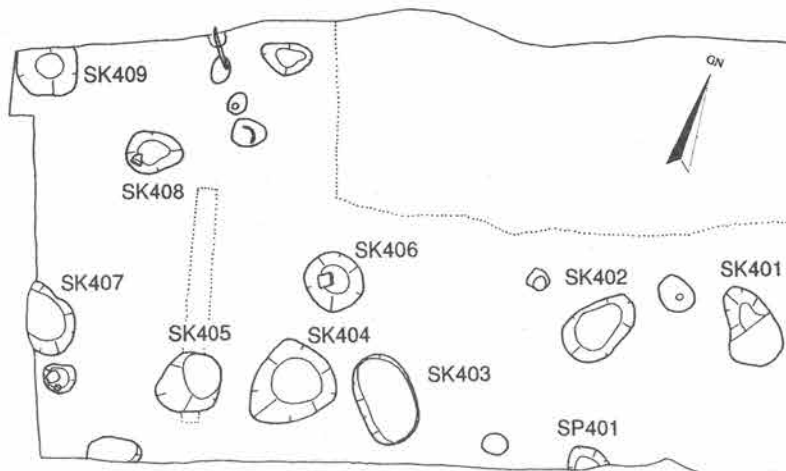
図2 南壁・東壁断面図



第7層(地L)上面検出遺構



第5a層上面検出遺構



第4層上面検出遺構(第4層の分布しないところは第5a層上面)

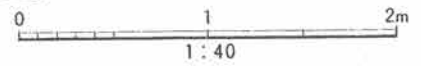


図3 平面図

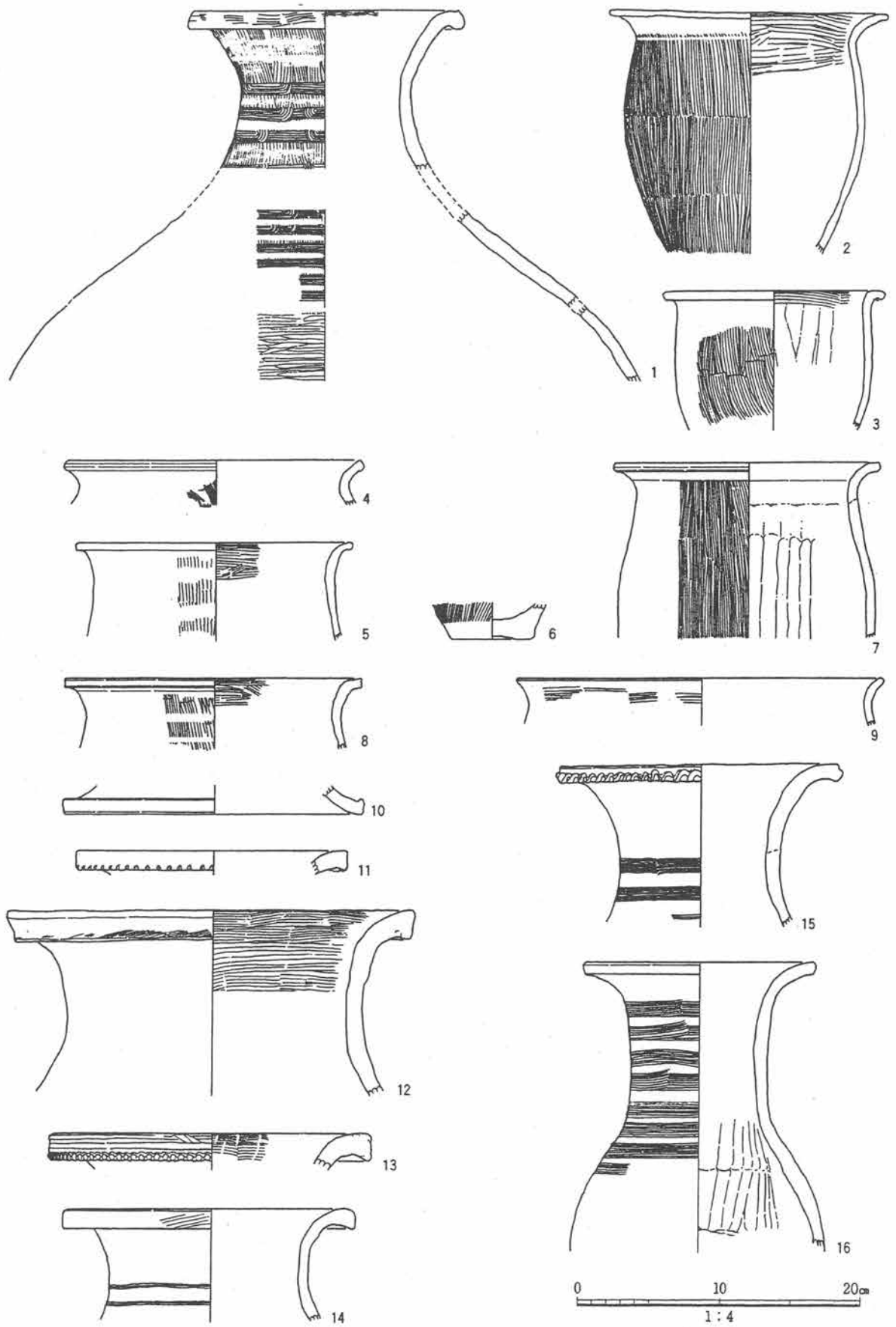


图4 弥生土器实测图 (1)

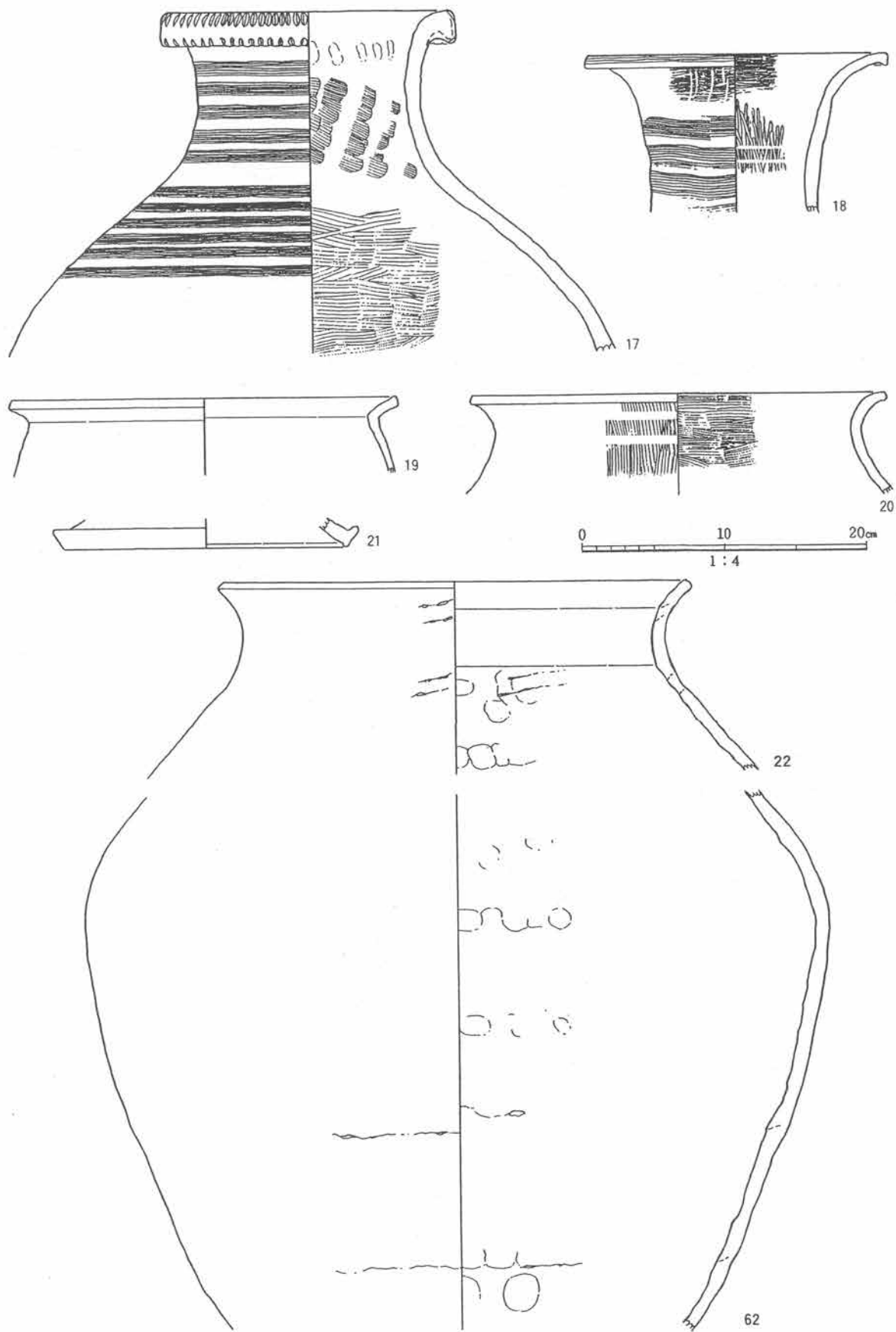


图5 弥生土器实测图 (2)

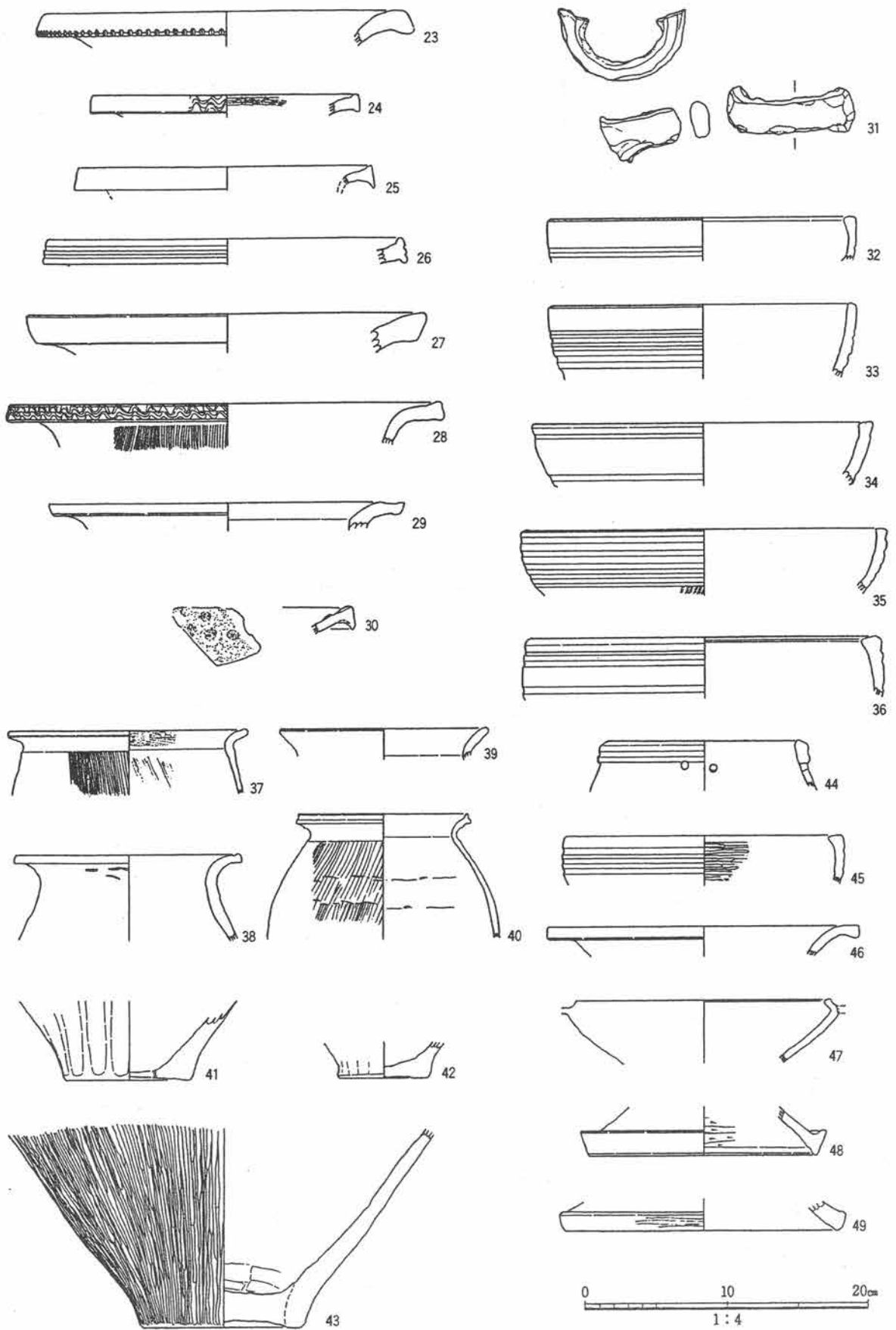


图6 弥生土器实测图 (3)

3/3) 粗粒砂からなる層で、弥生時代の壺1、甕3・8・9、土器底部6が出土した。やはり弥生中期前葉～中葉の遺物と思われる。

第6層：調査区南部と溝・土壌内埋土として分布する、層厚5～20cmの黒褐色（2.5Y3/1）～黒色（5Y2/1）粘土質細粒砂～シルトの水成層である。SD701の遺物として弥生時代の甕4・5が、SK702の遺物としては甕2があり、そのほか甕7、砥石56が見つかった。弥生時代中期前葉の遺物と考えられる。

第7層：黒褐色（2.5Y3/2）を呈する地山層で、上部10～20cmは粘土質シルト層で、それ以下は細粒砂層である。

2. 遺構と遺物

第7・5a・4層上面で遺構を検出した。出土遺物からみて、それらはすべて弥生時代の遺構である。

弥生時代の遺構と遺物（図3～7）

第7層上面検出遺構

SK701：直径0.6m、深さ0.2mの浅い土壌で、第6層を埋土とする。

SK702：長さ2.5m、深さ0.4m以上のテラスを形成しながらなだらかに落ちていく土壌で、水成層である第6層を埋土とする。体部外面と口縁部内面をていねいにハケメ調整した甕2が出土した。弥

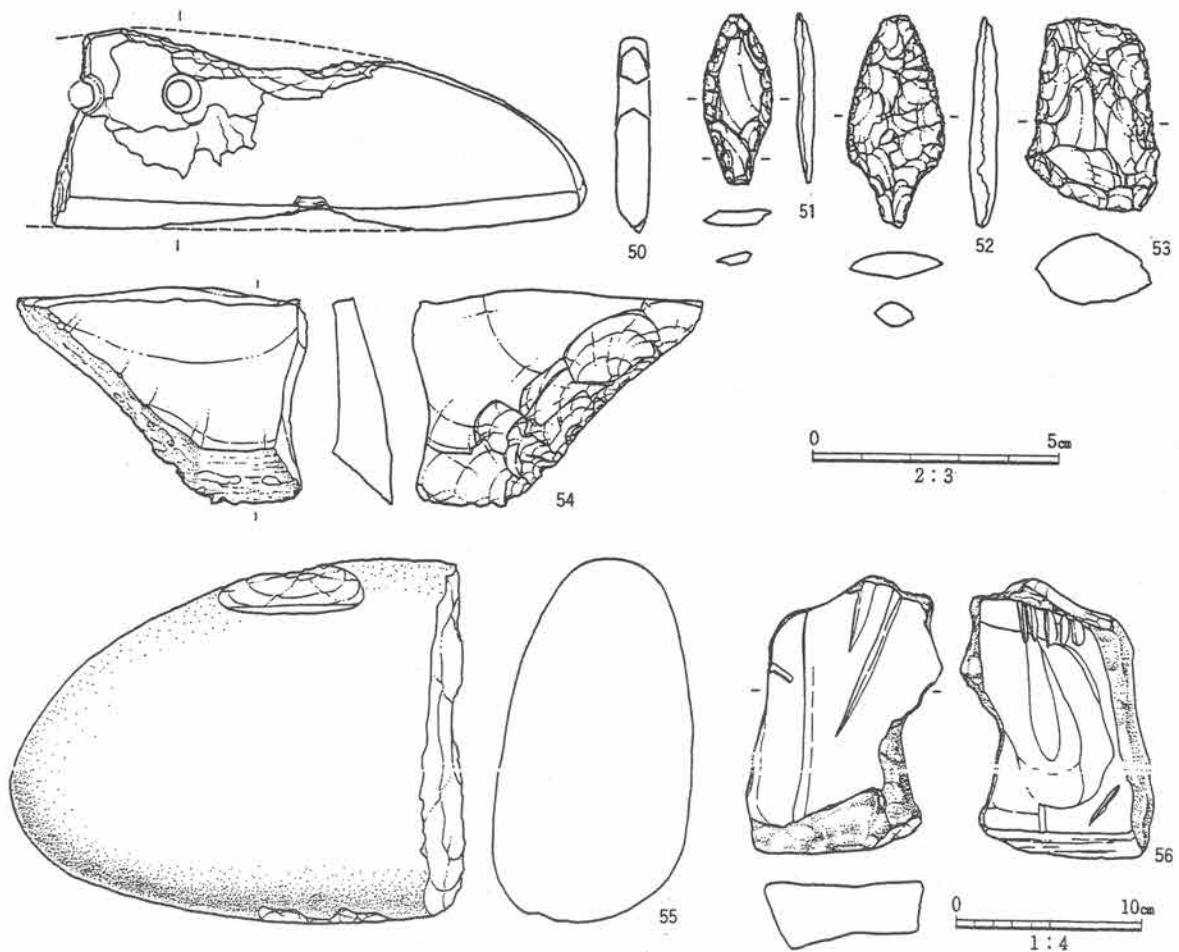


図7 石器実測図

生時代中期前葉の遺構と考えられる。

SD701：幅1.2～2.9m、長さ6.0m以上、深さ0.2mの平面が不定形の浅い溝で、やはり第6層を埋土とする。ハケメ調整をもつ甕4・5が見つかった。弥生時代中期前葉の遺構と思われる。

第5a層上面検出遺構

SK501：幅0.7～0.9m、長さ1.8m以上、深さ0.2m以上の平面が長方形を呈し、東で南にやや振る東西方向の土壌で、調査区南東隅で底面の中央部が高

くなり、土壌の幅も東で広がっていくことから、東に二股に分れるものと思われる。第4層を埋土とし、弥生土器の口縁部にキザミメ、体部に櫛描き直線文をもつ壺17、口縁部・体部とも櫛描き直線文をもつ壺18、「く」の字形に頸部が折れる甕19が出土した。弥生時代中期中葉の遺構と考えられる。

SP501～504：直径0.15～0.25mの平面形がほぼ円形を呈し、深さ0.1mのピットである。SP503・504は第4層上面検出のSK404・405と位置が重複することから、それらと同一の遺構であった可能性は残る。

第4層上面検出遺構

SK401～409：直径が0.2～0.5mの円形もしくは楕円形で、深さが0.1～0.2mの土壌で柱穴の可能性はある。SK408から高杯21が見つかった。弥生時代中期後葉の遺構と考えられる。

SP401：第4層の中途から掘込まれた直径0.2m、深さ0.3mのピットである。第4層は炭を含む粘土質シルトと粗粒砂の薄層の互層であるから、上述の遺構すべてが同一の薄層からの掘込みとは断定できない。

その他

このほかの弥生時代の遺物として、防空壕の底から出土した壺27・28がある。

〈まとめ〉

森小路遺跡の弥生時代集落の中心は、当調査地西方約400mの新森公園北方を中心とする東西方向の自然堤防上、南北約300m、東西約500mの範囲と考えられてきた〔大阪市文化財協会2001〕が、今回の調査で内環状線を越えて、さらに東側に広がる可能性が出てきた。またこの地で、弥生時代中期を通じた各期の遺物が確認できたことも大きな成果である。MS89-50次地点でも、弥生時代中期後葉の遺構・遺物と古墳時代中期後葉の遺物が検出されているから、当調査地を含めた遺構の広がりが注意される。

内環状線東方の調査を重ねることによって、森小路遺跡の実態が明確になるものと思われる。

〈参考文献〉

大阪市文化財協会2001、『森小路遺跡発掘調査報告』I

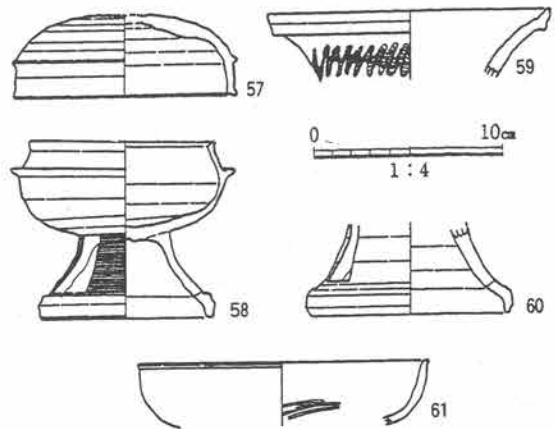


図8 第2層出土土器実測図

第5 a層上面検出状況
(西から)



土壌SK501
(南から)



南壁地層断面



VII 城 東 区

榎並城跡伝承地発掘調査(E N01-5)報告書

- ・調査箇所 大阪市城東区野江3丁目148-2-154、157の一部
- ・調査面積 約43m²
- ・調査期間 平成14年3月22日～平成14年3月27日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 京嶋覚・李陽浩

〈調査に至る経緯と経過〉

本調査地は地下鉄野江内代駅の東南約150mに位置する(図1)。榎並城跡伝承地は中世榎並荘に築かれた榎並城跡と推定されており、その中心地は本調査地の北東約80mに位置する野江水神社(野江神社)付近にあると考えられている。周辺ではこれまでに顕著な遺構は確認されていなかったが、今回、表題の建設工事に先立って平成14年3月19日に試掘調査を行ったところ、地表下約1.5m付近において中世の遺物を伴う遺構を確認したため、発掘調査を行うこととなった。

本調査は平成14年3月22日から開始した。試掘調査を行った敷地南部に調査区を設定し(図2)、現地地表下約2mまでを重機により掘削した。そして主に断面観察による調査と、一部平面調査を実施し、写真撮影・実測などの記録作業を行った。3月27日には発掘調査に関する作業および埋め戻しを含むすべての作業を終了した。なお、本報告で使用した方位は磁北で、水準値はT.P.値である。

〈調査の結果〉

1. 層序

本調査区における層序は以下のとおりである。なお今回行った調査は断面観察を主体としているため、各層から出土した遺物の量は十分なものとは言い難い。



図1 調査地位置図

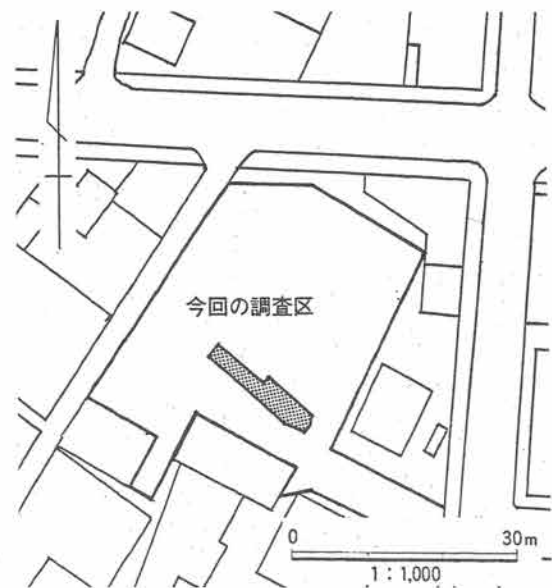


図2 調査区配置図

よって各地層における年代の記述はひとつの指標としてあることをはじめに断っておく。

第0層：近・現代層である。アスファルト舗装部分と近・現代の攪乱層が含まれる。層厚は全体で約0.4mである。

第1層：オリーブ黒色の少量の細粒砂混りシルト層で、炭・偽礫を含む。調査区東部で部分的に上下二層に分かれる作土層である。層厚は0.4～0.5mである。層中からは備前焼播鉢・常滑焼・土師器皿・瓦などが出土した。

第2層：大きく上下(A・B)に二分される。2A層は灰色の細粒砂混りシルト層で、炭・偽礫を含む作土層である。層厚は0.10～0.15mである。層中からは備前焼播鉢(図5-3・4)・瓦質羽釜(図5-1)・土師質羽釜・湊焼甕・常滑焼・土師器皿(図5-7)・瓦などが出土した。2B層は黒褐色の中粒砂～細粒砂を含むシルト層で、炭・偽礫を含む作土層である。層厚は0.20～0.25mである。層中からは土師質羽釜(図5-2)・瓦質羽釜・常滑焼・瀬戸焼・中国製白磁・土師器皿・瓦などが出土した。第1・2層は一連の作土層における耕作時期などの違いと考えられる。両層中から出土した遺物はともに16世紀頃の様相を呈する。

第3層：暗オリーブ～オリーブ黒色の中～細粒砂を含むシルト層で、灰色の細粒砂偽礫を多く含む。作土層と考えられる。層厚は0.10～0.15mである。層中からは瀬戸焼・土師器皿(図5-8)・瓦などが出土した。出土遺物の年代観から15～16世紀頃の地層と思われる。

第4層：暗オリーブ灰色の中～細粒砂混りシルト層で、下にいくにしたがってシルト分が強くなる。作土層と思われる。北西部で厚く、南東部では部分的にのみ遺存する。層厚は0.15～0.25mである。本層からは瓦質羽釜・土師質甕(図5-6)・土師器皿(図5-10)・瓦などが出土した。出土遺物の年代観から15世紀頃の地層と思われる。

第5層：黒色の中～細粒砂質シルト層で、調査区全般に見られる作土層である。層厚は0.1～0.2mである。本層からは土師質羽釜・瓦質羽釜・瓦器・土師器皿・瀬戸焼などが出土した。出土遺物の年代観から本層は15世紀頃の地層と思われる。

第6層：黒色の中～細粒砂質シルト層で、調査地東部で比較的厚く、西部で薄い。平均すると層厚は0.10～0.15mである。本層上面で溝2条を検出した。また本層からは瓦質羽釜・瓦器・土師器皿などが出土した。出土遺物の年代観から本層は13～14世紀頃の地層と思われる。

第7層：黒色のシルト～粘土からなる水成層で、暗色化している。層厚は0.05～0.10mである。本層上面では鋤溝状遺構・柱穴を検出した。

第8層：黒色のシルト～粘土からなる水成層で、層厚は約0.05mである。

第9層：オリーブ黒色のシルト～粘土からなる水成層で、層厚は約0.1mである。第7～9層は地層の形成過程がほとんど同じと考えられ、下部にいくほどシルト分が強かつ柔らかくなる。

第10層：黒色のシルト～粘土からなる水成層で少量の炭を含み、かつ暗色化している。層厚は0.05～0.08mである。

第11層：灰色の中～細粒砂混りシルトからなる水成起源の層で、植物遺体を多く含む。層厚は0.05～0.15mである。第12層上部が植物擾乱を受けて形成された地層と思われる。

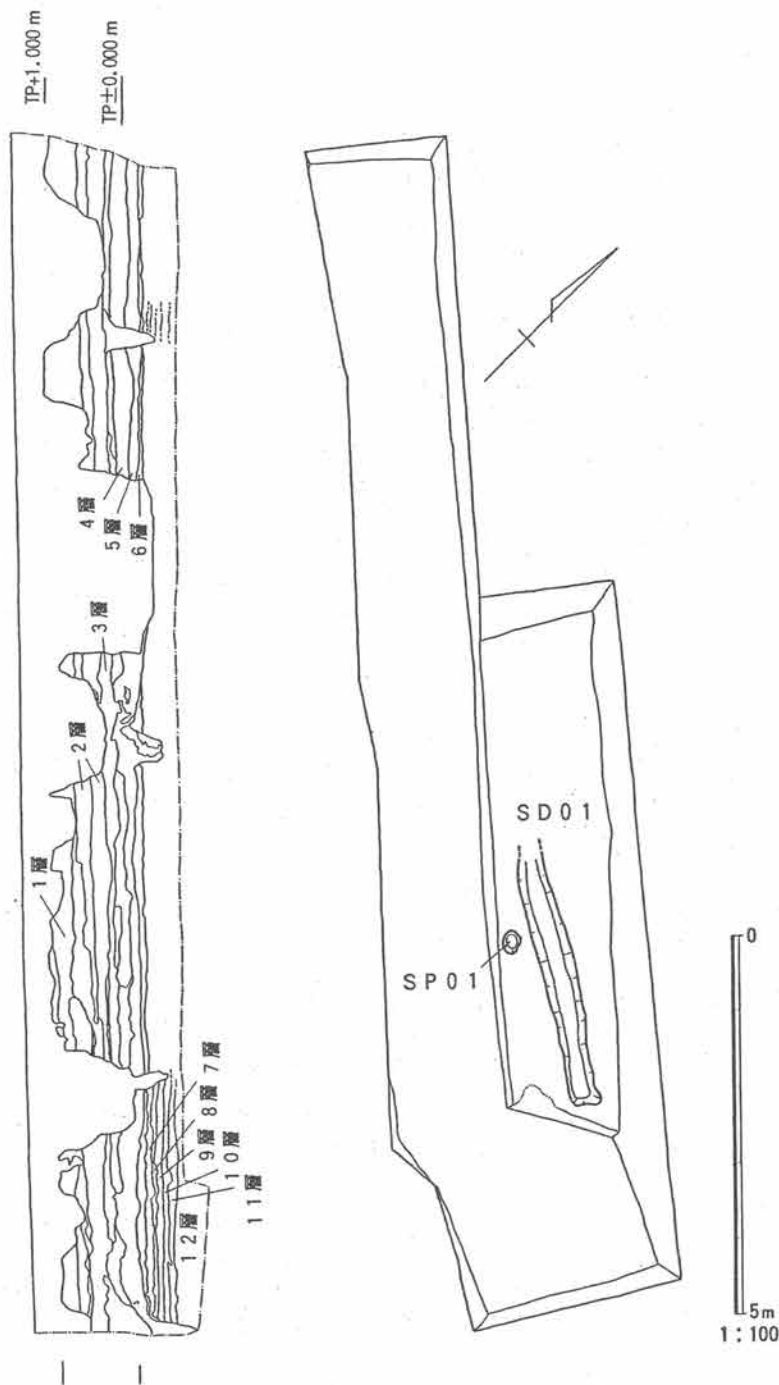


図3 第7層上面遺構配置図・北西壁断面図

第12層：オリブ黒色の細～極細粒砂からなる水成層である。層厚は不明であるが、試掘の結果からすれば地表下約3mまで続くものとみられる。なお、第7層から第12層までは無遺物層である。

2. 遺構と遺物

第7層以下は水成層でかつ無遺物層であるが、第7層上面で鋤溝状遺構SD01と柱穴SP01を検出した(図3)。鋤溝状遺構SD01は幅が約0.45m、深さ約0.05mで第6層によって埋められている。溝の方位は北で西に60度程振れる。南東端部を確認しているが、北西にどれほど続くのかは不明である。溝底部には不規則な起伏があるが、これは農具による加工痕跡と考えられる。つまりこの遺構は、本来第6層下面遺構である可能性が高い。柱穴SP01は直径が約0.3mの楕円形で、深さ約0.25mである。柱痕跡は直径0.18m程で、柱部材の木質が一部残存していた。掘形の埋土は黒色の細粒砂を含むシルト、柱痕跡の埋土は暗青灰色の中～細粒砂を含むシルトである。今回の調査範囲では他の柱穴を検出することはできず、この柱穴が建物に関係するものなのかどうかは不明である。

第6層は13～14世紀の遺物を含む作土層である。その第6層上面で溝2条を検出した(図4)。SD02は幅が0.4～0.5mで、深さ約0.5mである。第5層の土で埋められている。埋土からは備前焼鉢(図5-5)・土師器皿(図5-9・11・12)などが出土した。SD02は北東壁断面では確認されるが、南

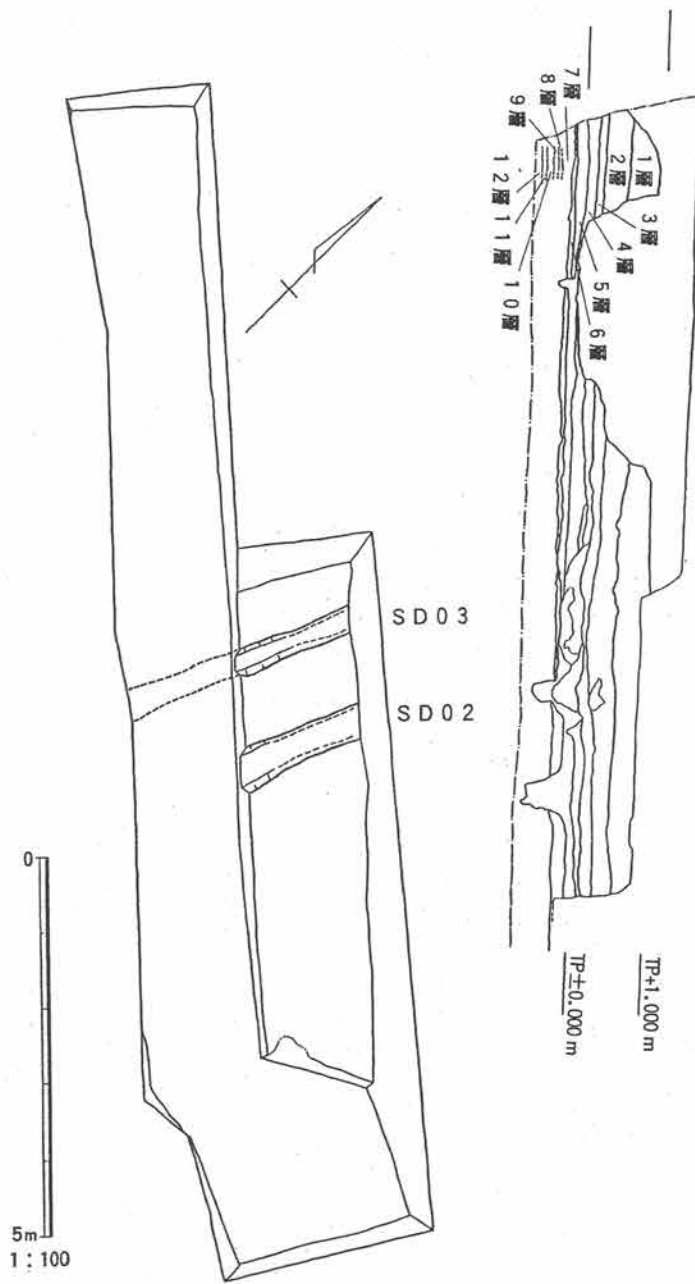


図4 第6層上面遺構配置図・南東壁断面図

西壁断面にはないために、おそらく調査区内で折れ曲がるか途絶えるものと思われる。SD03は幅が約0.3m、深さは約0.35mである。SD02と同様、第5層の土で埋められている。埋土からは土師器皿・瓦器などが出土した。SD03は北東・南西壁面で確認されており、調査区外まで延びることが判明している。以上の溝2条は、ともに北で東に30～35度ほど振るかたちで平行して存在しており、SD03における溝底部のレベル差からすると、北東に向かって流れていたものと思われる。またこれらの溝は耕作に係わるものと思われるが、具体的な用途は不明である。しかし同じ方角に向くことから、この溝の方位がこの地における地割など関係を持つ可能性を示唆することは

できよう。

〈まとめ〉

中世榎並城は、これまで文献上からその存在を推定されていたが、具体的な遺構・遺物によってその痕跡を確認されたことはなかった。しかし今回の調査によって、中世の遺構と遺物が良好に存在していることが明らかとなった。特に、現地表下約0.4mという浅いところで中世の地層を確認できたことは大きな成果であり、調査地周辺の中世における環境を推定するうえで極めて重要な意義を持

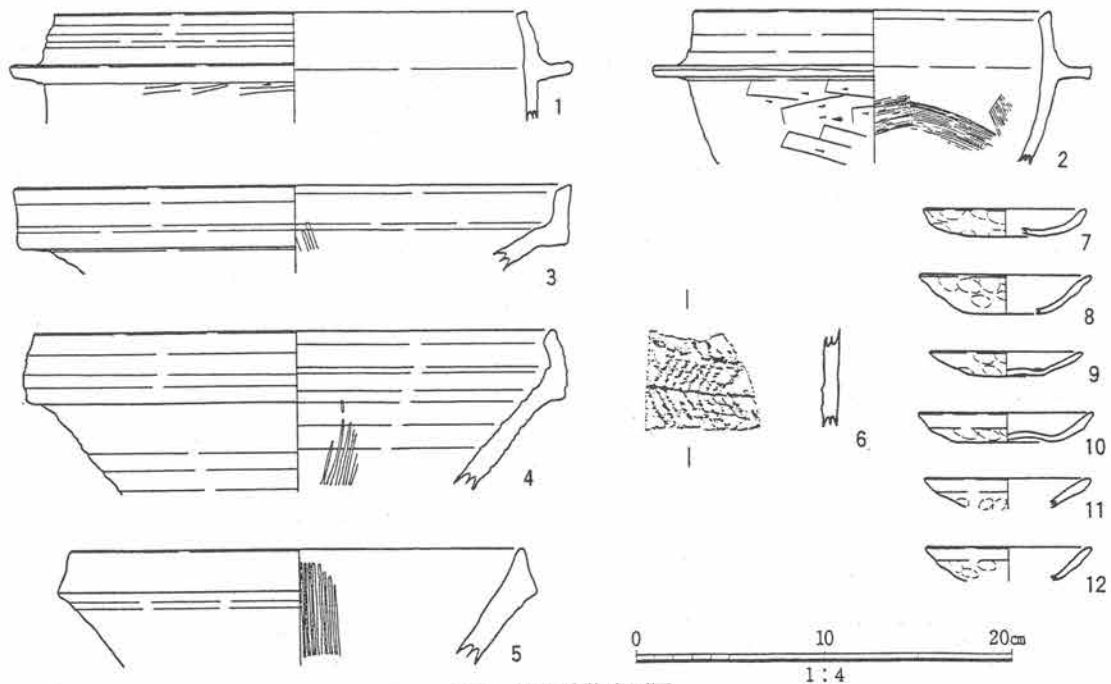


図5 出土遺物実測図

つものである。付近一帯に存在していたと推測される中世榎並城および榎並庄との係わりが俄然、現実味を帯びてきたといえよう。

今回の調査では中世の柱穴・鋤溝状遺構・溝などが検出された。第7層上面で見つかった柱穴は、13~14世紀以前にこの付近で人々が生活を営んでいた事実を物語っており、その時期に相当するものとしては榎並庄がある。榎並庄は榎並城に先行する摂関家領の荘園で、文献上では11世紀にその存在が確認される。第7層上面の遺構は、文献に見える中世榎並庄の存在を遺構の側面から推定するうえで貴重なものといえよう。また第7層上面検出の鋤溝状遺構と第6層上面検出の溝における方位の違いは、14世紀から15世紀にかけてこの地の地割が変化した可能性を示し、このことは当時の榎並庄における環境の推移を考察するうえで重要なものといえる。榎並城に関しては、「細川両家記」天文十七年(1548)十月二十八日条に三好政長・政勝父子が榎並城に拠って三好長慶の軍勢と交戦したと記されているのが初見であるとされる。今回の調査では同時代の遺物を含む層を確認しており、榎並城に関するものかどうかは不明であるものの、瓦が多く出土していることから当地周辺に何らかの施設が存在していたと推定することができよう。

このように今回の調査は、少ない調査範囲ではあったが重要な意義をもつものである。以後、本調査地付近一帯での調査成果がさらに蓄積されていくことが望まれる。

<参考文献>

- 平凡社1986、『大阪府の地名I』、日本歴史地名体系第二十八巻
- 新修大阪市史編纂委員会編1988、『新修大阪市史』第2巻
- 東成郡役所編1972、『東成郡誌』(上)、名著出版

調査区全景
(北西から)



S D01検出状況
(北から)



S D02・03検出状況
(南から)



VIII 阿 倍 野 区

阿倍野筋南遺跡発掘調査(AS01-3)報告書

- ・調査箇所 大阪市阿倍野区阿倍野筋4丁目23-23、24
- ・調査面積 20m²
- ・調査期間 平成13年5月21日～平成13年5月25日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 京嶋覚・宮本康治

〈調査に至る経緯と経過〉

本調査地は阿倍野筋南遺跡のほぼ中央に位置している(図1)。阿倍野筋南遺跡は東西約300m、南北約500mの、弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡であり、地形的には上町台地の高所に位置している。これまで6回の本調査が行われ、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての竪穴住居や掘立柱建物が検出されており、当該時期の集落地であったことが明らかになっている。

当地において住居の建て替えが計画され、平成13年5月15日に工事に先立って試掘調査を行った。その際、時期は不明ながら大型の土壇が確認されたため、大阪市教育委員会と事業者との協議の結果、本調査を行うこととなった。調査は5月21日に開始し、同月25日に現地での作業を終了した。調査にあたっては、工事によって影響を受ける東西2個所の範囲を調査区とし、東側を1区、西側を2区と呼称した(図2)。

なお、本調査で使用した座標は国土座標第VI系で、水準値はTP値である。



図1 調査地位置図

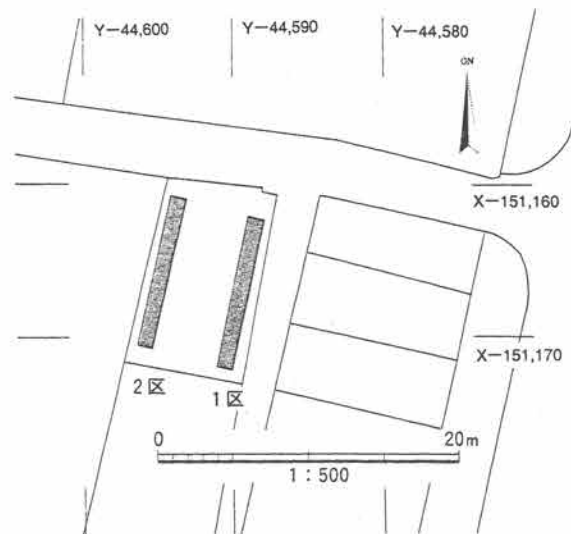


図2 調査区配置図

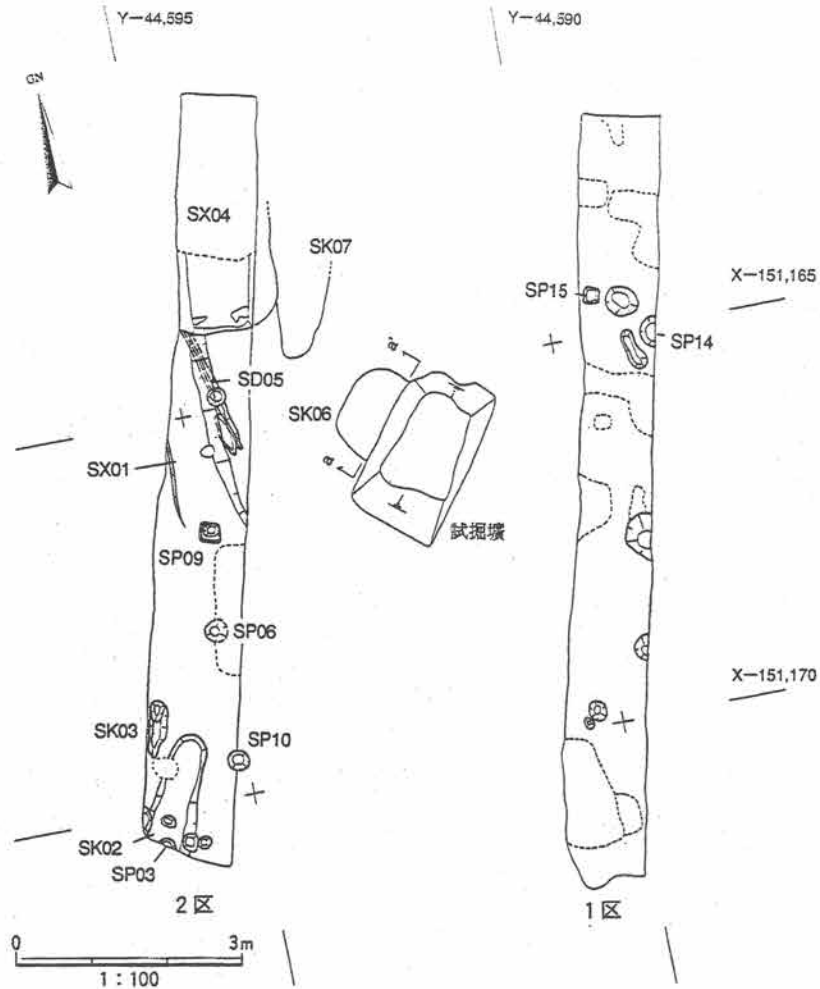


図3 検出遺構平面図

〈調査の結果〉

1. 層序

調査地では、現代盛土がすでに除去されており、周囲の道路面に比べ0.3mほど低くなっていた。大半の地点で地山がすでに露出し、2区のごく一部で包含層が残存する状態であった。

2. 遺構と遺物

遺構の検出は地山の上面で行い、竪穴住居とみられる落込みや溝、柱穴などが認められた(図3)。2区に比べ1区では遺構の分布がやや希薄である。

SX04は2区の北端で検出した落込みで、竪穴住居とみられる遺構である(図3・4)。調査区内には遺構の南端がかかるのみで、大半は調査区外に伸びている。掘込みの状況や埋土の特徴から竪穴住居の可能性が高いと考えられた。その場合、調査区の東側で南東の角とみられる部分を検出しており、隅丸方形の平面プランをもつ竪穴住居の南東寄りの部分と推測される。最も深いところで検出面から約0.35mの深さがある。落込みの南端には周壁溝とみられる溝が認められ、幅約0.1~0.15m、深さ0.1mで、連続していない。断面の観察では、南端から約1.4mのところ段状に落込んでおり、周辺の事例からみて竪穴住居に伴うベッド状遺構の可能性はある。遺構の埋土は4層に区分された。4層は

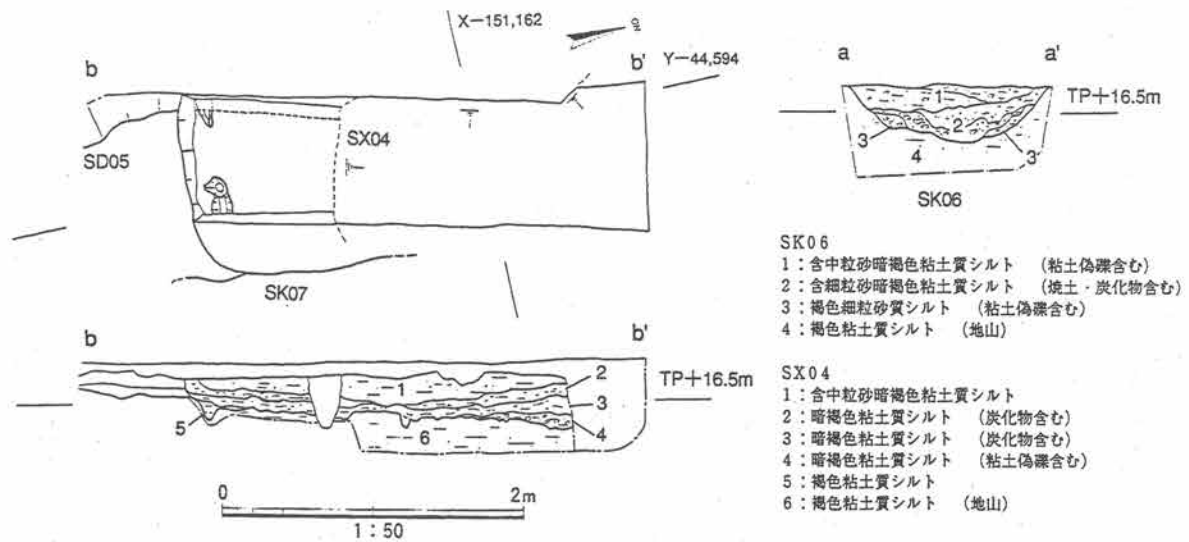


図4 SX04・SK06平・断面図

粘土偽礫を多く含む暗褐色粘土質シルトで、遺構形成時の加工に伴うものとみられる。2および3層は炭化物を含む暗褐色粘土質シルトで、2層がより炭化物を多く含んでおり、廃絶後の堆積であろう。1層は中粒砂を含む褐色粘土質シルトで、2層以下に比べて粗粒でやや明るい。出土遺物は、1層から土師器・須恵器の細片が、2・3層からは土師器の細片が出土したのみで、詳細な時期を決定できる資料ではない。最上層で須恵器が出土した状況は、AS98-2次調査において、古墳時代前期に属する竪穴住居が廃絶したのち埋まりきらず、古墳時代後期になり埋没したことが知られており、そうした状況と類似する過程をもつ可能性がある。なお、東側で本遺構を一部破壊する落込みSK07を検出したが、調査区外のため掘り下げは行っていない。

SX01は2区中央に位置する南北方向に伸びる溝状の落込みで、幅約1.0mである。下面に凹凸が顕著で、耕作に伴うものである可能性がある。土師器・須恵器の細片が少量出土している。SD05はSX01の下位で検出された溝状の落込みである。

SK02・SK03は2区で検出された溝状の遺構である。SK02は幅0.5m、長さ1.5m、SK03は幅0.3m、長さ0.8mである。また、試掘壕の壁面では土壌SK06を確認した(図3・4)。試掘壕の上面で幅1.3m、深さ0.4mである。埋土は3層に区分される。3層は地山層に由来する偽礫を多く含む褐色粘土質シルトであり、土壌形成時のものとみられる。2層は焼土と炭化物を多く含む暗褐色粘土質シルトである。1層は粘土の偽礫を含む暗褐色粘土質シルトで、埋め戻したものと推測された。2層に焼土や炭が認められるものの、土壌そのものの壁面は被熱していないため、炭や焼土を廃棄するための土壌の可能性はある。遺物は出土しておらず時期は不明であるが、埋土の特徴などから弥生～古墳時代に属するものとみられる。

柱穴は10基あまりが検出された。埋土の特徴からは2種類に大別することができる。褐色の粘土質シルトを主体とするものと、粘土偽礫を含み暗褐～黒褐色の砂質シルトを主体とするものである。前

者にはSP03・10・14などがある。SP14は直径0.55m、深さ0.45mで、直径0.15mの柱痕跡が確認できた。これらからは遺物が出土しておらず、時期を決定することはできないが、周辺で検出されている柱穴からみて、弥生時代末～古墳時代のものである可能性がある。一方、後者にはSP06・09・15などがあり、平面円形のものと同方形のものを含む。うち、SP06などからは近世の陶磁器が少量出土しており、これらの多くは近世以降のもものと推測される。なお、いずれの柱穴でも組み合う関係などは明らかにできなかった。

〈まとめ〉

今回の調査は、狭い範囲ではあったが、竪穴住居とみられる落込みや土壇、柱穴などの遺構を検出することができた。落込みSX04はその形状などから、竪穴住居の一部と推測された。遺物が少量で詳細な時期は不明ながら、調査地の主に北の一带でこれまで検出されている弥生時代末から古墳時代の集落群と一連の遺構がさらに南にも広がる可能性を示したといえるだろう。周辺では、AS99-3・4次調査や試掘の結果などから、当該時期の集落がさらに広がることが明らかとなり、古代および中世の遺構も確認されてきている。当遺跡での調査は小規模なものが主体であるが、調査で得られた情報を今後も蓄積し、一帯の歴史を再構成していくことが必要である。

参考文献

大阪市文化財協会1999、『阿倍野筋遺跡発掘調査報告』

調査開始時の状況



1区全景
(北西から)



2区全景
(北東から)



IX 住 吉 区

南住吉遺跡発掘調査(MN01-14)報告書

- ・調査箇所 大阪市住吉区长居4丁目40-1、12
- ・調査面積 約30m²
- ・調査期間 平成13年7月9日～平成13年7月13日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 京嶋覚・小倉徹也

〈調査に至る経緯と経過〉

南住吉遺跡は大阪市西南部、上町台地上に位置する縄文時代から江戸時代の複合遺跡である。住吉区南住吉を中心として大領・長居・長居西・長居東・苅田・我孫子・我孫子東・我孫子西、東住吉区长居公園にわたって所在する。調査地は遺跡のほぼ中央部に位置する。

調査地周辺(図1)では、本調査地の南西隣において行われたMN95-20次調査で弥生時代から奈良時代までの遺構や遺物が出土しており、西側のMN86-48次調査でも中世以降の遺構や遺物のほか、弥生～古墳時代の遺物が出土している。

住宅の建替えに伴い、平成13年7月3日に行われた試掘調査(MN01-12)で、現代盛土の直下から古代と思われる地層と少量ではあるが遺物が確認された。この結果を受け、敷地の南寄りに調査区を設定して(図2)、平成13年7月9日から本調査を行うことになった。調査はまず、重機によって現代盛土を除去した後、以下を人力によって掘下げた。その結果、調査区の南半部において中世の遺構が確認された。7月13日に現場における発掘調査を終え、同日に埋め戻しと後かたづけ等のすべての作業を終了した。なお、調査に用いた方位は磁北、標高はTP値である。

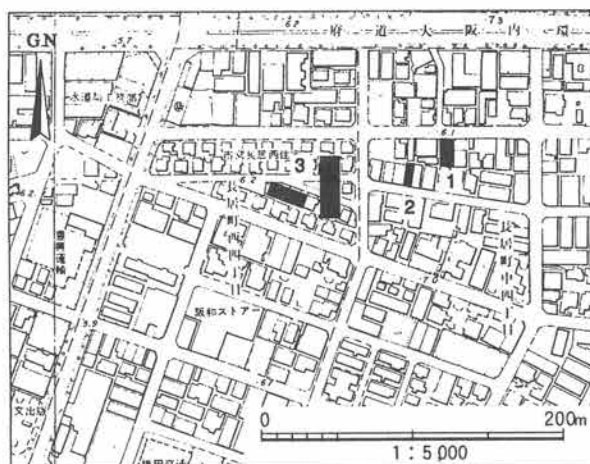


図1 調査地位置図

1. MN01-14 2. MN95-20 3. MN86-48

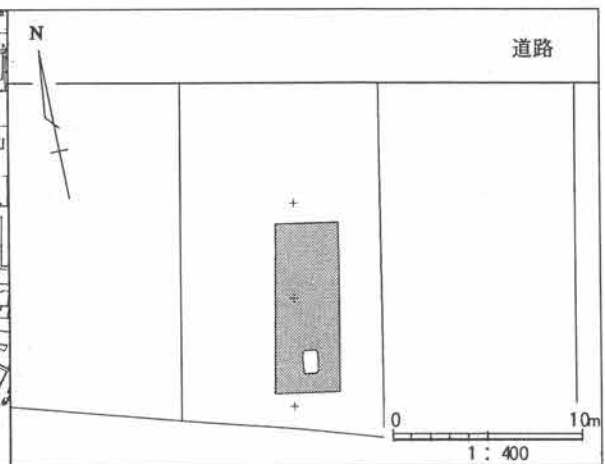


図2 調査区の配置

〈調査の結果〉

1. 層序

現地地表下約1.4mまでの地層を観察した。以下に層序の概略を下位層より記し、各層の層相や特徴を表1、地層断面を図3に示す。なお、調査区の北側は第0層と第1層によって大きく攪乱されていたため、基本的な層序の確立は主として南側で行った。

第5層、第4層はその層相と周辺の地質状況から中段段丘構成層に相当すると考えられる。

第5層はシルト～細粒砂からなる河成層である。

第4層は主として細粒砂質シルトからなる第4a層と、粗粒～極粗粒砂からなる第4b層に区分される。もとは河成層と考えられるが、後の風化と擾乱により本来の構造は失われている。

第3層は第3ai層、第3a ii層、第3b層に細分される。その層相から下位の第4層を母材として形成されたと考えられる。第3b層は調査区の南側に分布し、主として中粒～細粒砂質シルトからなる。13世紀ごろに属する瓦器碗(図3)が出土した。第3a ii層は調査区の南側に分布し、主として細粒～中粒砂質シルトからなる。第3ai層は中央部に分布し、主として細粒砂質シルトからなる。上面に乾痕が観察される。

第2層は古土壌を形成しており、第2.a層と第2b層とに細分される。第2b層は中粒～粗粒砂混り細粒砂質シルトからなる。第2a層は粗粒～極粗粒砂混り中粒～細粒砂質シルトからなる。

第1層はシルト質中粒～細粒砂からなる近世～近代の盛土で、調査区北側において下底部付近に水漬かりの堆積物を伴うSX01を検出した。

第0層は現代盛土である。

表1 層序表

MN01-14 層序	岩相	層厚 (cm)	特徴	遺構	おもな遺物	時代
第0層	現代盛土	20~45			—	現代
第1層	灰色シルト質中粒～細粒砂	≤25		←ピット, 杭, SX01	陶磁器	近代～ 近世
第2層	a 含細礫 暗褐色 粗～極粗粒砂混り中～細粒砂質シルト (古土壌)	10		←乾痕	土師器片, 瓦器片	中世 (～古代)
	b 含極粗粒砂～細礫 暗褐色 中～粗粒砂混り細粒砂質シルト (古土壌)	10~15			—	
第3層	i 含中粒砂～中礫 灰色 細粒砂質シルト	≤5	中央に分布。やや土壌化	←乾痕	土師器片, 瓦器片	
	ii 含粗粒砂～細礫 灰～黄灰色 細～中粒砂質シルト	5~10	南側に分布。(4a層が土壌化!?)		土師器片, 瓦器	
	b 含粗粒砂～中礫 暗褐色 中～細粒砂質シルト	14~26	南側に分布。砂礫層。(4b層の土壌化部?)		瓦器, 須恵器	
第4層	a 含細礫 淡黄灰色 中～極粗粒砂混り細粒砂質シルト (河成層)	≤30	削割により、中央西側に分布	←柱穴SP01, 溝SD01, SX02 乾痕	—	旧石器
	b 黄灰色 極粗粒砂～中礫混り粗～極粗粒砂 (河成層)	80	砂礫層		—	
第5層	緑灰～灰色シルト～細粒砂 (河成層)	≥10	グライ化, ラミナが観察		—	

凡例 ← 上面検出遺構

2. 遺構と遺物

平面的な調査は第2 a層の上面から開始した。ただし、第2層および第3層のそれぞれの上面では遺構は検出されなかったため、遺構の記載は第4 a層の上面について行う。

第4 a層上面検出遺構 (図4)

柱穴SP01、溝SD01とSX02を検出した。

SP01は直径0.44~0.47mで楕円形の平面を示し、深さ約0.41m、直径約0.19mの柱痕跡が認められた。周辺にこの他の柱穴は認められなかった。

SD01は東南東-西北西に延びる溝であり、第0層によってその上部は大きく削剥されていた。残存する幅は0.24~0.93m、深さは0.12~0.23mである。埋土は下部が水漬かりの砂質シルト、上部がシルト混り極粗~粗粒砂で構成される。埋土の下部から土師器片が出土したが、時期を決定するには至らなかった。

SX02はほぼ楕円形を示し、北西肩をSD01に切られる遺構で、残存する幅は0.74mである。埋土から瓦器碗が出土しており、第3 b層中から出土している瓦器碗と接合した(図3)。瓦器碗は和泉型Ⅲ-1 [尾上実・森島康雄・近江俊秀1995] に比定され、12世紀後半に属するものである。

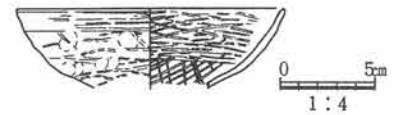


図3 出土遺物実測図

〈まとめ〉

今回の調査では、地表下約1.4mまでの地層を確認した。本調査地は上町台地上にあって、中位段丘構成層の堆積後にはほとんど碎屑物が供給されることがなく、中位段丘構成層の上部が土壌化することで生活面を形成してきたため、遺構面は地表直下に存在し、攪乱を受けやすい。本調査地でも中位段丘構成層の最も高い所はTP+7.3mで現地地表から約20cmであったが、中世初頭と考えられる溝や柱穴などの遺構を検出した。周辺の調査でこれまでに得られているような古代以前の遺構は発見されなかったが、出土した遺物の中には飛鳥時代と考えられる土師器片が含まれていたことから、周辺の調査結果との整合性も得られた。

南住吉遺跡における考古資料は決して多いとはいえないのが現状である。上町台地周辺の遺跡群との関連性など、まだまだ不明な点が多い。今後行われる調査の結果を合わせて検討していくことが必要である。

(参考文献)

鈴木秀典1982、「瓦器碗の編年」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.278-282

尾上実・森島康雄・近江俊秀1995、「瓦器碗」：中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』、pp.315-337

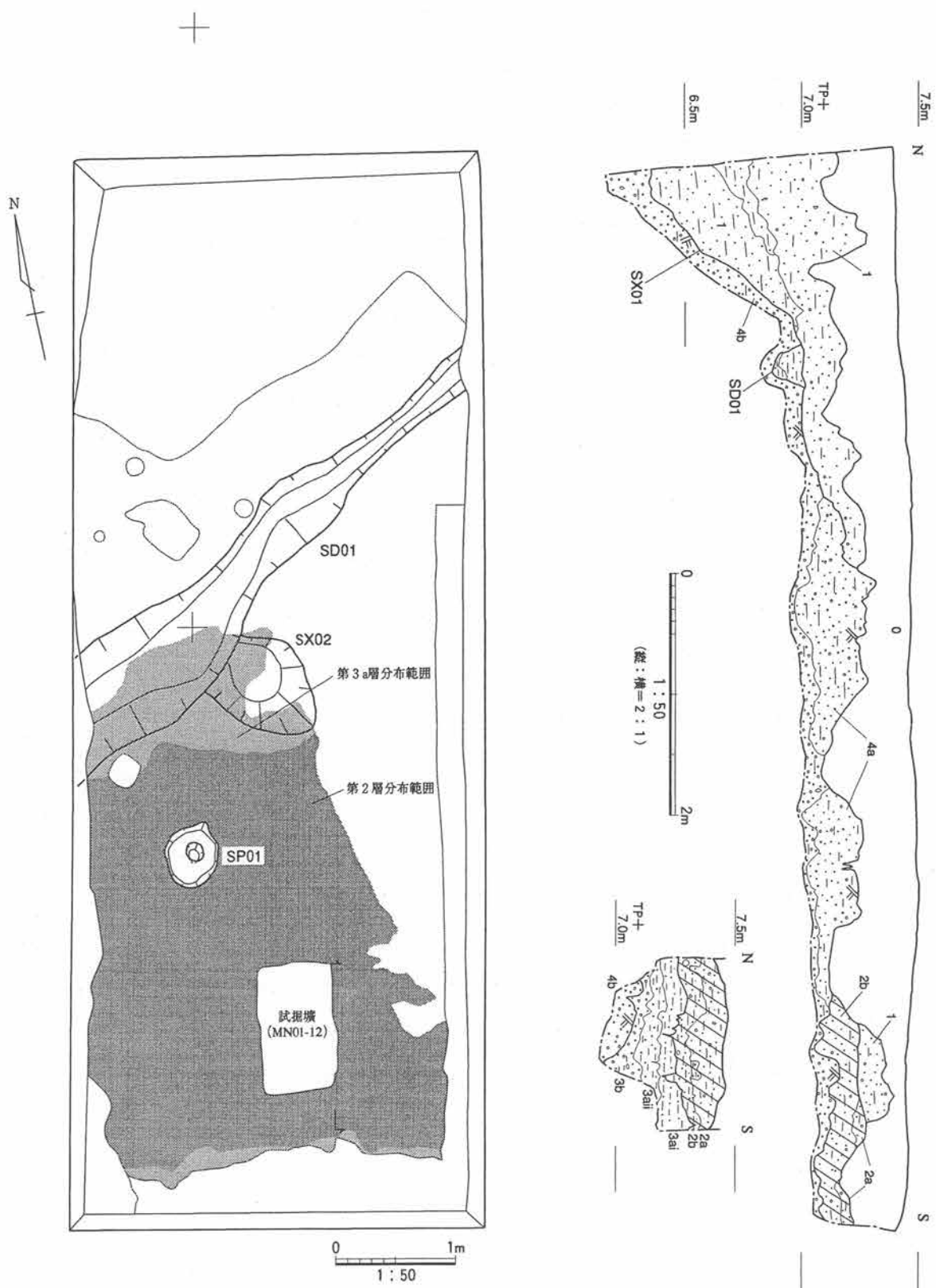


図4 調査区および試掘坑東壁断面と第4a層上面検出遺構

試掘壕東壁地層断面
(西から)



北西角地層断面
(南東から)



第4 a層上面検出状況
(北から)



X 東 住 吉 区

難波大道跡発掘調査(ND01-6)報告書

- ・調査箇所 大阪市東住吉区南田辺5丁目5-14・15
- ・調査面積 24m²
- ・調査期間 平成13年6月7日～平成13年6月11日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 京嶋覚・大庭重信

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は、古代難波京を南北に縦断していたと推定されている難波大道の推定範囲内にあり(図1)、難波宮大極殿からは南に約7km、難波大道側溝と考えられる遺構が見つかった大和川今池遺跡からは北に約3kmの地点に位置している。

調査地の周辺ではこれまで調査が行われておらず、遺跡の詳しい内容については不明な点が多い。ただし、本調査地から北側約600mで行われたND90-10次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1991]やND94-15次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1996]では、6世紀代の集落跡が見つかっており、新たに山坂遺跡と命名されている。

平成13年6月5日に実施された当地での試掘調査(ND01-05次)の結果、現地表面直下で中世に埋没したとみられる南北方向の溝が検出された。この結果を受けて、溝の規模や広がり、詳細な時期を把握するために、6月6日～6月11日の間、調査を実施した。調査区は、推定される溝の方向にあわせて南北約8m、東西約3mの範囲に設定した(図2)。

座標値は国土平面直角座標(第VI系)の値で



図1 調査地位置図

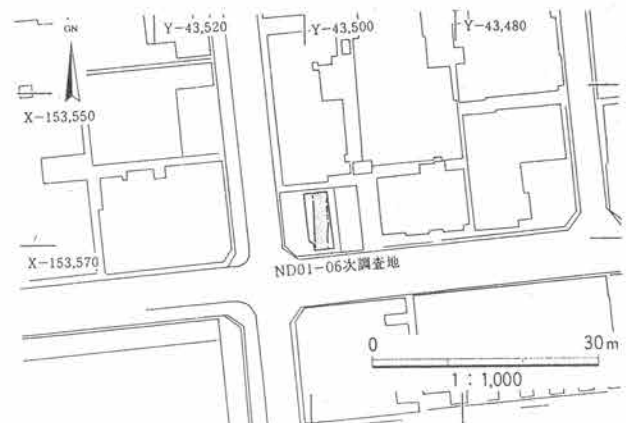


図2 調査区配置図

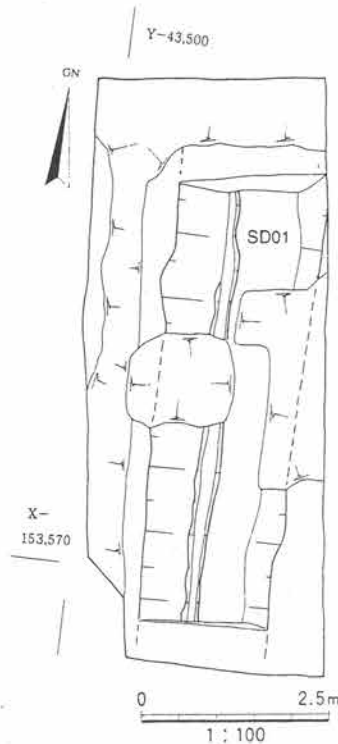


図3 調査区平面図

ある。この数値については、調査時に作成した調査地周辺の1/100平面図と、パシフィック航業株式会社調製の大阪道路現況平面図(1/500)とを重ね、そこから割り出した数値を用いた。

〈調査の結果〉

1. 遺構および遺物 (図3～5)

現代の整地層を2～3cm除去後、黄褐色粘土～粗粒砂からなる地山層の上で、南北方向の溝SD01を検出した(図3)。規模は検出面で幅1.8～2.0m、深さ0.4mである。断面は緩やかな逆台形で、底では一段低くなって幅0.3mの細い溝状を呈する個所がある。少なくとも調査範囲の約6.0mまでは直線的にのびており、方位はほぼ正方位である。

SD01の埋土は1～6層に区分できる(図4)。

6層は溝が機能していた時に底に堆積した水つきの細粒砂質シルト層である。溝を掘った際に生じた偽礫などが基底にほとんど認められないことから、溝さらいを行うなど管理されていたことがうかがえる。

また、溝底で検出した細い溝状の落込み内にも6層が分布しており、この部分でのみ偽礫がまき上がった状態で含まれていることから、本層内から掘られたものであることがわかる。

5層は偽礫を含む崩落土もしくは埋戻し土で、溝の東肩で認められた。北半では溝の1/3ほどの範囲に分布していたが、南半ではほぼ1/2に及んでいた。4層はその後の凹みに堆積した水つきのシルト層で、本層堆積時には溝は凹地としてのみ残存していたと考えられる。

3・4層はラミナが明瞭な水成のシルト～粗粒砂層で、溝の北半にのみ分布していた。2層は3層に比べてやや擾乱を受けていた。1層は偽礫を含む崩落土もしくは埋戻し土であり、本層により溝は完全に埋没する。

出土遺物は、土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・青磁・瓦が出土したが、小片のもので占められ、量もそれほど多くない。1～3を図化した(図5)。1は瓦質土器播鉢の口縁部で、4層から出土した。口縁部端が断面三角形で、縁端の幅が狭いことから15世紀前半のものであろう。2は須恵器壺の底部

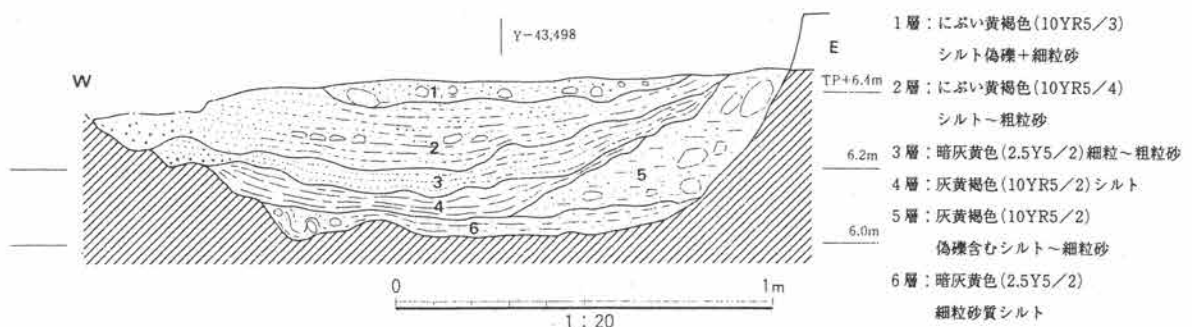


図4 SD01北壁地層断面図

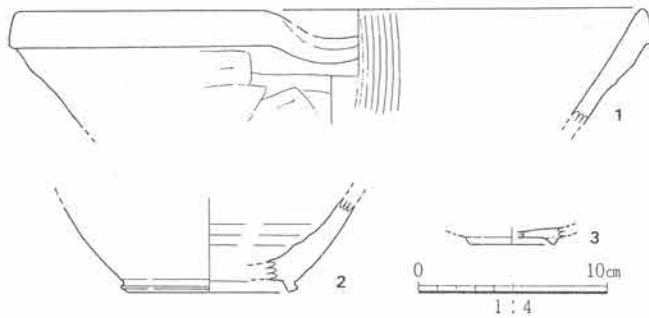


図5 SD01出土遺物実測図

図化できなかったが瓦質土器三足釜の脚部が出土している。このことから、SD01は14～15世紀頃に機能していた溝であったと考えられ、掘削時期は不明であるが、瓦器が一定量含まれることから遡っても13世紀であろう。

〈まとめ〉

今回の調査では、難波大道に係わる古代の遺構は確認できなかったが、ほぼ正方位を向く中世の南北溝を検出した。溝の性格については不明であるが、周辺の町割や調査地西側の南北道路が正方位からやや北北西に振っているのとは異なっており、現在の土地区画とは異なる正方位を指向する地割が、少なくとも中世にはあったことを示している。

また、混入品ではあるが奈良時代の遺物も出土しており、古代に遡る人間活動が調査地付近で行われていた可能性が高い。

参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1991、「XⅡ 東住吉区難波大道跡遺跡 扶蘇邸の建設に伴う発掘調査ND90-10」:『平成2年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.177-182
- 1996、「VⅡ 難波大道跡 宮崎邸建築に伴う発掘調査ND94-15」:『平成6年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.113-116

調査地の位置
(南から)



S D01検出状況
(南から)



S D01北壁断面
(南から)



桑津遺跡発掘調査(KW01-10)報告書

- ・調査箇所 大阪市東住吉区桑津3丁目130-5
- ・調査面積 約40m²
- ・調査期間 平成13年12月12日～平成13年12月17日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 京嶋覚・小倉徹也

〈調査に至る経緯と経過〉

桑津遺跡は大阪市東住吉区桑津・駒川・西今川・北田辺に広がる弥生時代から江戸時代の複合遺跡であり、大阪府下の代表的な弥生時代の遺跡として知られている。調査地はその北西部に位置する。

調査地周辺(図1)では、本調査地北側の京善寺境内で行われたKW88-6次調査において弥生時代の方形周溝墓と土器棺墓、平安時代の掘立柱建物、江戸時代の溝・土壌などの遺構や遺物が出土している。また、東側のKW86-3次調査でも平安時代の溝や江戸時代の環濠の一部などの遺構や遺物が出土している。

住宅の建替えに伴い、平成13年12月6日に行われた試掘調査(KW01-8次調査)で、現代盛土の直下から古代および中世と思われる遺構と遺物が確認された。この結果を受け、工事に先立って調査を行うことになった。敷地の東寄りに調査区を設定して(図2)、平成13年12月12日から本調査を行なった。調査はまず、重機によって現代盛土を除去した後、以下を人力によって掘下げた。その結果、古代および中世の遺構が確認された。12月17日に掘削、実測・写真撮影などの作業を終え、同日に埋め戻しと後かたづけ等のすべての現場における作業を終了した。

調査に用いた方位は磁北、標高はTP値である。

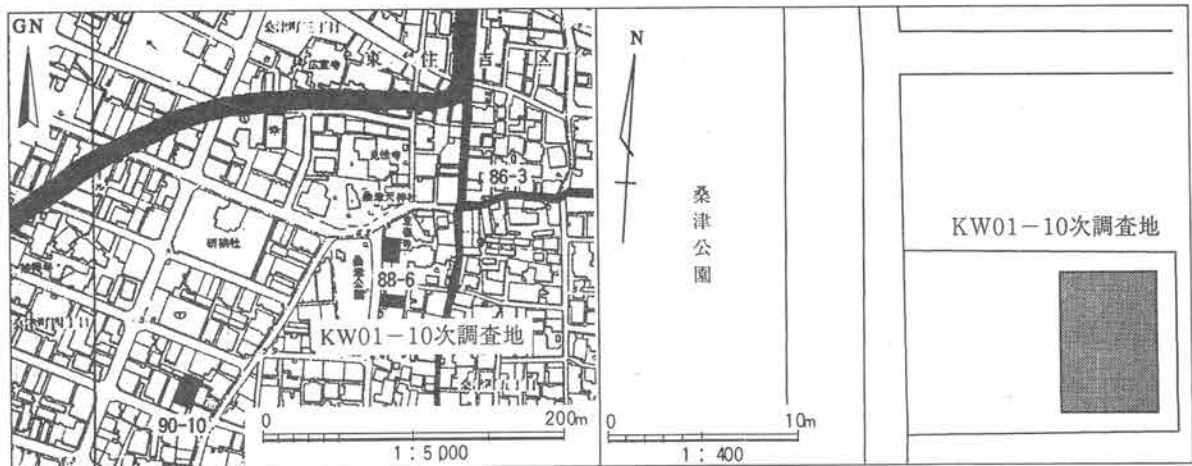


図1 調査地位置

図2 調査区の配置

〈調査の結果〉

1. 層序

現地表下約0.8mの地層を観察した。以下に層序の概略を下位層より記し、各層の層相や特徴を表1、地層断面を図4に示す。なお、基本的な層序の確立は最も地層の残りが良好であった調査区東南部で行った。

第2層は黄橙色細粒砂混りシルト～粘土で構成されるいわゆる地山層で、調査区の全域に分布する。上面に乾痕や生物擾乱が観察され、著しく風化し、粘土化が進んでいる。周辺のこれまでの調査結果から沖積層中部層～低位段丘構成層に相当すると考えられる。

第1層は灰色シルト混り細～中粒砂からなるいわゆる「遺物包含層」であり、瓦器が出土した。

第0層は現代盛土である。

表1 層序表

KW01-10 層序	岩相	層厚 (cm)	特徴	遺構	おもな遺物	時代
第0層	現代盛土	ab.20	盛土は2時期ある 下部の盛土には焼土が含まれる	▽SD01～03	陶磁器・ガラス・煉瓦	現代
第1層	灰色シルト混り細～中粒砂 (遺物包含層)	2～5	部分的に分布する	←SD04～06, SX01 SP01～11, SK01 SB01	瓦器片・須恵器片・土師器片	中世
第2層	黄橙色細粒砂混りシルト～粘土 (沖積層中部層～低位段丘構成層)	≥45	上面に乾痕あり 風化帯を形成する			

凡例 ▽ 基底面検出遺構 ← 上面検出遺構

2. 遺構と遺物

平面的な調査は第0層基底面と第2層上面において行った。

1) 第2層上面検出遺構 (図3・4)

掘立柱建物SB01、柱穴SP01～11、土壌SK01、溝SD04～06およびSX01を検出した。

SB01は東西1間以上×南北2間以上の掘立柱建物である。柱間隔は南北1.66～1.81m、東西1.88～2.07mとやや開きがあるものの、SP01～03とSP06およびSP04・05のそれぞれの埋土の特徴が類似していることから一連の掘立柱建物SB01と判断した(図3)。南北の柱筋はほぼ正方位である。柱穴はいずれもほぼ楕円形の平面を示し、長径は0.16～0.29m、短径が0.19～0.27mである。柱痕跡はSP03～05に認められ、直径

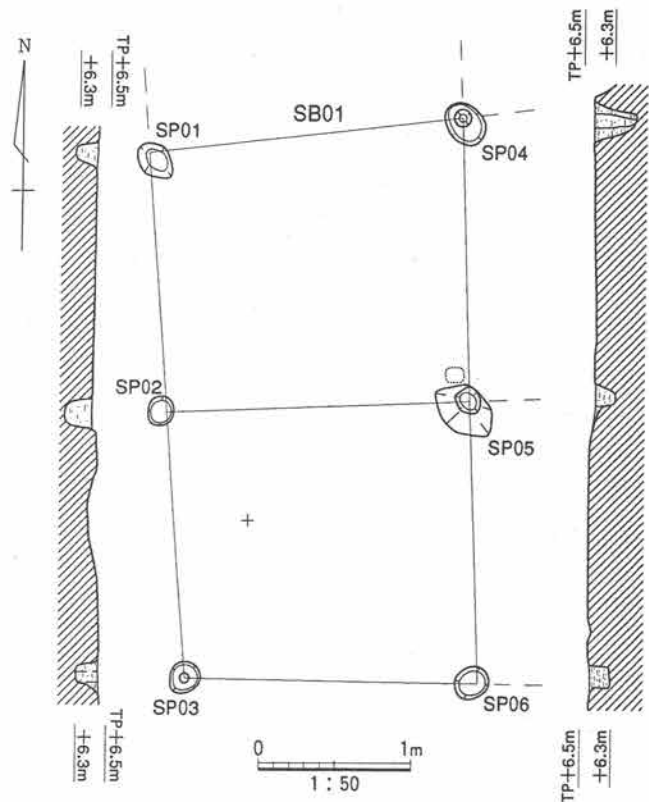


図3 SB01平面・断面

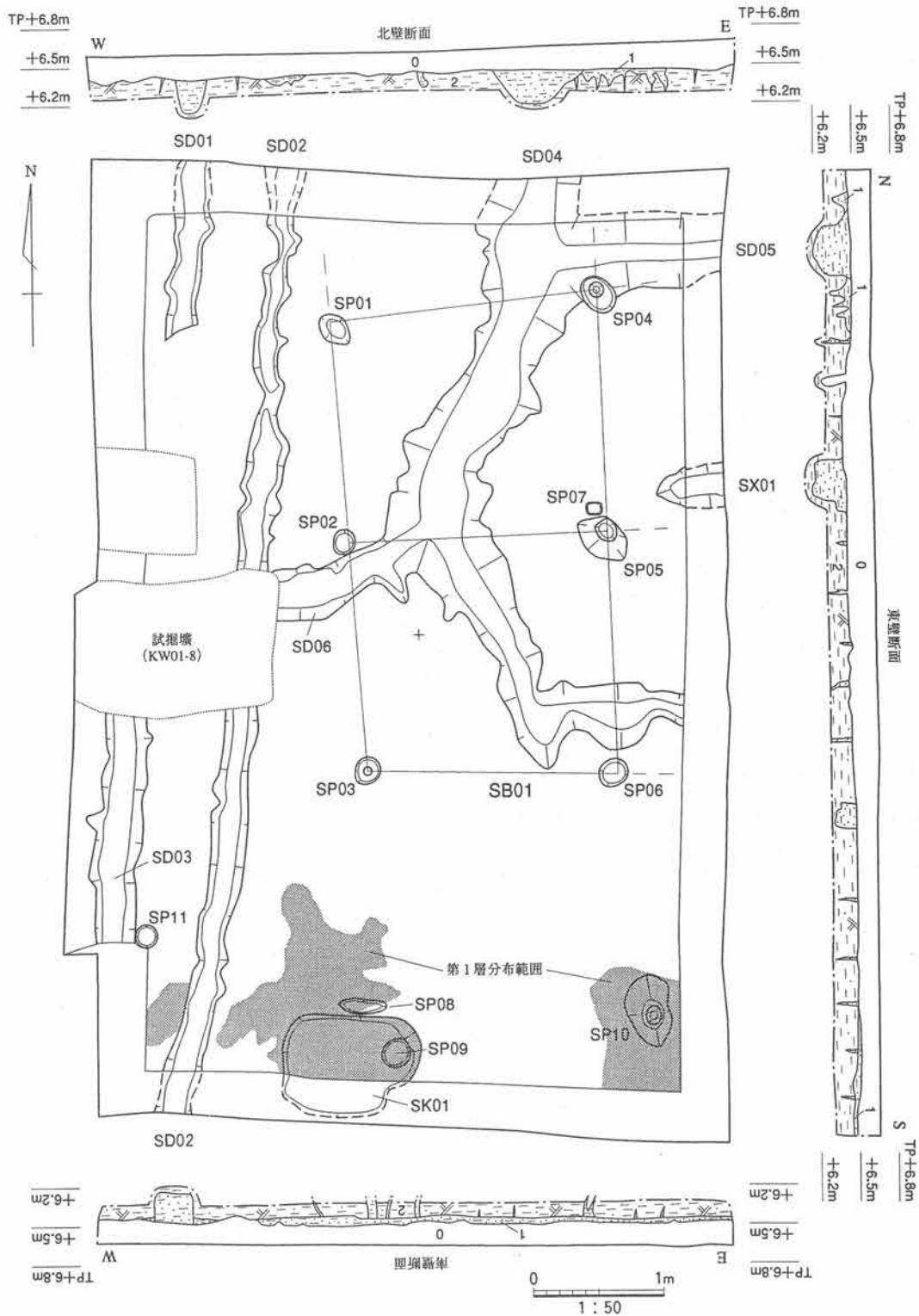


図4 第2層上面および第0層基底面検出遺構と第1層分布範囲および北壁・東壁・南壁地層断面

7~10cmであった。中世以降の攪乱によって削られているため、残存する深さは最も残りの良いもので29cmであり、掘形の下底標高はTP+6.24~6.30mである。周辺に組み合う柱穴、特に西側および南側に想定される柱穴の検出を試みたが検出されなかったため、東側および北側に広がる建物とも考えられる。柱穴から出土した遺物は土師器片のみであり、詳細な時期を決定できる量ではないが、同様の形態の平安時代前半の掘立柱建物が北側のKW88-6次調査においても見つかっており、この

ことから古代のものと考えられる。

SK01 (図5) は東西幅約1.10m、南北幅約0.70m、深さ約0.30mである。埋土は上部が地山の偽礫を含む褐灰色シルト混り細粒～中粒砂、下部が地山の偽礫を上部に比べて多く含む褐灰色中粒～細粒砂質シルトである。須恵器皿片と土師器片がわずかに出土したのみである。なお、土壌内の東端には杭跡と見られるSP09が観察された。

SP07は方形の平面を示し、一辺0.14m、残存する深さ0.03mである。SP08は楕円形の平面を示し、長径0.21m、短径0.13mである。埋土は同質で灰色シルト混り細～中粒砂からなる。

SP10は南北幅0.48m、東西幅0.35mで楕円形の平面を示し、深さ約0.20m、長径0.20m、短径0.16mの柱痕跡が認められた。周辺には組み合う他の柱穴は認められなかった。

SP11はほぼ円形の平面を示し、直径約0.30mである。埋土から平城宮土器Ⅳ～Ⅴに属する須恵器皿B蓋(図6)が出土した。

SD04～06およびSX01の埋土は同質で、褐灰色シルト混り細粒～中粒砂からなる。

SD04は幅0.25～0.62m、残存する深さ0.03～0.25mである。埋土からは須恵器片や土師器片が出土したのみである。

SD05はSD04に取付く溝で、幅0.56m、残存する深さ0.25mである。

SD06はSD04に取付く溝で、幅0.25～0.35m、残存する深さ0.20mである。埋土からは奈良時代後半～平安時代初頭に属する須恵器杯蓋が出土した。

SX01は幅0.35～0.46m、残存する深さ0.22mである。SD04の南部分とSD05のほぼ中央部で検出された遺構であるが、遺構の東部分が調査区外であるため遺構の性格については不詳である。

2) 第0層基底面検出遺構(図3)

溝SD01～03を調査区西側で検出した。SD01・03とSD02はほぼ並行しており、SD01は幅0.21～0.29m、残存する深さ約0.23m、SD02は幅0.31m以下、残存する深さ0.07～0.17m、SD03は幅0.31～0.40m、残存する深さ0.04～0.17mである。埋土は同質で、第2層の偽礫を含むシルト混り灰色細～中粒砂からなる。水漬かりの堆積構造が認められないことと下底部の形状から考えて耕作に伴う溝と思われる。埋土からは瓦器片が出土しており、中世以降に埋め戻されたものと考えられる。

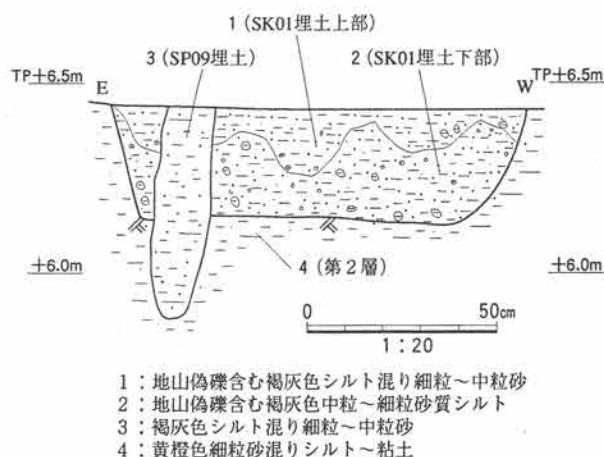


図5 SK01断面

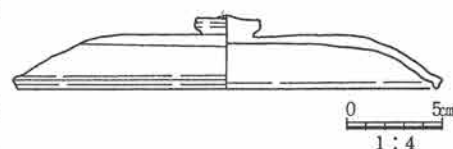


図6 出土遺物実測図

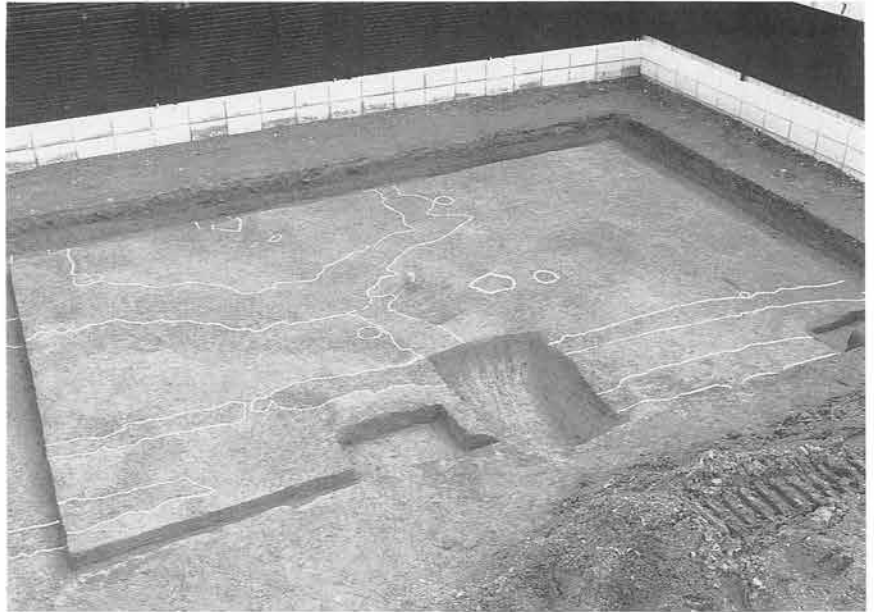
〈まとめ〉

今回の調査では弥生時代にさかのぼる遺構は検出されなかったが、奈良時代後半～平安時代初頭に属すると考えられる掘立柱建物・柱穴・土壇・溝および中世の耕作に伴う溝を確認することができた。北側のKW88-6次調査においても類似する掘立柱建物・柱穴・土壇・溝が確認されており、古代の桑津遺跡を平面的にとらえる貴重な資料を得ることができた。今後行われる調査の結果を合わせて、さらに検討していくことが重要である。

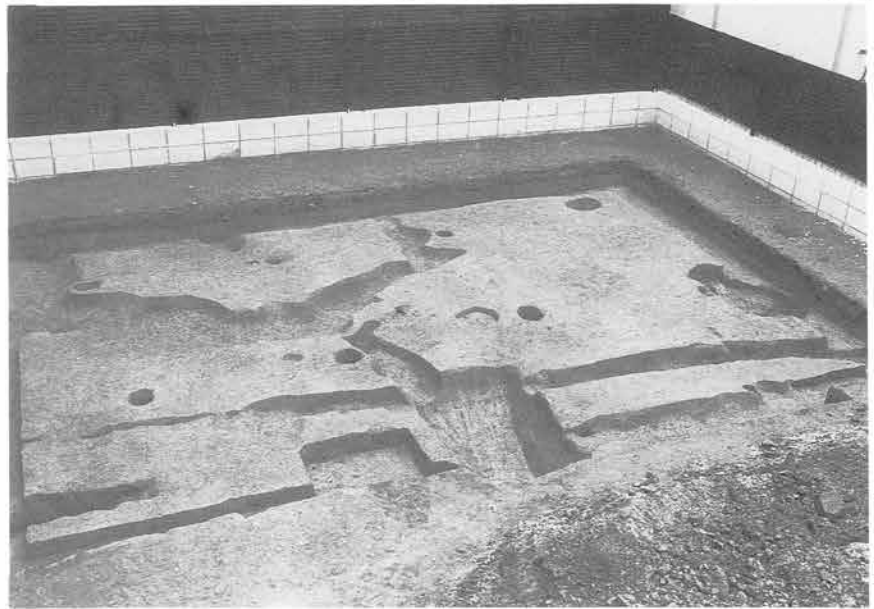
参考文献

古代の土器研究会1992、『都城の土器集成』

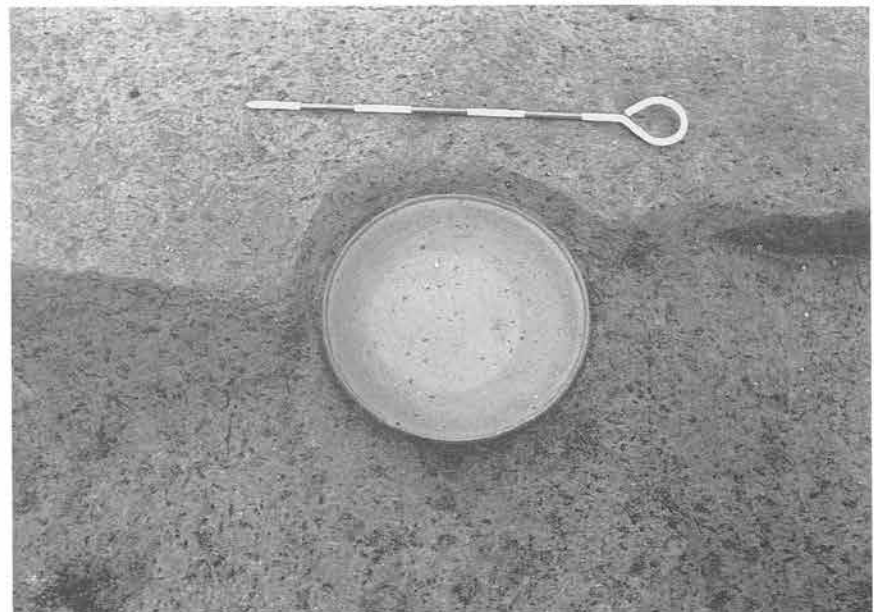
第2層上面遺構
検出状況
(北から)



第2層上面遺構
完掘状況
(北から)



SP11遺物出土状況



酒君塚古墳発掘調査(SA01-2)報告書

- ・調査箇所 大阪市東住吉区鷹合2丁目5
- ・調査面積 約50m²
- ・調査期間 平成14年3月4日～平成14年3月14日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 京嶋覚・田中清美

〈調査に至る経緯と経過〉

酒君塚古墳は戦前から『日本書紀』仁徳天皇紀に記載された酒君伝承に由来する古墳として知られている。現在、酒君塚古墳の墳頂部にある酒君塚の石碑は1901(明治34)年3月に建立されたものであり、江戸時代以前にさかのぼるものではない[東成郡役所1922]。

酒君塚古墳は上町台地南部の東縁部、南から北に派生した段丘構成層が高くなった場所に位置している。また、古墳の西側に駒川、東側に今川が北流しており、微高地の西および東側は沖積地に入っているものと考えられる(図1)。

今回、酒君塚古墳の墳丘内で公園整備工事が実施されることになり、2002年2月19日に4個所で試掘調査を行った。その結果2個所において表土層の直下から墳丘の盛土が確認されたことから、大阪市教育委員会と事業者が協議を行って本調査を行うことになった。調査は墳丘の3個所にトレンチを設定することから着手し、掘削はすべて人力によった。

一方、トレンチの掘下げと併行して、酒君塚古墳の現況測量を実施した。なお、図面で示す水準値はTP値で、方位は磁北である。

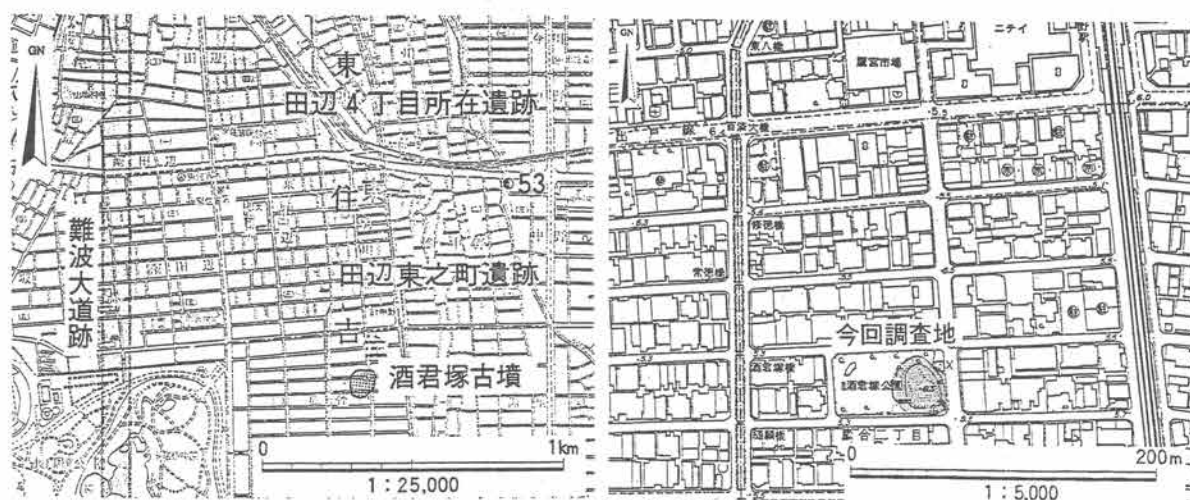


図1 調査地位置図

〈調査の結果〉

1. 層序(図2)

本調査では第1～3トレンチを設定して断面観察を行ったが、ここでは古墳を南北に断割った形になった第1および第3トレンチの層序について述べる。

第1層：黒褐色砂礫混りシルトで、地山および黒褐色含礫シルトの偽礫を含む。本層は層厚が0.2～0.4mあり、上部は植物擾乱を受けている。なお、石碑が立つ墳頂部の一段高い部分も本層準に含まれる。

第2層：太平洋戦争末期に墳丘の裾部に掘られた防空壕の埋土で、層厚は約1.5mある。大戦中の陶磁器や瓦・レンガなどを多量に含む。

第3層：にぶい黄色砂礫を主体とする水成層で、層厚は0.06m前後ある。

第4層：黄灰色シルトで、層厚は0.1m前後ある。本層は現代の水田の作土であるが、上部に黒色砂質シルトや地山の偽礫を多く含む。

第5層：黒色含礫シルトで、下層の作土の窪み内でのみ確認された。

第6層：本層は層厚が約0.4mあり、砂礫や粘土の含有量の違いから3層に分けられる。第6a層は層厚0.10～0.15mの黄灰色含砂礫粘土質シルト、第6b層は層厚0.1～0.2mの暗灰黄色含砂礫シルト、第6c層は層厚0.10～0.15mの黄褐色含砂礫シルトである。いずれも18～19世紀代の陶磁器や瓦の細片を含んでおり、江戸時代以降の水田の作土であろう。

第7層：黄灰色シルト混り砂礫で、層厚は0.2m前後ある。本層は礫を多く含むが、上面で踏込みが見られることから作土の可能性はある。瓦器や17世紀代の陶磁器の細片を含む。

第8層：黄灰色含砂礫粘土質シルトで、トレンチ北端の最深部で確認した作土である。本層の層厚は0.2m前後あり、瓦器の細片のほか、奈良～平安時代に属する平瓦が出土した。

第9層：砂礫・作土・古墳の墳丘盛土および地山の偽礫から構成された江戸時代以降の盛土である。本層については①酒君塚古墳の墳丘の項で述べる。

第10層：地山の偽礫を多量に含む暗褐色含砂礫粘土質シルトおよび黒褐色含礫シルトから成る盛土で、層厚は約0.4mある。後者は第11層を主体とするもので、ともに古墳の墳丘盛土である。

第11層：黒褐色含礫シルトで、層厚は0.1～0.2mある。上面の標高はTP+5.50～5.65mあり、トレンチの南から北に向かって低くなる。本層は庄内期の土器片を含むほか、下面で溝状の窪みが確認されたことから、弥生時代後期末～古墳時代前期の古表土層と思われる。

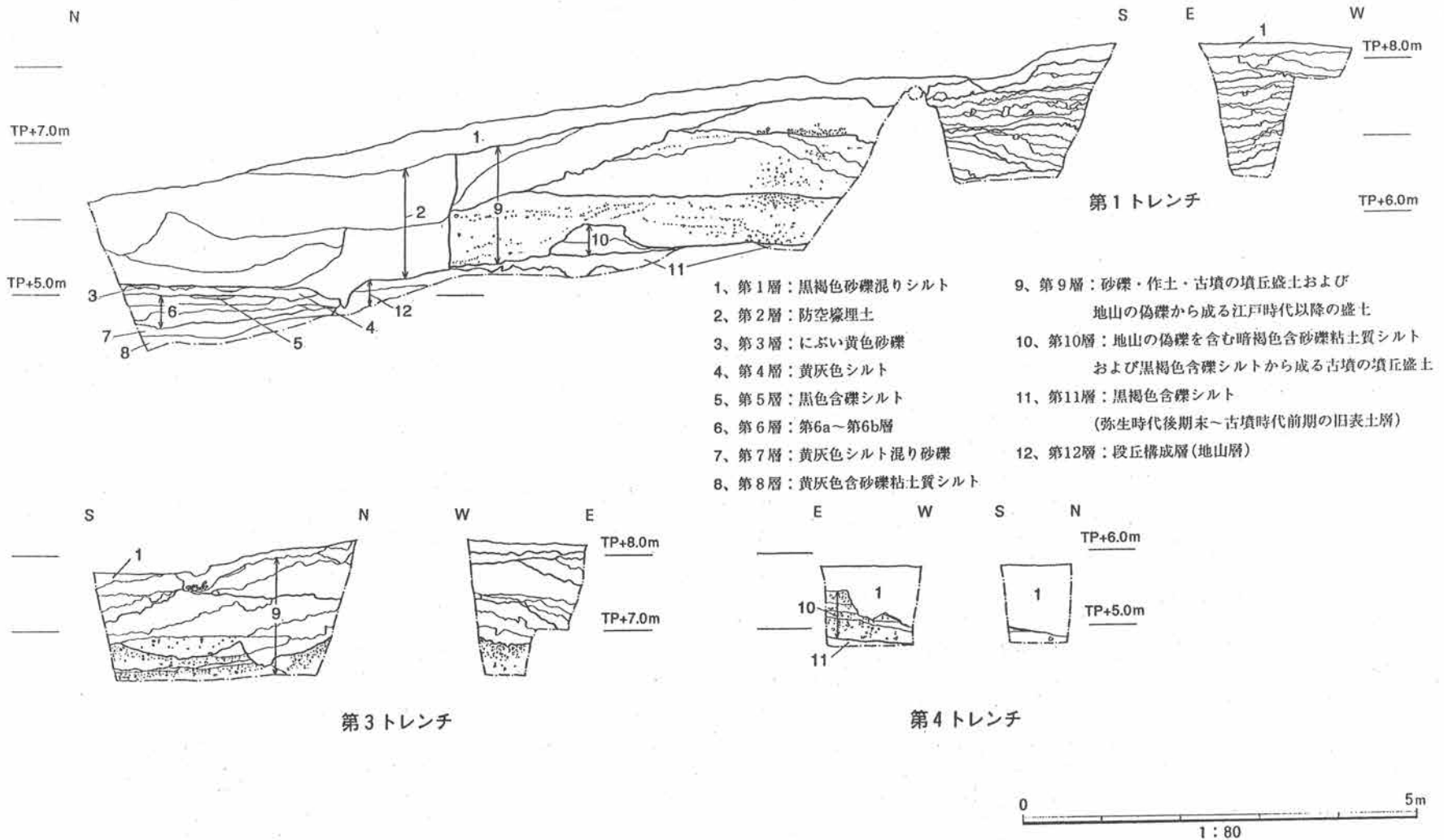
第12層：本層は当地域の段丘構成層とみられる地層で、上から下へ灰褐色含砂礫シルト・暗褐色含砂礫粘土質シルト・黒褐色砂礫混り粘土質シルト・白みをおびた褐色砂礫混りシルト・灰褐色シルト混り砂礫に移行している。上面の標高はTP+5m前後である。

2. 遺構と遺物

①酒君塚古墳の墳丘(図1・3)

古墳の現状は墳丘現況測量図に示したように、酒君塚の石碑が立つ墳頂部がTP+8.0m、墳丘裾部はTP+5.75mあり、高さが2.25mで不整形な形状を呈している。ただし、墳丘の南西部はTP+6.75

図2 第1・3・4トレンチ断面実測図



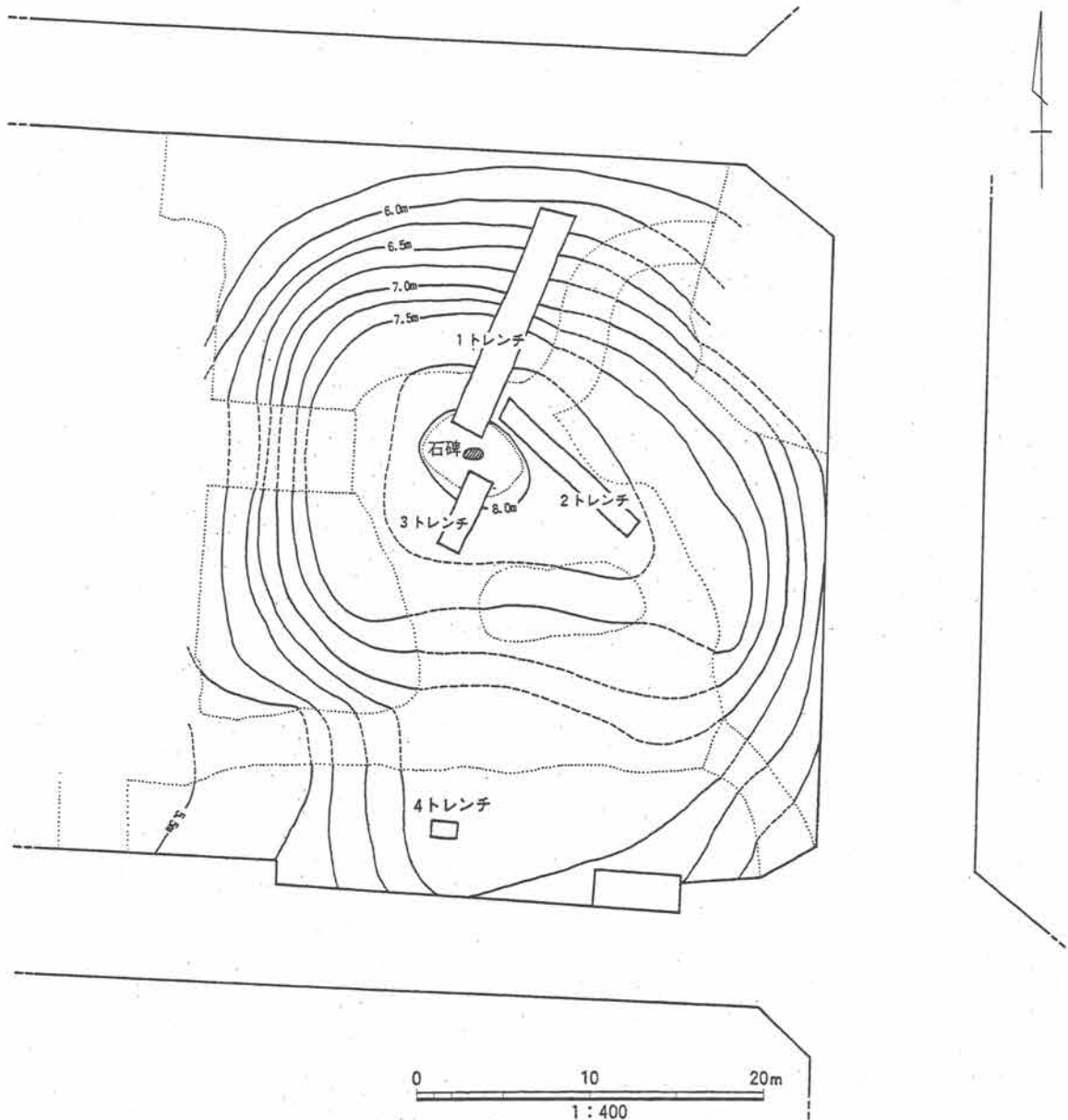


図3 酒君塚古墳墳丘現況測量図

m以下が前方後円墳のくびれ部のような形状を呈しているが、ここが古墳の旧状を留めているか否かについて本調査では明らかにできなかった。また、石碑から南側のコンターラインの幅が広がっているが、これは近年の公園整備に伴って大きく削平された部分である。従って、墳丘現況測量図のみでは酒君塚古墳の築造当初の形態については不明といわざるを得ない。次に第1～3トレンチの断面観察から墳丘の構築状況について概略を述べる。

本調査では、現在の酒君塚古墳の墳丘は江戸時代前半以降に再構築されたものであることが確認された。

酒君塚古墳の盛土は上部と下部に大きく二分される。上部は現在の表土層の直下にある盛土で、その厚さは第1トレンチで最大2.2mあった。盛土は古墳の残丘を基底として、厚さ0.7～0.9mの灰黄褐色シルト混り砂礫を水平に盛った後、作土を主体とした灰黄褐色砂礫混りシルトを円錐状に幅6.5

m、高さ約0.8m盛って、さらにこれの内側を明褐色砂礫や地山の偽礫が混った粘土質シルト、円筒埴輪・瓦器、17世紀代の陶磁器を含む褐色砂礫混りシルトで埋めて平坦面を造成している。この上に厚さ0.5~0.6mの地山や第11層の偽礫を多量に含む黄褐色砂礫混りシルトで盛土した後、盛土の斜面を保護するように黄褐色粘土質シルトで覆っている。その後、墳頂部中央に黄褐色砂礫混りシルトや地山の偽礫を含む褐色砂礫混りシルトを、直径約8m、厚さ0.3~0.5mの土饅頭状に盛ったようである。

上部盛土の構築時期は、盛土の最下層から17世紀代の肥前磁器や瓦片が出土したことから、江戸時代前半以降と考えられる。また、現在墳頂部にある石碑が明治34年に建立されたものであることを考慮すると、上部盛土の構築時期は石碑と同時期の可能性が高い[東成郡役所1922]。

江戸時代の盛土の直下から検出された古墳の盛土には、第11層をはじめ、地山の偽礫を用いていた。また、狭小な第1トレンチではあったが、円筒埴輪片を伴う墳丘の残存部が検出されたほか、墳丘の南部に設けられた電気工事用のピット(第4トレンチとして活用)でも現地表下約0.2mから地山ならびに第11層の偽礫を含む盛土を確認した。これらの盛土の直下にある第11層は既述したように古墳の墳丘を構築した際の旧表土と考えられるものであり、第1~4トレンチにかけて分布していることが確認された。以上のことを考慮すると、江戸時代以後に構築された盛土の下には長径約40m、短径35m以上、高さ2m前後の古墳が存在する可能性が高い。

古墳に伴う遺物としては第1・3トレンチから出土した円筒埴輪や形象埴輪の破片がある。円筒埴輪2~5は第1トレンチの墳丘直上で、衣蓋形埴輪1、円筒埴輪6は第3トレンチの江戸時代以降の盛土の下部から出土したものである(図4)。

円筒埴輪2~4の調整は内外面ともに細かいタテハケ、3・4のタガは断面台形で突出度の高いもので

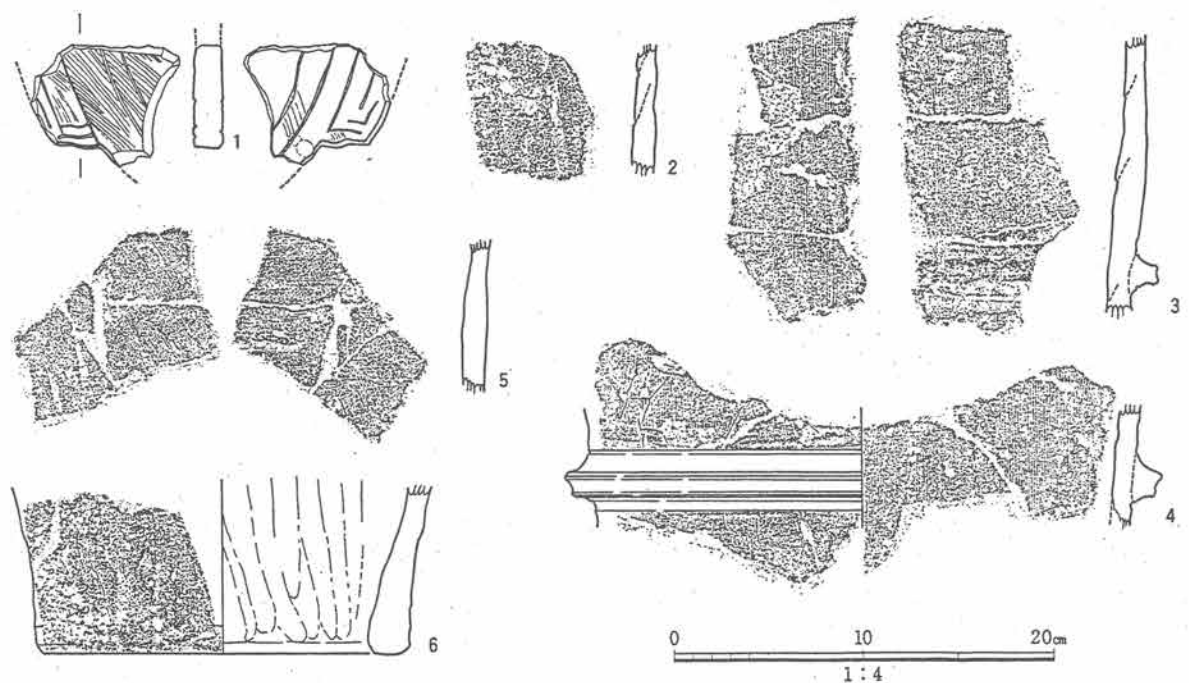


図4 遺物実測図

ある。5は円筒埴輪の体部片で、外面が1次調整のタテハケの後、A種ヨコハケ、内面はタテハケである。外面には焼成前に赤色顔料(ベンガラ)が塗布されている。1は衣蓋形埴輪の立飾りの破片で、鱗付きである。器体の内外面にハケ調整の後、線刻を施している。6は円筒埴輪の基底部で、調整は外面がタテハケ、内面は縦方向のユビナデである。以上の埴輪類の色調は黄橙色を呈しており、焼成は野焼きによっている。胎土中に0.5~3.0mmの長石・石英・角閃石・チャート粒を含むことから、在地産の埴輪であろう。以上の埴輪は川西埴輪編年[川西宏幸1978]のⅡ期に属するものであり、長原古墳群中の40号墳の埴輪と同時期と考えられる。

〈まとめ〉

今回は狭小なトレンチ調査であったが、既述したような酒君塚古墳の墳丘の構造に関する資料をはじめ、古墳の築造時期やその後の変遷を明らかにするための資料を得ることができた。特に、現在の酒君塚古墳の墳丘は、削平された古墳の墳丘上に江戸時代以降に約2mもの盛土を行って構築されたものであることが明らかになった意義は大きい。後世に再度盛土を行った要因については断定しがたいが、墳丘頂部にある明治34年3月に建立された酒君塚碑を考慮すれば、当時地元にあった酒君伝承を受けて、古墳の墳丘上に大規模な盛土がなされたものと思われる。

1903年に大阪府から刊行された『大阪府誌』第5編によれば、酒君塚古墳のある鷹合2丁目付近は古くは「鷹甘邑」と呼ばれており、ここの田圃の中にある東西南北ともに18間(約32m)で、高さが1丈(約3m)あまりの「平塚」と称する古墳は、百済王孫の酒君の墳墓の伝承があると記載されている。今回の調査で確認された古墳は規模や形状からみて、「平塚」の可能性が極めて高いものといえる。なお、酒君塚古墳のある東住吉区鷹合町・桑津町・山坂町一帯の洪積段丘上には、かつて5~6世紀に築造された田辺古墳群が分布していたことが地積図や近年の発掘調査の成果から明らかにされている[堀田啓一1979]。現在、酒君塚古墳「平塚」は田辺古墳群では最も南に位置する古墳であり、規模や築造時期からみて、当地域の盟主墳の一つと考えられる。

一方、古墳の墳丘直下で確認された庄内期の土器を包含する旧表土層は、当地域に弥生時代後期末~古墳時代前期の遺跡が存在することを裏付けている。当該期の遺跡としては、古墳の南方600~800mに位置する矢田2丁目所在遺跡・矢田部遺跡・照ヶ丘矢田遺跡などが知られており、本遺跡もこれらの遺跡とともに南から北に派生した段丘構成層が高くなった場所に営まれた集落遺跡と考えられる。

今後は酒君塚古墳のみならず周辺部についても遺跡の範囲確認調査などを実施する必要があるだろう。

参考文献

大阪府1903、「鷹合邑」：『大阪府誌』第5編

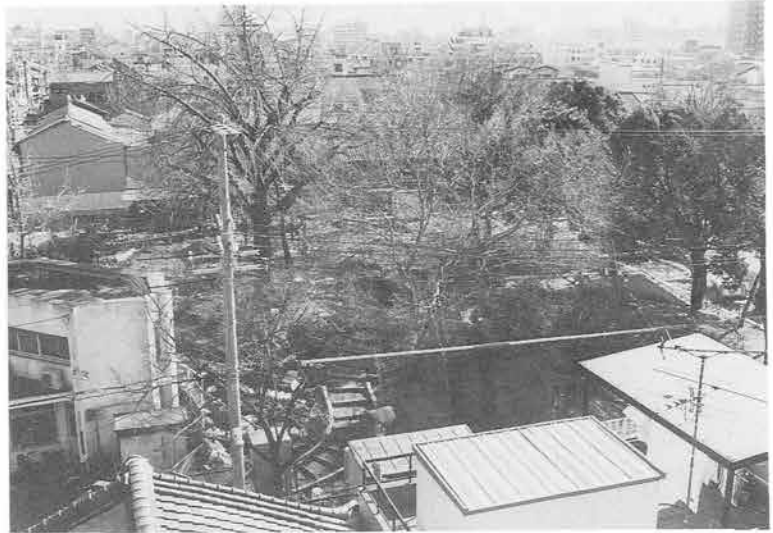
東成郡役所1922、『東成郡誌』(下)

川西宏幸1978、「円筒埴輪総論」：『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会

堀田啓一1979、「古墳時代の大阪」：井上薫編『大阪の歴史』 創元社

田中泰子1998、「酒君塚古墳の採集埴輪について」：『大阪の歴史』51 大阪市史編集所

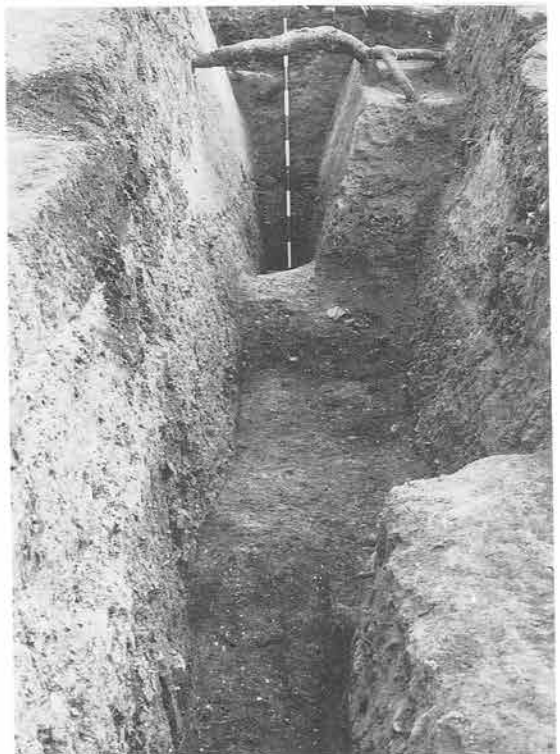
酒君塚古墳全景
(北から)



第1トレンチ
江戸時代盛土全景
(北から)



第1トレンチ
墳丘残存部検出状況
(北から)



山坂遺跡発掘調査(Y P 01-3)報告書

- ・調査箇所 大阪市東住吉区山坂2丁目93-62
- ・調査面積 約30m²
- ・調査期間 平成14年3月25日～平成14年3月27日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 京嶋覚・宮本康治

〈調査に至る経緯と経過〉

本調査地は山坂神社の北西にあり、山坂遺跡の北部に位置している。近辺においては、山坂神社の北側で難波大道跡として2回の本調査が行われている(図1)。そこでは小規模な調査ながら、6世紀代の掘立柱建物跡など多数の遺構が検出されており、当該時期の集落跡が存在していたことが明らかとなった。それらの結果から、一帯について、難波大道跡から独立した遺跡である山坂遺跡として周知されるにいたっている。

当地において建設工事が計画され、先立って試掘調査を行った。その際、遺物包含層が確認され、大阪市教育委員会と事業者との協議の結果、本調査を行うことになった。調査は平成14年3月25日に開始し、旧耕土の基底まで重機で掘削し、以下では手掘りにより調査を進めた(図2)。同月27日に現地での作業を終了した。

なお、方位については基準点測量を行っていないため磁北を示し、水準値はTP値である(註)。

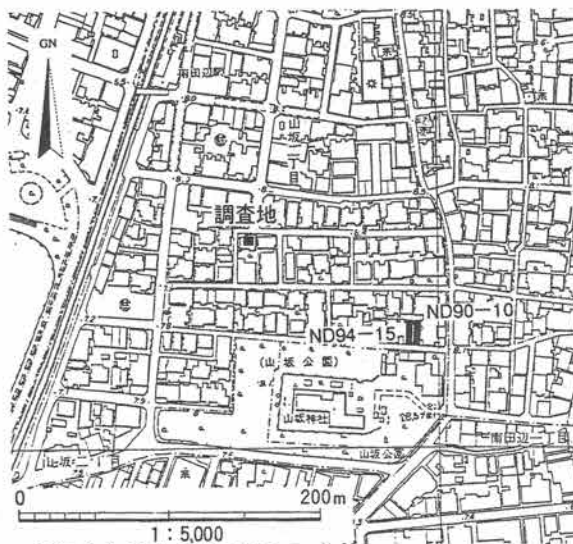


図1 調査地位置図

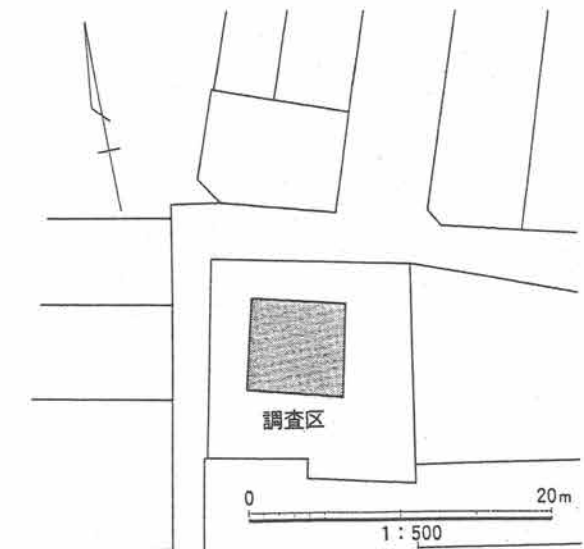


図2 調査区配置図

〈調査の結果〉

1. 層序(図3)

調査地は周辺の道路面より若干高い状態であり、現地表面でTP+8.5~8.6mである。

第1層：明赤褐色礫混り細粒砂層で現代盛土である。層厚は0.1~0.3mである。

第2層：明赤褐色細粒砂混り粘土質シルト層で旧耕土である。層厚は0.2m前後である。

第3層：明赤褐~明褐色シルト質粘土層で層厚は約0.2mである。試掘時に土器片が出土しているが、詳細な時期は不明である。

第4層：橙~明褐色細粒砂質シルト層で地山である。上面では乾痕が顕著に観察された。

2. 遺構と遺物(図3)

遺構の検出は、第2層基底面と第3層基底面すなわち第4層地山の上面で行った。

第2層基底面では遺構は検出されなかった。第3層を掘削し検出作業を行ったが、第3層から遺物は出土せず、時期は決定できていない。第3層基底面すなわち地山上面では、調査区の南で落込みSX01~03と、小穴群が検出された。SX01~03はいずれも平面形が整わず下面に凹凸があり、埋土には地山に由来する偽礫を多く含んでいる。これらの落込みは以上の特徴からみて、倒木痕など非人為的なものである可能性が高いと考えられた。小穴群についても植物の根の痕跡などが多く含まれているものとみられた。

〈まとめ〉

今回の調査では顕著な遺構・遺物は検出されず、近辺の状況から予想された古墳時代集落にかかわる知見は得ることができなかった。調査地は周辺の道路などよりわずかではあるが高く、大規模な削平を受けていない可能性がある。そうしたことからみて、本調査地の状況は古墳時代集落の広がりなどを考えていく上でひとつのてがかりとなろう。一帯での調査例はまだごくわずかであり、今後とも調査成果を蓄積していくことが重要である。

(註) 水準値については、近辺に良好な水準点がなかったため、2,500分の1都市計画図に示される路面上の標高を使用している。

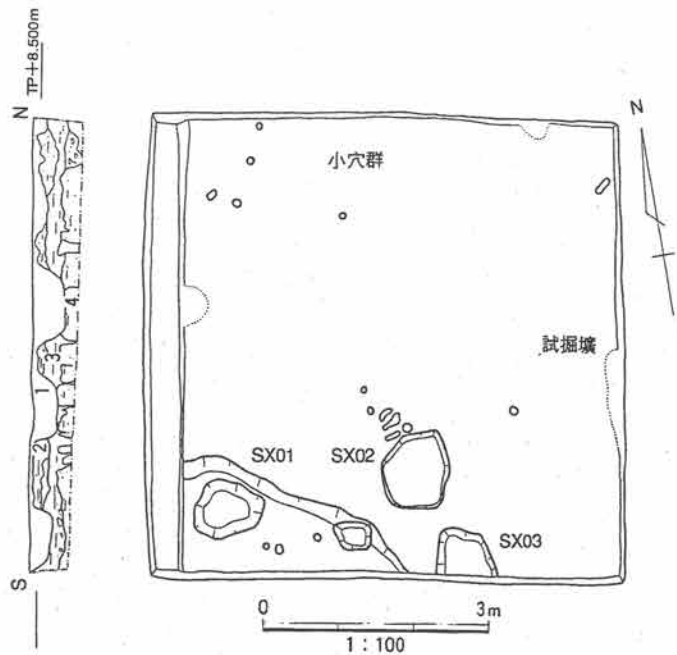
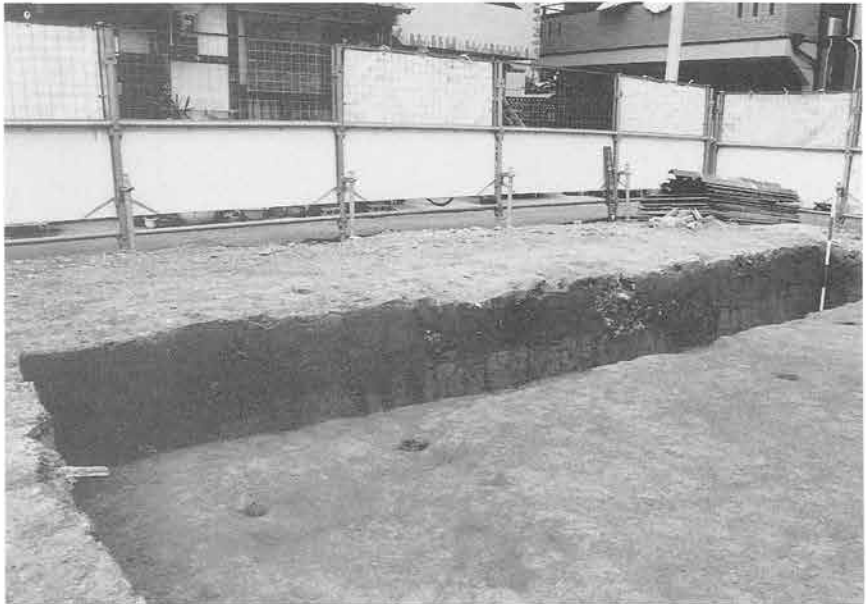


図3 調査区平・断面図

調査開始時の状況
(北東から)



西壁断面
(南東から)



地山上面全景
(東から)



XI 平 野 区

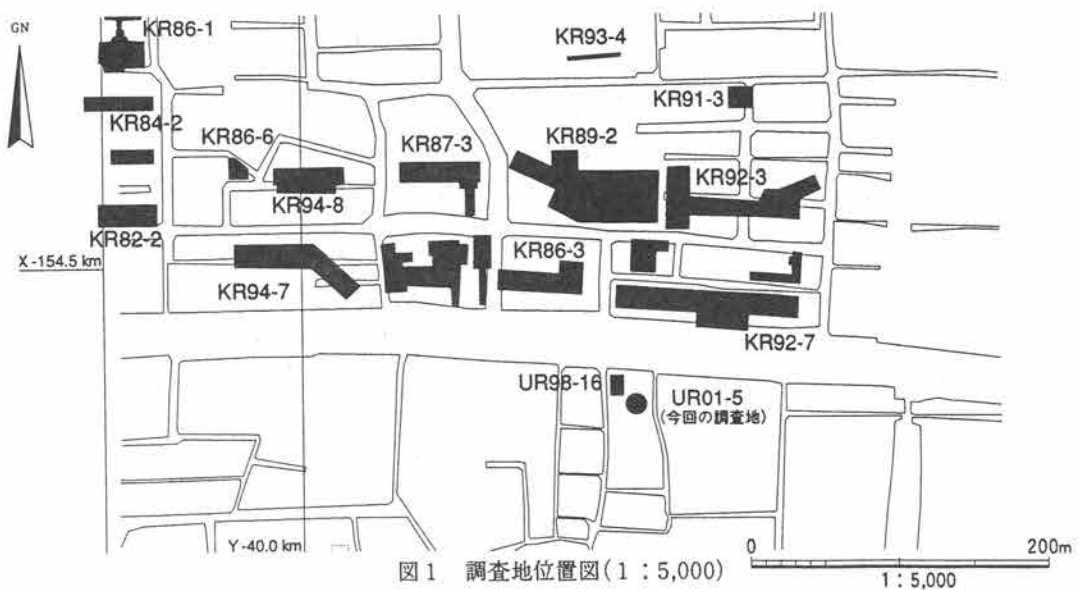
瓜破遺跡発掘調査(U R 01-5)報告書

- ・調査箇所 大阪市平野区瓜破東2丁目693-1
- ・調査面積 約50m²
- ・調査期間 平成13年5月21日～平成13年5月31日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 調査課長 京嶋覚・杉本厚典

〈調査に至る経緯と経過〉

本調査地点は瓜破遺跡の北東端に位置し、東に長原遺跡、北に喜連東遺跡が隣接する。長居公園通りを挟んだ北側の喜連東遺跡では奈良時代の飛雲文軒平瓦、平安時代の掘立柱建物群、鎌倉～室町時代の溝をめぐらした掘立柱建物群、室町時代の廟堂建物跡などが検出され、この地域の拠点集落であったと推定されている[森ほか1987、京嶋ほか1990、佐藤ほか1992、大阪市文化財協会1999a]。調査地点はこの集落の南側に位置する。本調査地の西隣ではUR98-16次調査が行われ平安時代の掘立柱建物2棟、鎌倉～室町時代の溝2条が検出され、古代から中世にかけての遺構が長居公園通り南側にも分布していることが明らかとなった[大阪市文化財協会1999b]。

平成13年4月17日に試掘調査を行ったところ、中世の遺物を含む遺構が検出された。この結果を受けて大阪市教育委員会によって再度試掘調査が行われ、溝とピットの存在が確認されたため、5月21日から本調査となった。現代の盛土を重機で除去したのち、地山直上で溝・土壇・柱穴・井戸の各遺構を検出し掘り下げを行った。また井戸跡は北半部が見つかったが、遺構が深く完掘できない



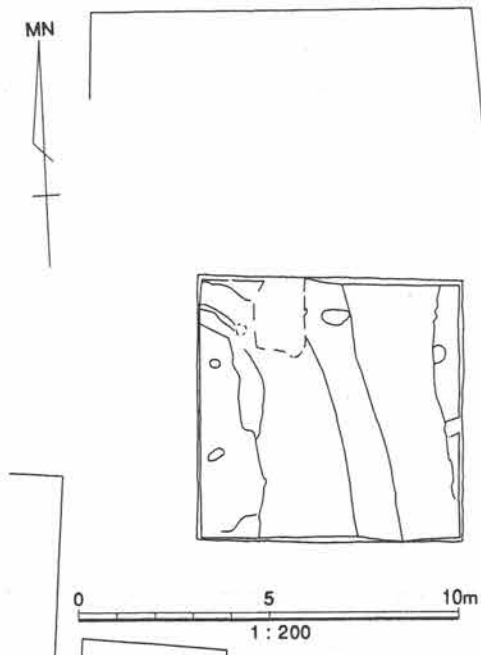


図2 調査区位置図

状況にあった。そこで事業者および大阪市教育委員会と協議のうえ、調査区を南に約4m拡張して井戸全体を掘り下げた。すべての調査は5月28日に終了した。調査で用いた方位は磁北、水準値はT.P.値である。

〈調査の結果〉

1. 層序(図3)

現地表下約20cmで地山面に達した。地山上面の標高はTP+8.5mと、周辺調査地と比べてやや高い。近～現代の作土層以下、地山層を含む3層に大別することができた。

第1層：灰褐色細粒砂～シルトで構成され、層厚は0.1～0.2mであった。調査区全体に分布していた。近～現代の作土である。

第2層：明黄褐色シルト質粘土で構成され、層厚は0.1mであった。調査区の中～東部に分布していた。調査区西部には浅い落込みがあり、その中に堆積したオリブ褐色細粒砂～シルトが、調査区中～東部に分布する第2層に対比される。層中より出土した陶磁器から、近世に形成された地層と考えられる。

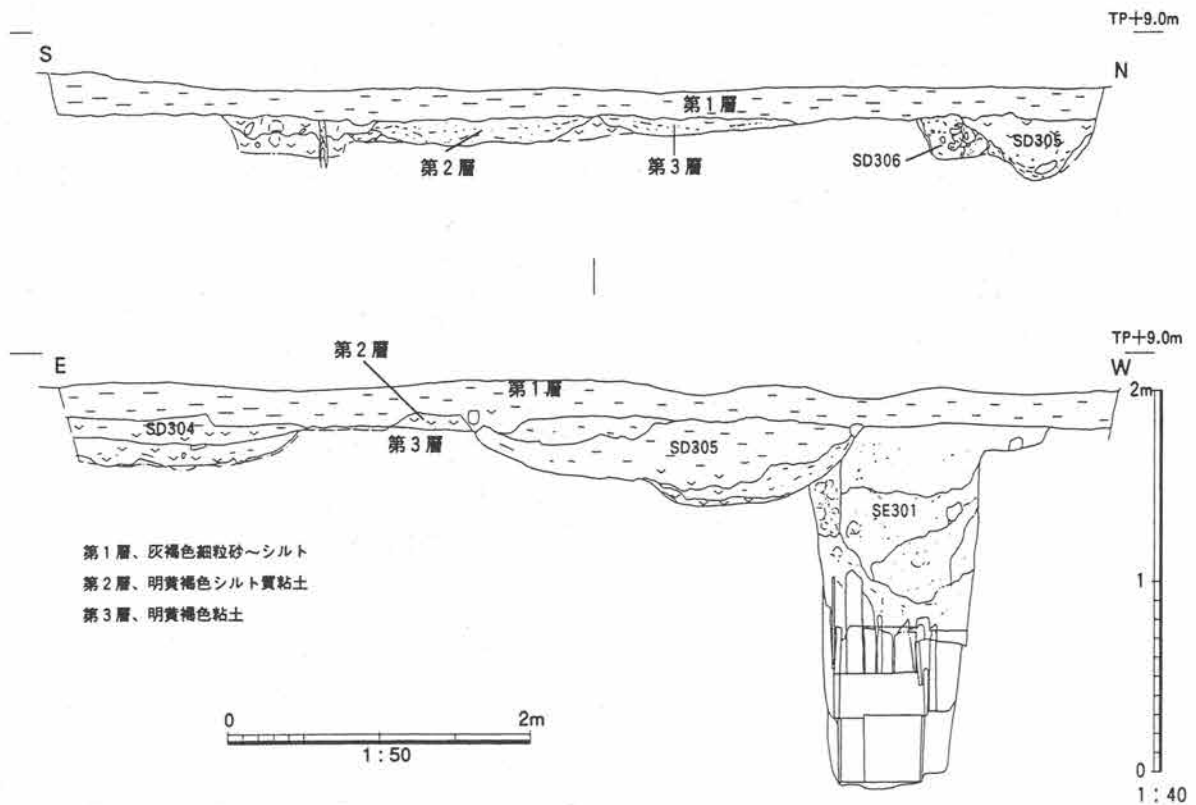
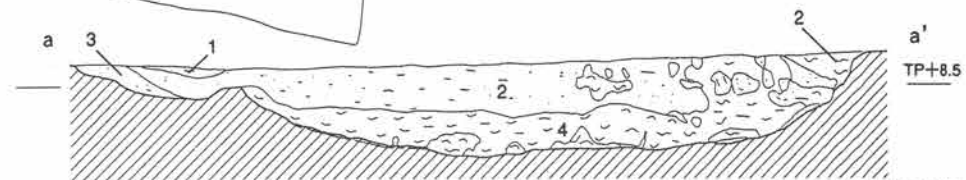
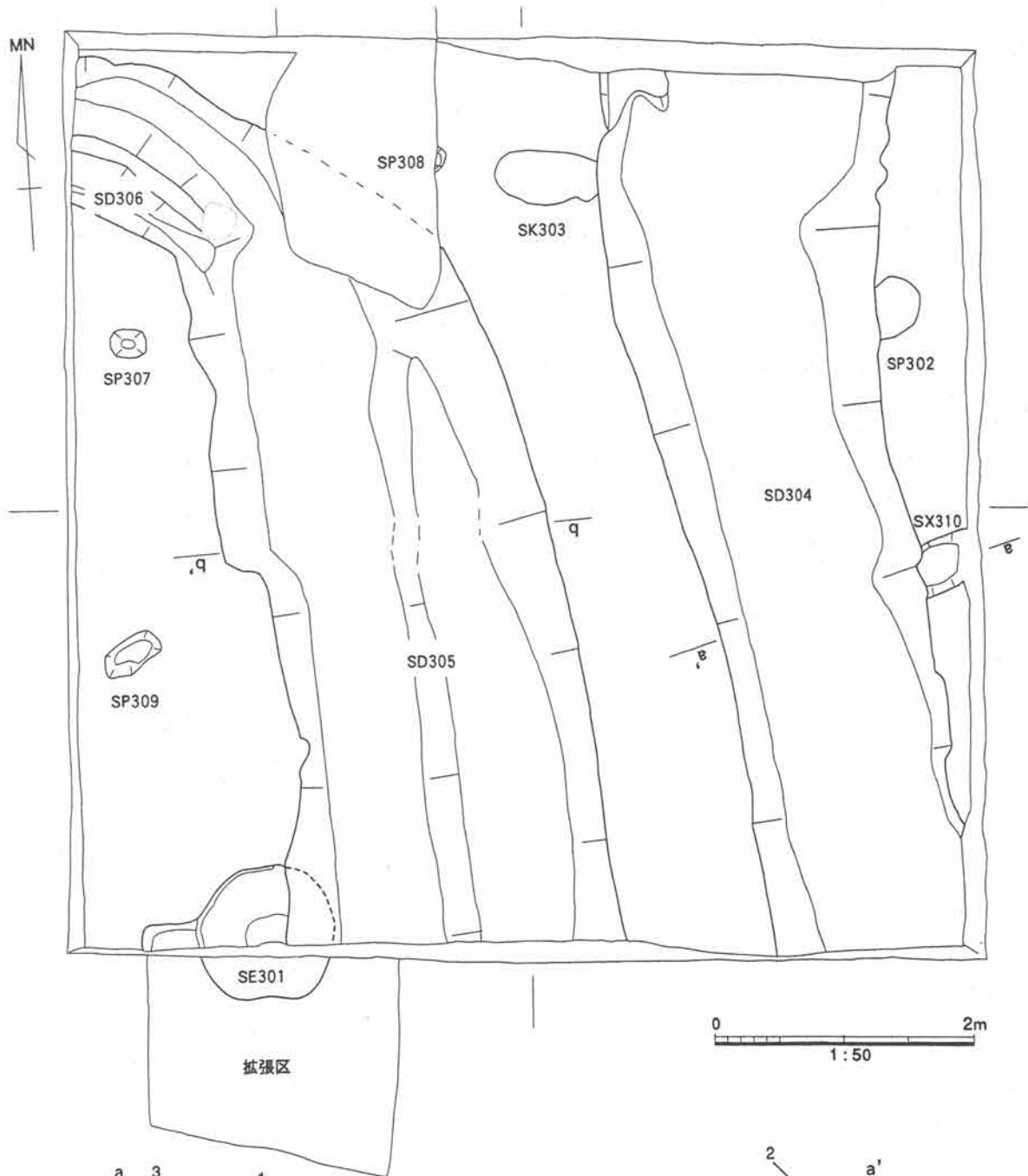
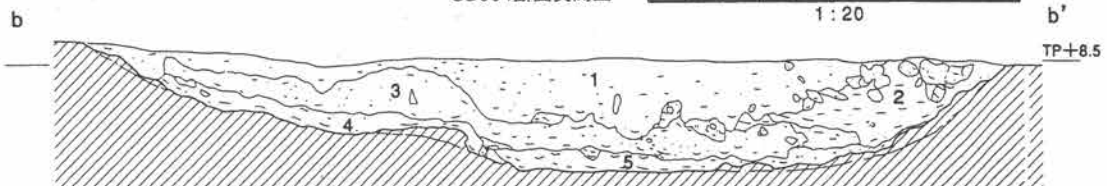


図3 調査地断面図(上：西壁、下：南壁、水平方向1:50、垂直方向1:40)



1、にぶい黄褐色シルト 2、にぶい黄褐色シルト偽礫混り細砂 3、黄褐色細砂 4、地山ブロック混り黄褐色細砂

SD304断面実測図



1、黄灰色細砂混りシルト 2、地山偽礫混り黄灰色細砂混りシルト 3、暗灰黄色シルト質粘土 4、暗灰黄色シルト 5、灰色粘土

SD305断面実測図

図4 第2層下面検出遺構平・断面図(その1)

第3層：明黄褐色粘土で構成されていた。硬く凝結しており、無遺物であることから地山とした。
 第3層はTP+8.0m付近で3～5cm大の亜円礫を含む粘土層に遷移し、さらにTP+6.72mで緑灰色の粗粒砂層となっていた。

2. 遺構と遺物

a. 平安時代

平安時代の遺構には柱穴1基(SP302)、土壇1基(SK303)、井戸1基(SE301)がある(図4～6)。
 SP302は東西0.56m以上、南北0.4mの楕円形で、深さ0.37mであった。遺構の西側はSD304によって切られていた。穴の底の西端部において、直径0.25mの円形で、深さ0.18mの窪みが認められた。埋土は黒～灰褐色の細粒砂中に4cm大の地山の偽礫が含まれていた。柱痕跡は認められなかったが、形状から柱穴と考えられる。埋土中より土師器の細片が出土した。

SK303は東西1.02m以上、南北0.68mの長円形で、深さ0.1mであった。遺構の東側はSD304によ

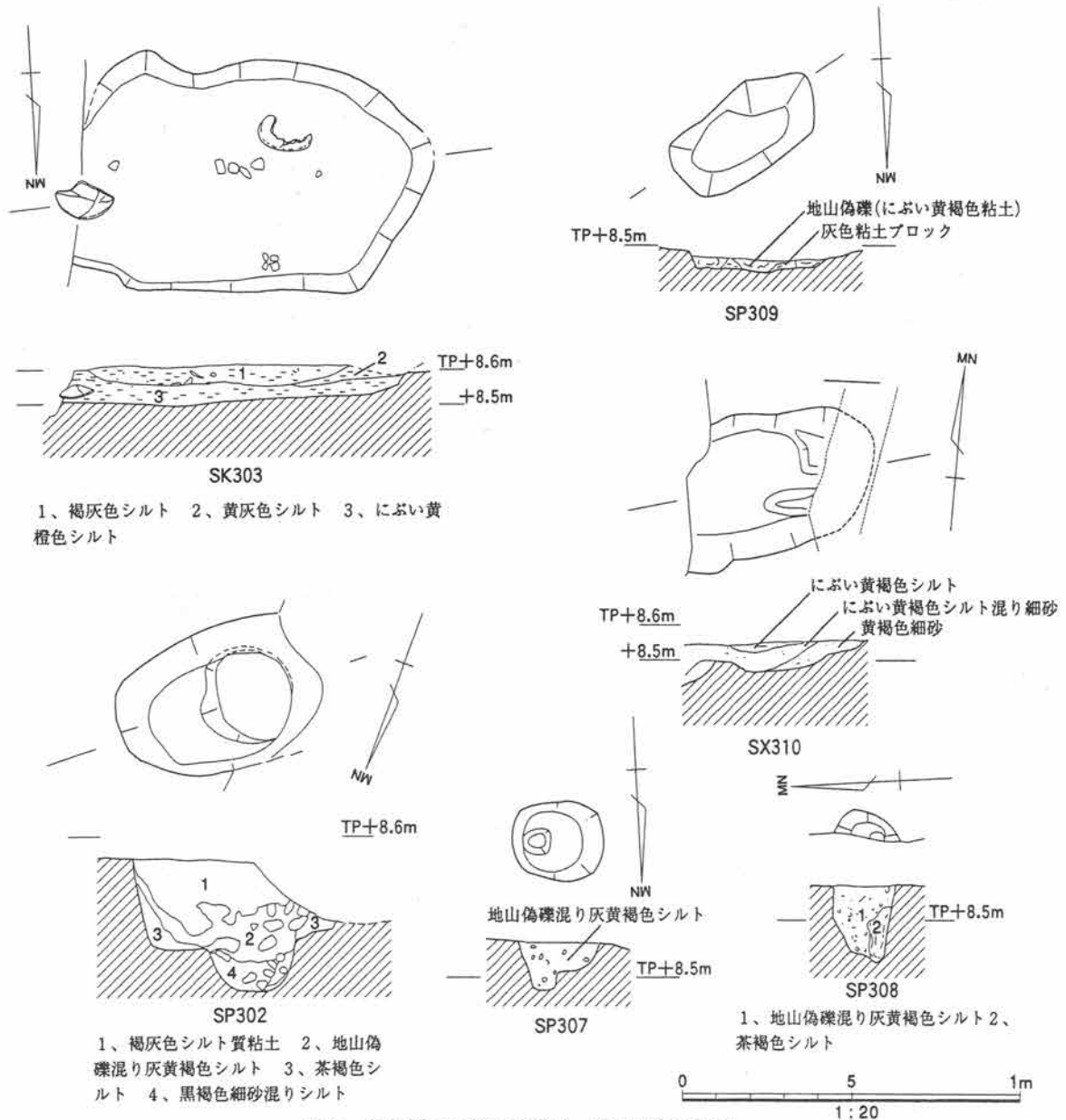


図5 第2層下面検出遺構平・断面図(その2)

て切られていた。埋土は3層に分れ、上層は褐灰色シルト、中層は黄灰色シルト、下層は黄灰色シルトであった。埋土中からは土師器杯・瓦器碗などが出土した(図7、1~4)。

1は土師器小皿Dで、口径9.4cm、器高1.6cmを測る。口縁部は強いヨコナデで整え、わずかに外反する。器壁は厚く、4mmである。2は口径14.0cm、器高3.0cmの土師器皿Dである。口縁部は強いヨコナデで整え、やや外反する。外面はユビオサエを施す。3は土師器皿Dで、口径15.2cm、器高2.9cmを測る。口縁部はヨコナデで整え、直口である。平底で外面にユビオサエが認められる。1~3は平安時代IV期古段階[佐藤隆1992]のものと考えられる。4は瓦器碗である。口縁部は外反し、口縁部内面に沈線が施される。外面はナデの後に横方向のミガキが施されており、ケズリの痕跡は認められない。内面は幅2mmのミガキを横方向に密に施しており、底部付近には暗文は認められない。これらの特徴から和泉型I-2型式に属すと考えられ、10世紀後葉ものとみられる[森島康雄1995]。

SE301(図6)は東西1.14m以上、南北1.4m、深さ1.81mであった。掘形は円形であり、井戸側は掘形の南壁に接して設けられていた。

井戸側は井戸の深さの下半分程度しか残っていなかった。薄い縦長の板材を密に接してめぐらせた外側(外枠)と、横板を蒸籠組した内側(内枠)より構成され、井戸側の下には曲物の側板を用いた水溜が設けられていた。水溜は湧水層である緑灰色粗粒砂層に置かれており、この粗粒砂層中からは調査時にも湧水があった。

井戸側は内枠2段と外枠の一部が遺存していた。井戸側内枠部材(図10、58・59)は横53cm、縦28cm、厚さ3cmの板目板に縦9~18cm、横1.5~1.8cmの方形の抉りを入れたもので、これを4枚用いて蒸籠組みにしていた。下段北西隅に穴が認められたが、枠材の外側に曲物の側板の一部を充填して補修していた。

井戸側外枠は東辺のものが高さ約60cm残っていたのに対し、西・南のものは高さ約10cmと残存状況は悪かった。また外枠北辺は西のものほど大きく欠損していた。井戸側材の抜き取り穴に当たる部分において外枠材の破損が著しいことから、自然に腐朽したものというより、井戸側を抜き取った際に壊れたものと考えられる。

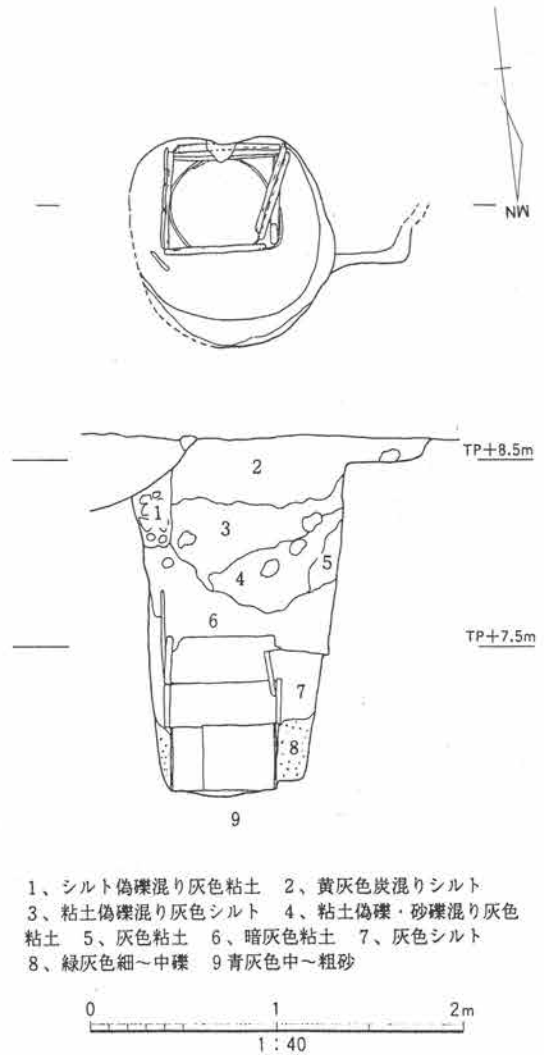


図6 第2層下面検出SE301平・断面図

井戸の埋土は井戸側の外縁、井戸側の内部、井戸側上端から検出面までの3層に大別される。井戸側の外から井戸掘形にかけての埋土は5cm大の円礫を含んだ粗粒砂層であった。この粗粒砂は緑灰色を呈し、湧水層のものと類似していた。また円礫は地山の中でも、井戸側上段の位置するTP+8.0m前後のレベルにのみ見られた。これらの地山に起源する砂礫は、井戸掘削時に掘り起こされたものであり、井戸側を固定する時に置かれた裏込めの土である。この裏込め土は井戸側の遺存する個所に認められ、井戸側東辺部分のものは層の上面を井戸側の外枠に沿って掘り込まれていた。井戸側を抜取った時の加工痕と考えられる。

水溜から井戸側下段にかけては粘土～中粒砂の水成層が、水溜内には灰褐色粘土が堆積していた。機能時堆積層である。この層の上面で完形の土師器皿が出土した(図7、11・13・15)。また井戸側内は中～粗粒砂の互層であった。井戸機能停止後の堆積と考えられる。この層の上部には直径3cmのシルトの偽礫が入っていたことから、井戸が使用されなくなりしばらく経ってから埋め戻されたと考えられる。

井戸側の遺存するレベルから検出面にかけて、偽礫を多く含む砂礫やシルトが堆積していた。井戸側抜取り穴を埋め戻した時の堆積である。約80cm埋戻した後、TP+8.3mの位置でほぼ完形の土師器杯・皿が6点出土した(図7、5・6・9・12・18)。これらは井戸の埋戻しが完了した時点で埋められたものと考えられる。

SE301より出土した遺物は土師器(図7、5～18)、瓦器(図7、19)、瓦(図9、54～56)である。

5～10は土師器小皿Cである。5～9は器壁が3mm前後と厚く、丸底である。また口縁端部のつまみ上げは鈍い。それに対して10は、器壁が2mm前後とやや薄く、平底であり、口縁端部のつまみ上げも明瞭である。前者は平安時代Ⅲ期新段階、後者は平安時代Ⅲ期古段階に属すると考えられる。11・12は土師器小皿Dである。11は口径8.8cm、器高2.0cmである。口縁部はヨコナデで整える。底部外面はユビオサエの後、ナデを施す。12は口径9.6cm、器高2.0cmである。口縁部はヨコナデで整え、直口である。底部外面はユビオサエ後、ナデを施す。器壁が4～5mmと厚い。13は土師器皿である。口径11.2cm、器高2.4cmである。内外面を密に横方向のミガキで調整し、底部外面に浅いケズリを施す。口縁部は直口で、端部は内側にやや肥厚する。14・15は土師器杯Aである。14は口径13.6cm、器高3.2cmである。口縁部はヨコナデで整え、わずかに外反する。底部外面はユビオサエ後、ナデを施す。15は口径14.4cm、器高4cmである。口縁部はヨコナデで整えており、ゆるやかに外反する。底部はやや上げ底ぎみで、外面はユビオサエ後ナデを施す。16は土師器杯Bである可能性が高い。口径15.2cmである。口縁部は強いヨコナデで整え外反する。17・18は土師器皿Eである。17は口径13.5cm、器高3.0cmである。土師器皿Cに高さ1cmの高台が付いた独特の形態である。口縁部・高台部分とも強いヨコナデで調整する。18は土師器杯Bに分類されるかもしれないが、高台が土師器杯Bに比べ明らかに高く、高台付きの杯Aとみられる。口径15.2cm、器高4.6cm、高台高1.2cmである。口縁部・高台部分とも強いヨコナデで調整する。19は瓦器である。内面にはミガキが密に施されているが、暗文は認められない。和泉型Ⅰ期のものである可能性が高い。

また井戸側抜取り穴埋土から平瓦(図9、54～56)が出土した。54は須恵質の平瓦で凸面に格子目

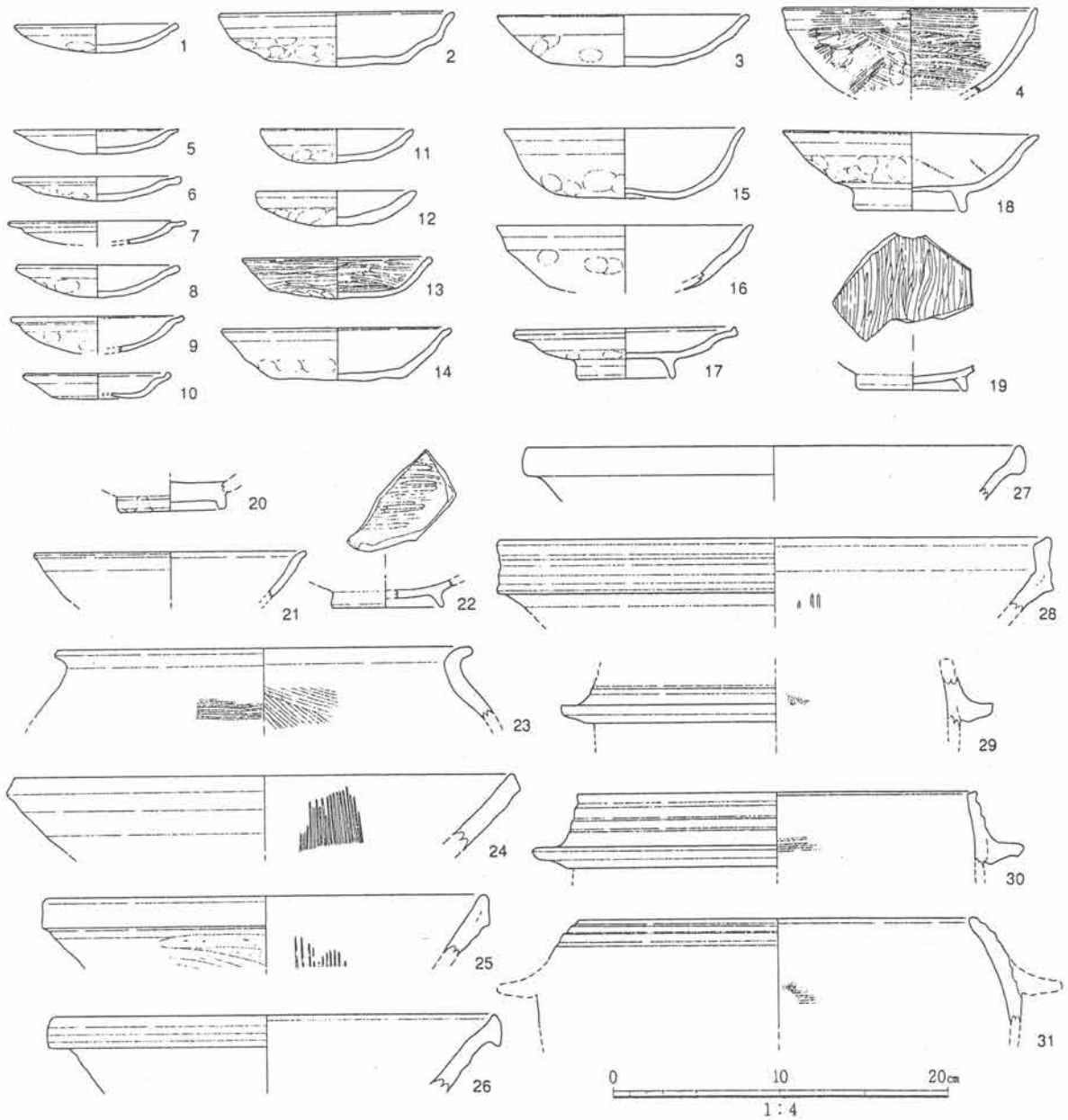


図7 各遺構出土の土器・陶磁器(その1)

1～4 : SK303、5～19 : SE301、20～31 : SD304

タタキが認められる。長辺はヘラ切りで整形したままで、凹面側に余分な粘土がはみ出している。55・56は凸面に縄目タタキ、内面に細かな布目痕跡が認められる。55は凹面の短縁部を幅3cmにわたってケズリを施している。56は須恵質の平瓦で、長辺を2回にわたってヘラ切りで整形している。

曲物(図10、57)は長径50.1cm、短径48cmの円形で、高さ35cmである。側板は厚さ3mmで、内面には3～8cm間隔で縦方向に切り目が幾筋も入れられている。

綴じ合わせは樹皮を用いて行っている。外1列6段綴じである。綴じの上端は、樹皮を直径1.5mm、長さ3cmの棒に巻き付けている。綴じの下端は内から外へ折り返し、タガと側板の隙間に挟み込んでいる。

タガは幅12cmであり、上下2段に鉢巻き状に施す。上段は左前に合わせ、左を1列3段、右を2列

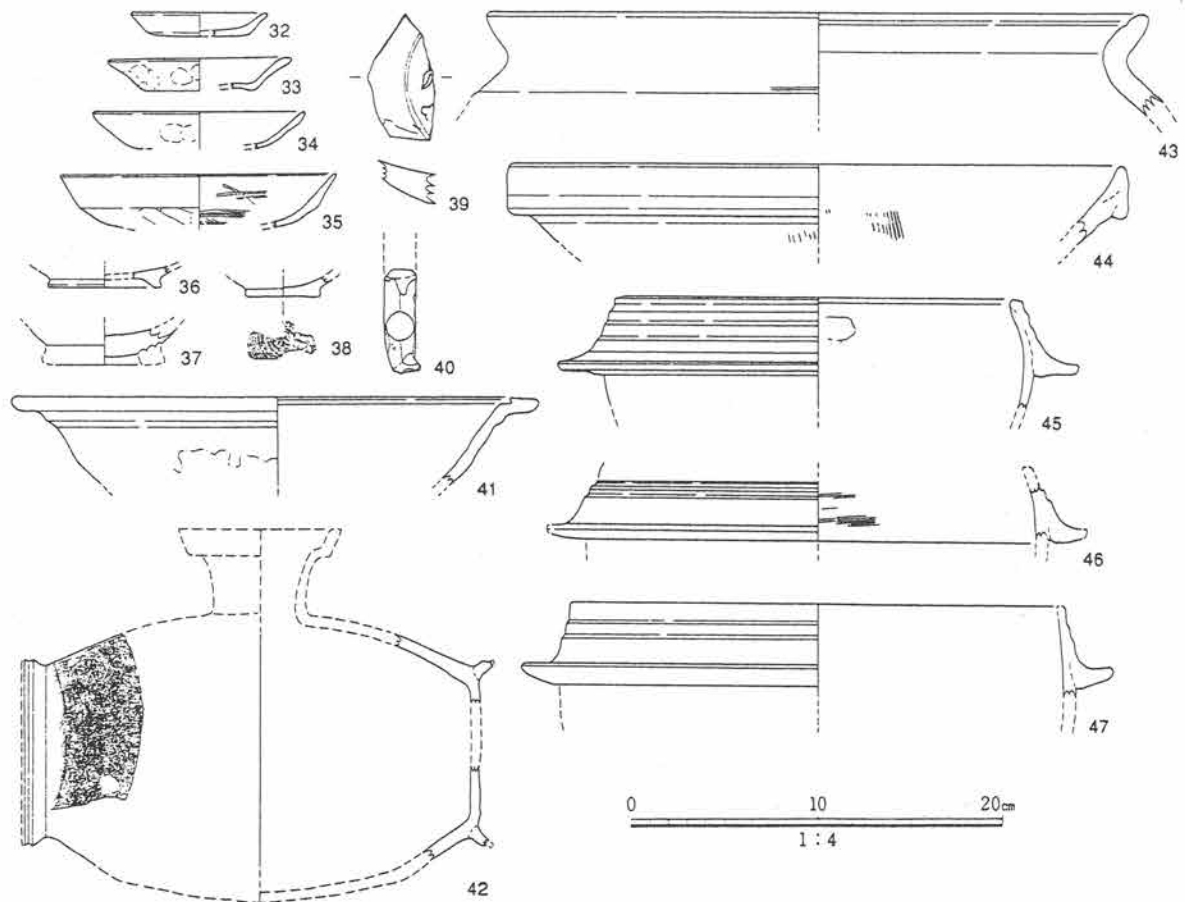


図8 各遺構出土の土器・陶磁器(その2)

32~47: SD305

2段で綴じる。下段は右前に合わせ、左右それぞれを1列1段で綴じる。また下端から1~3cmの所に、径1.5mmの木釘を約4cm間隔で打ち、タガと側板をとめている。

底板は無いものの、側板内面に見られる木釘が、下端から1cmの位置に並び、2cm程度の厚さの底板で、平底であったと考えられる。側板を綴じ合わせた部分が下端から2.3cm幅で、約4cmにわたって薄く削られている。このケズリによって綴皮の一部が欠損していることから、側板を綴じ合わせた後、底板をはめ込む時に施した調整と考えられる。

b. 鎌倉・室町時代

鎌倉・室町時代の遺構には溝2条(SD304・305・306)、小穴3基(SP307・308・309)、落込み(SX310)がある(図4・5)。

SD304は幅1.8m、深さ0.28mの南北方向の溝である。調査区北部でやや西に振っていた。SD305は幅2.3m、深さ0.3mの南北方向の溝で、調査区北部で屈曲して東西に延びていた。溝の東西部分は幅0.7m、深さ0.32mであった。この東西部分に平行してSD306が延びていた。SD306は幅0.4m以上、深さ0.24mの東西方向の溝で、東端でSD305に接していた。SD305下層は粘土で構成され比較的淘汰がよいことから水成層と考えられるが、それ以外の溝の埋土にはいずれも偽礫が含まれており、人為的に埋め戻されたものと判断される。以下、遺構ごとに遺物について報告する。

SD304の埋土中からは土師器・須恵器・瓦器・瓦など比較的多くの遺物が出土した(図8、20~31、

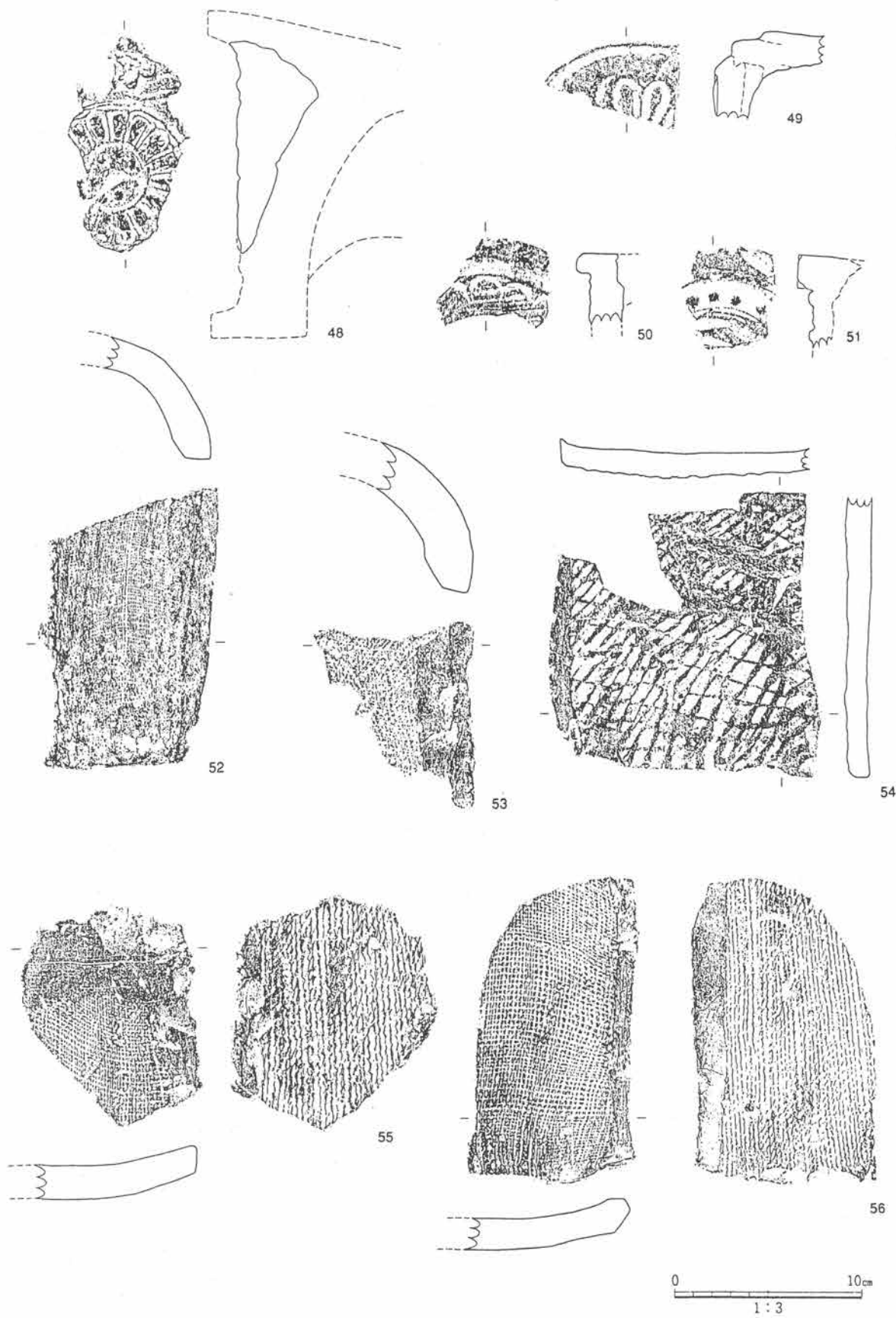


図9 各遺構出土の瓦

48 : SD305-306、49 : SD306、50~53 : SD304、54~56 : SE301

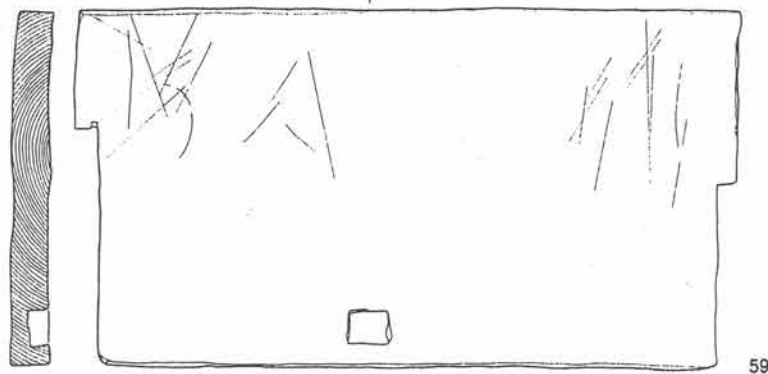
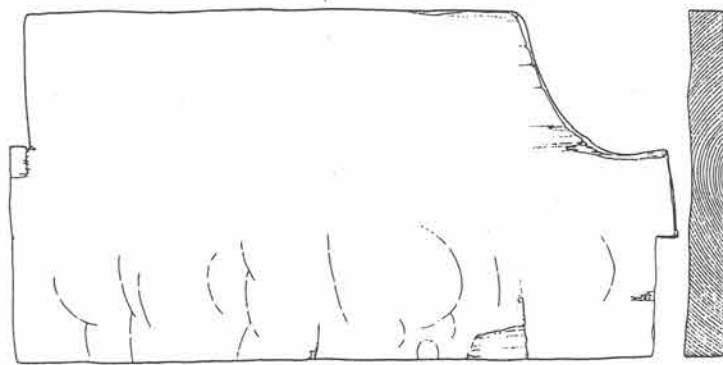
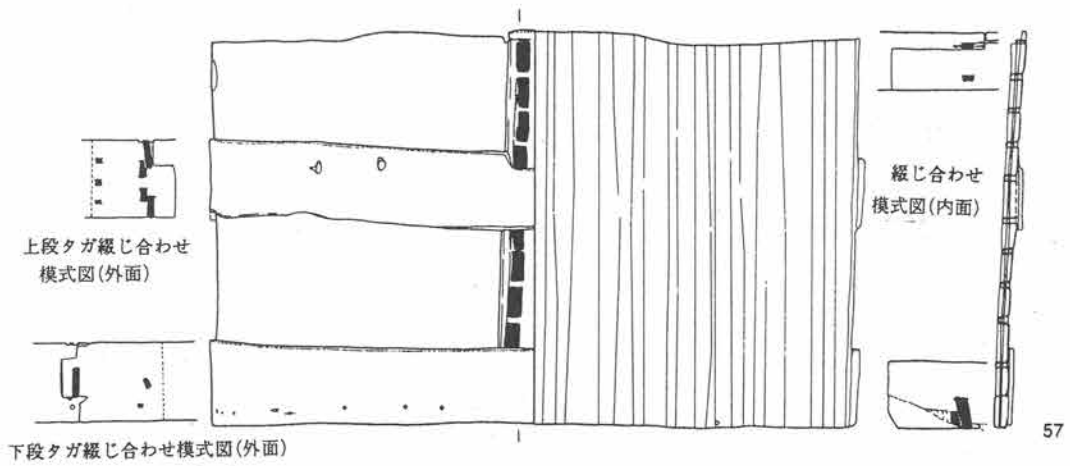


図10 SE301出土の木製品

図9、50～53)。20は青磁碗底部である。高台部分は無釉である。胎土は淡い黄橙色を呈する。21は青磁碗口縁部である。胎土は灰色を呈する。釉薬はオリーブがかった緑色であり、龍泉窯系のものと考えられる。22は瓦器椀である。磨滅が著しく内面の暗文は不明である。23は瓦質甕である。24は土師質の播鉢である。幅1mmの播り目が多数認められる。25は瓦質の播鉢である。26・27は須恵質の播鉢あるいは捏鉢と考えられる。26は口縁端部を上下に、また27は上に拡張しているが、いずれも口縁端部を丸く整えており、東播系と考えられる。28は備前焼播鉢である。口縁部の形状から、備

前焼V期のものと考えられる[伊藤晃1995]。29は土師質の釜である。30・31は瓦質の釜である。これらの出土遺物はいずれも16世紀後半のものとみられる。

土器・陶磁器以外にも軒丸瓦(図9、50・51)、丸瓦(図9、52・53)が出土した。50は複弁蓮華文軒丸瓦である。花卉は沈線で描かれている。子葉部分には平行する条線が観察される。范が磨耗しており、木目が瓦当面に転写されたものと考えられる。素地は粗く、1cm大のチャートの礫が含まれている。51は巴文軒丸瓦である。瓦質に焼成されており、巴文と珠文の間に圏線がめぐる。52は丸瓦で凹面に細かな布目痕が認められる。凹面短辺側にナデもしくはケズリ調整が施されている。53は瓦質に焼成された丸瓦で凹面にやや粗い布目痕が認められる。長辺を2回にわたってヘラ切りして整えている。

SD304と同様、SD305においても多数の土師器・須恵器・瓦器・瓦が出土した(図8、32~47、図9、48)。またSD306からは土師器の細片と共に複弁蓮華文軒丸瓦(図9、49)が出土した。

32~35は土師器皿である。32は土師器小皿Dである。口径7.2cm・器高1.2cmである。内外面ともナデ調整である。33は土師器小皿Dである。9.6cm・器高1.6cmである。外面にはユビオサエが顕著である。平底と考えられる。34は土師器皿Dである。口径11.5cm・器高1.9cmである。平底と考えられる。35は土師器皿Dである。口径14.5cmに復元される。口縁部は強いヨコナデで整える。36は土師器碗Bである。底径6.0cmを測る。外面には高台取り付け時の強いナデが認められる。37は須恵器壺Lの底部と考えられる。外面には高台の剥離痕が残る。38は緑釉の小型壺である。素地は須恵質である。底部外面はヘラ状工具によって鋭角的に整えられ、底部は糸切り底である。39は中国製青磁碗である。外面はケズリで整え無釉である。内面には花纹と考えられる陰刻が施されており、その上にオリブ緑色の釉が施される。40は瓦質脚付き釜の脚部である。先端を短くつまみ出して整えている。41は瀬戸・美濃焼灰釉鉢である。口縁部は短く外反し、端部を内側に折り曲げて平滑に整えている。外面にはやや淡い緑がかかった透明釉が施されている。42は樽形甕である。外面には波状文帯が認められる。胴部の張り出しが強い外形が想定され、TK208型式に属するものと考えられる。43は信楽焼の甕である。固く焼きしまっており、表面には薄い緑色の自然釉が認められる。内面には沈線がめぐらされている。44は備前焼播鉢である。内面には9本の播り目が認められる。口縁部の特徴から備前焼IV期後半に属し、16世紀前半のものと考えられる[伊藤1995]。45~47は瓦質釜である。口縁部外面には2ないし3条の沈線がめぐる。15世紀頃のものと考えられる。

48・49は複弁蓮華文軒丸瓦である。48はSD305・306より出土した。中房の蓮子は中央部を欠損するが、7個が認められる。外区には飛雲文が施されている。胎土は赤橙色で長石・チャートの砂粒を多く含む。49は子葉に二本の輪郭線が認められる。内側のものは子葉と相同形にめぐる。外側のものは一部しか残っていないが、2つの子葉を囲むようにめぐっていたものと考えられる。瓦当裏面には段が認められ、丸瓦の先端部がこれに接している。また内側から補強のための粘土が入れられている。胎土はにぶい黄橙色で、花崗岩の破片や長石の砂粒を多く含む。

SP307は東西0.27m、南北0.23mの楕円形で、深さ0.37mであった。穴の底には、東端に一辺0.07mの隅円方形で、深さ0.06mの窪みが認められた。埋土は灰黄褐色シルト中に2cm大の地山の偽礫

が含まれており、柱痕跡は認められなかった。また埋土中から瓦器の細片が出土した。

SP309は東西0.4m、南北0.2mの長円形で、深さ0.06mであった。埋土は黄橙色のシルトで構成され、2cm大の地山の偽礫が認められた。また埋土中から瓦器の細片が出土した。

SP308は試掘により西半を欠くが、直径0.19m、深さ0.23mの円形のピットに復元される。穴の底には南隅に直径4cm、深さ2cmの窪みが認められた。埋土は暗灰黄色のシルトで構成され、2cm大の地山の偽礫が認められた。また埋土中から瓦器の細片が出土した。

SX310は東西0.4m以上、南北0.42mの窪みであり、西端がSD304に接していた。埋土は3層に分かれ、このうち中層がSD304の上層と一連のにおい黄橙色のシルトであった。埋土内より瓦器の細片が出土した。

〈まとめ〉

今回の調査成果は以下の通りである。

1、平安時代の井戸と柱穴が検出された。柱穴は1基であり建物を想定することは困難であるが、井戸が存在すること、また調査区北に隣接するUR98-16次調査において同時期の掘立柱建物2棟が検出されていることから、調査区一帯が居住域であったと考えられる。喜連東遺跡で明らかにされている集落がさらに南へ広がることが確認された。

2、中世の溝と小穴が検出され、埋土中より多数の遺物が出土した。UR98-16次調査地では中世の遺構は検出されていなかったが、古代のみならず、中世の集落も本調査地付近に広がるようになった。

3、複弁蓮華文軒丸瓦が3点出土した。このような瓦を葺いた建物として成本廃寺が想定される。調査地の南一帯が成本廃寺の推定所在地となっているが、これらの瓦の出土により、付近に古代寺院が存在する可能性がさらに高まったと言える。

参考文献

伊藤晃1995、「中世陶器 4、備前」：中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』pp.412-424

大阪市文化財協会1999a、「喜連東遺跡発掘調査報告」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』7、pp.107

-195

大阪市文化財協会1999b、「本田氏による建設工事に伴う瓜破遺跡発掘調査(UR98-16)報告書」

京嶋覚・西畑佳恵・上野裕子1990、「平野区喜連東遺跡の奈良時代建物群」：大阪市文化財協会編『葦火』24号

佐藤隆・田島富慈美・久保和士・板野史1992、「喜連東遺跡の中世集落と中国製磁器」：大阪市文化財協会編『葦

火』40号

佐藤隆1992、「平安時代における長原遺跡の動向」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』V pp.102-

114

森毅・西畑佳恵1987、「喜連東遺跡「廟堂」跡の調査」：大阪市文化財協会編『葦火』9号

森島康雄1995、「瓦器椀」：中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社、pp.315-337

S E 301上部土器
出土状況
(北東から)



SE301完掘状況
(北から)



第2層下面検出遺構
(北から)



平成13年度 大阪市内埋蔵文化財
包蔵地発掘調査報告書

発行日 平成15年3月31日

発行 大阪市教育委員会
（助）大阪市文化財協会

編集 大阪市教育委員会文化財保護課
（大阪市北区中之島1-3-20）

印刷 一心堂印刷株式会社
